

に行つた一時の便法で、山西軍に投降したものでなかつたことは云へ、この一事によつても、當時國民軍敗走部隊の窮迫察するに餘りあるのである。然しか、る状態の下にも、一度馮玉祥モスクワを發し、歸國の途につくこの報傳はるや、平地泉及び五原の集中地點へは、第一、第二、第三各軍を合せて、五、六萬の兵が集つたが、何しろ戰敗直後のこと、加ふるに時恰かも嚴冬に際して飢寒交々迫り、士氣の沮喪極度に達し、一時北支那に覇を唱へた西北國民軍も、殆んど武力を以ての存在を失つた觀があつたのである。

馮玉祥の民國十五年八月十七日、モスクワを發し、庫倫を経て、その自動車の平地泉に到るや、親近者數人密かにこれを迎へ、四圍の形勢不利にして、到底頹勢挽回の見込みがないからきて、再び露國に遊ばんとを勧めたのも、當時の狀勢から推して、まことに當然のことであつた。しかるに馮玉祥の決心は牢固にして動かすべからず。彼は「余に捲土重來の成算あり」きて、親近者の切なる勸告を拒否し、九月十六日綏遠の五原に着した。

私はかねてから、ロシア引揚當時における馮玉祥の心事について、多大の興味をもつてゐたので、昨秋、彼を南京に訪ふた時も（第一章參照）「民國十五年八月、總司令は國民軍南口及び張家口に大敗すこの報を手にするや、突如露國より歸國の途に就かれた。敗けた時は成るべく遠く逃げるが通

なり。當時總司令の胸中、如何なる成算があつたのか」この極めて露骨卒直なる質問を發したところ、馮玉祥はその既往における革命軍人としての閱歷を述懐し、最後にロシア引揚當時の悲壯なる決心について左の如く語つた。

民國十五年の初め、打ち續く戰亂はてしなく、國民の痛苦忍ぶべからざるを思ひ、退いて干戈をおさむべく、余は露國に遊びたるが、その後の形勢益々險惡を如へ、汪兆銘、李石會、徐謙、吳稚暉氏等から頻りに再起を促されたので、同年初、革命の宿志を果すべく、決然起つたのである。當時余は二つの主義を信念した。それは（一）不成仁（二）便成功云ふのである……。

かくして、五原に歸着せる馮玉祥は民國十五年九月十六日、同地において國民軍幹部大會を召集し、各將領に向つて捲土重來の決意を告げ、翌十七日、自ら國民聯軍總司令の職に就くと同時に、敗殘の國民軍を糾合して、悲壯なる宣誓式を行つた。これを五原誓師と云ひ、馮玉祥一代史上最も記念すべき出來事である。

## 二

民國十五年九月十七日、馮玉祥は國民軍聯軍總司令の名をもつて、國民黨の主義の下に、國民革命の目的を貫徹すべく、再び全軍統率の任にあたる旨の左の通電を發した。

余は元來勞働者の子である。幼年時代貧困のため、遂ひに教育をうける機會をもたなかつた。長

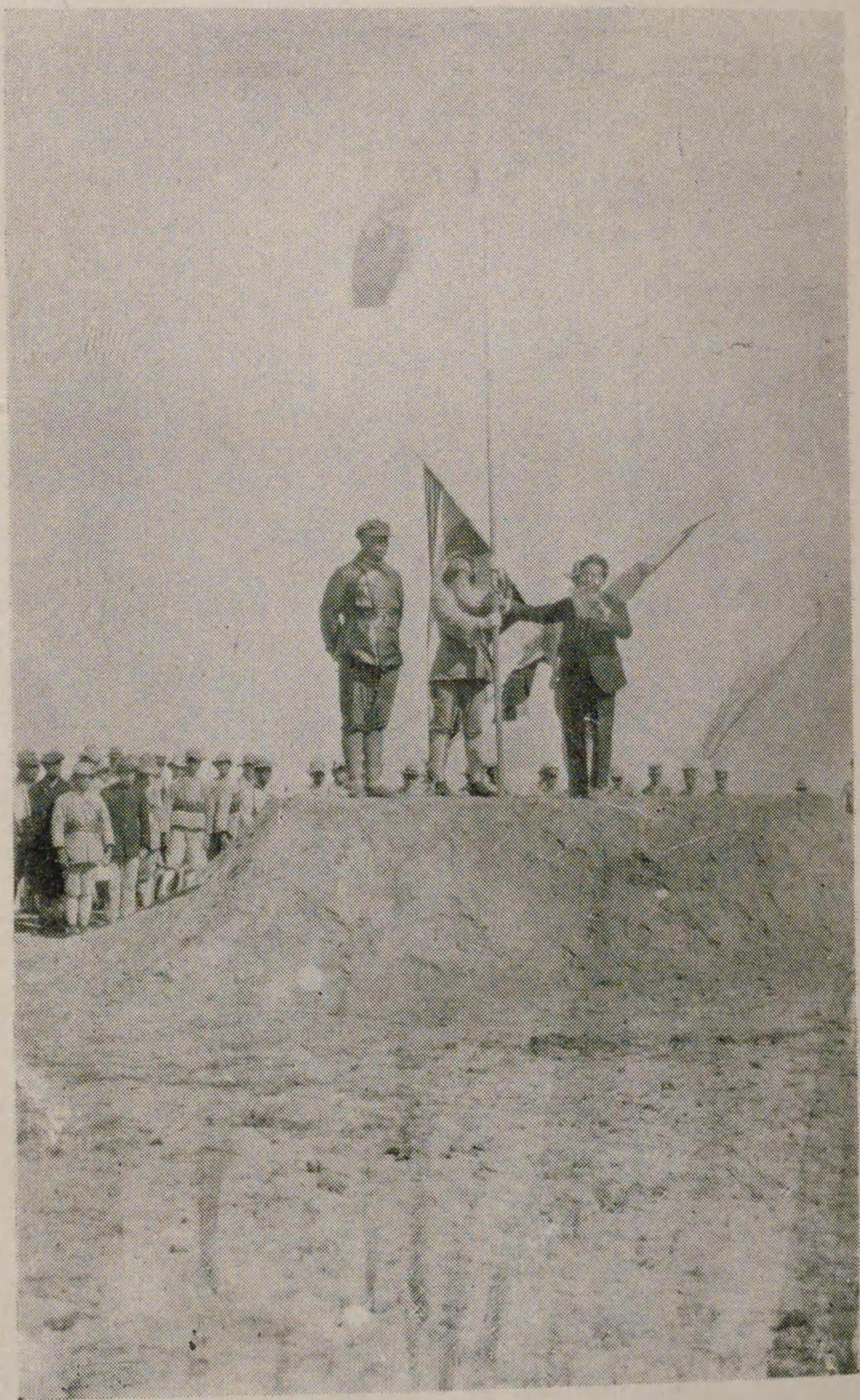


するに及んで、國政の紊亂を痛感し、發憤して軍隊に入つたが、學識にも國を救ふに足らず。又孫文と世を同じうして生れ乍ら、その革命の抱懷を聞くに及んで、いよいよ自己の智識の後れたるを耻ぢ、身を退いて、外國に遊んだ。然るに、帝國主義者は軍閥を利用し、横暴益々甚だしく、國家の危難刻々迫り中山主義いよいよ危殆に瀕した。余はこの形勢を默視するに忍びず、斷然外遊の旅を中止して故國に歸來した。而して、九月十七日全軍將士の公推により、五原において國民軍聯軍總司令に就任した。余はこの機會において、全軍將士並に國民に對し、左の宣誓をなすものである。

我が國民軍の目的は、國民黨の主義に基いて民衆を喚起し、賣國軍閥を掃蕩し、帝國主義を打破して、支那の自由獨立を求め、世界において、平等に我等を待遇する各民族と聯合し、共同奮闘生死を共にして、その目的を達せんことを期す。

これと同時に、國民第一、第二、第三及び第五軍の將領も亦、連名を以て、馮玉祥推戴及び國民黨入黨について左の如き通電を發した。

國民聯軍は、さきに賄選を討伐し、帝制の殘黨を掃蕩して以來、辛亥革命の完成を期せるも、功未だ成らず、今また極東民族の解放に着手せるも、これまた、事志に副はず、空しく機を失した



式師誓原五



軍閥の横暴は日に益々甚だしく、戦争の禍害はいよいよ深刻を加へつゝある。われ等はさきに和平を高唱せるも、今はこれを悔いて、こゝに血戦を宣し、志願を達成せんを欲す。左にわれ等の綱領を掲げて、普ねく國民に布告する。

一、國民軍は國民黨を結合し、孫中山先生の三民主義を捧持し、國民黨全國代表大會第一及び第二兩次の宣言及び決議案に服従す。

二、國民政府委員、國民黨西北政治代表馮玉祥を公推して、國民軍總聯軍總司令となす。

三、馮玉祥は九月十六日歸國し、十七日國民軍聯軍總司令に就任し、同時に全軍は最後まで奮闘せんことを宣誓す。

國民第一軍張之江、李鳴鐘、鹿鍾麟、宋哲元、劉郁芬、劉驥、第二軍鄧寶珊、李雲龍、田玉潔、弓富魁、魏定一、史宗法、李培黃、第三軍孫岳、徐永昌、楊虎臣、續培模、胡德輔、第五軍方振武、阮立武、張兆、豐篠。

この日、馮玉祥は更らに自ら筆をこつて左の五韻訓戒を作り、これが卒先躬行を誓ひ、全軍の將卒これにならふべきを嚴命した。

烟酒必戒 酒を煙草を戒め

嫖賭必戒 遊蕩を賭博を戒む。



除去驕情  
除去奢侈  
實行勤儉  
爲黨犧牲  
國民革命  
方能成功

驕情を除き  
奢侈を除け。  
勤儉を實行し  
黨のために犠牲みなれ。  
國民革命  
まさに成功すべし。

三

馮玉祥ロシアより歸來す……この報道傳はるや、山西省の北部にあつて、商震軍に改編されてゐた韓復榘及び石友三の國民軍五ヶ師は、直ちに山西省を出で、馮玉祥の麾下に走せ參じた。これと同時に察哈爾や、綏遠の奥地に散在してゐた落伍兵も亦武器を携へたまゝ、續々包頭を五原に集まり再びもこの總司令馮玉祥の統率に歸した。馮玉祥は從來士官の養成にその統制に心したと同様、否なそれ以上に、兵卒の人心收攬に細心の注意を拂つた。彼は士官に對してはあくまで嚴酷であるが、兵卒に對してはつこめて慈愛的態度をこつてゐる。これ即ち國民軍が敗退潰亂しても、指揮官なき兵卒が、恰かも鐵の磁石に吸ひつく如く、馮玉祥を慕ふて、その指揮下に戻つた所以である。

玉祥の歸來によつて、兎も角も再び復活するこゝが出来た。

馮玉祥の復職後最も鋭意熱心に努力を傾倒したのは西北軍の陣容立直しである。已に一度敗走潰亂した敗兵を以て、再び隊伍を整へ、軍紀を布くこゝは容易の事業でないのみならず、當時西北國民軍の立直しは、たゞに軍隊の編制、武器の整頓等の軍事上の改革のみに止まらず、これを國民黨化するべき「政治的改革」の急務にも迫られてゐた。

馮玉祥自身は前章所記の如く、訪露の途次、庫倫會議においてボロヂンに説服され、徐謙の紹介によつて國民黨入黨に決し、その赤露滯在中、已に李鳴鐘及び徐謙を廣東に派遣し、國民黨本部に入黨の正式申込みをなし、國民黨から入黨の認可を受けた。

五原誓師のこゝも、國民軍も亦全軍をあけて入黨に決し、國民黨本部は馮玉祥をあけて國民政府委員及び國民軍總黨代表に任じた。やがて西北國民軍は青天白日旗を接受し、馮玉祥は「國民軍は從來已に革命のために戦つて來たが、しかし革命の名においてはなかつた。今やわが軍は名實ともに黨軍となつた」と聲明するに至り、いよゝ／＼全軍の黨化、即ち政治教育の訓練が本式に開始された。

しかし既往十數年間、バイブルをもつて教育されて來た國民軍に對し、俄かに耶蘇教は何等の交渉なき三民主義をたゞきこむこゝは、因より容易の事業でない。加うるに國民軍の士官中には、



この方面の人材が殆んぞ皆無であつた。殊に當時國民軍の政治訓練について、非常の困難を感じたことは、宣傳に最も必要な印刷物が甚だしく缺乏を告げてゐたこと、國民黨本部の所在地たる廣東との距離が、遠隔にして且つ交通杜絶の状態にあつたことである。廣東からの派遣員は宣傳印刷物を携へ、ウラヂナストークからシベリア鐵道により、蒙古を経て、馮玉祥の幕營に來たものである。その行程實に六ヶ月を要したと云ふ話である。

國民軍の政治訓練については、馮玉祥卒先そのことに當つた。彼は誰よりも熱心であり、また宣傳、講演なきのこに於ては、實に天倫の手腕をもつてゐる。

當時の馮玉祥はロシアから歸來匆々のこで、ロシアで目撃した赤色軍その他の政治施設の印象が、極めて鮮やかに、彼の腦裡に刻せられてあつた。彼はモスクワやレニングラードで見學修得した政治訓練術、モスクワ滞在中、胡漢民と于右任から習つた三民主義に關する……あまり深くはないがしかし新鮮な……智識をもつて、連日各軍を巡廻して講演した。而して馮玉祥の當時最も力を入れて宣傳したのは、國民軍内における反帝國主義熱の鼓吹である。五原誓師後の國民軍將卒は擧つて、その胸間に「我爲廢除不平等條約而拚命」(吾等は不平等條約撤廢のため命を惜しまぬ)と書せる白布を着けるこ、した。軍中これを名付けて「決死章」と云ひ、南方革命軍がその戰鬪開始にあつて、頭に括りつける三色の「犧牲帶」と相並び稱すべきものである。全軍上下均しく系

總理の遺囑を暗誦せしめ、また下級將校をして兵卒にその意義の講釋をなさしめた。

馮玉祥は國民軍復興のためにはロシアの援助を必要とした。そしてロシアは國民軍の國民黨加入を以て、援馮條件の第一としたのである。従つて五原誓師後の國民軍はいやがおうでも、國民黨化せざるを得なかつたのである。否な、ロシア及び國民黨側からこれを強ひられたと云ふよりは、ソウエト・ロシアを一巡し、ソウエト革命の實情を目撃した馮玉祥自身も亦、一定の旗幟をたて、確乎たる標榜のこに民衆を指導するに非ざれば、國民運動は到底成功を見るこが出来ない、而して今日の支那において國民運動を指導し得る政黨は國民黨を措いて他にない……この信念をかたくして歸來したのである。五原誓師後の馮玉祥が自發的にも、國民軍の國民黨化に向つて猛進したのは決して遇然のこではない。

かくして西北國民軍は民國十五年九月十七日以來、明確に廣東軍と同一色彩の革命軍となつた。否な、ロシアから歸つて來たばかりの馮玉祥及び于右任をその指揮官に戴ける國民軍は、却て當時や、もすれば國民黨内の右傾派に牽制されんこした蒋介石等の廣東軍よりも、より多く左傾し、またより濃厚の赤色を帯びたかに見へた。又當時蒋介石と馮玉祥との間には、國民軍は長江以北を、廣東軍は長江以南を分擔し、以て支那全土をあけて、國民黨の天下にせんこの默契が成立したこも傳へられた。私は同年秋に著した「ソウエト東方策」において「陝西や甘肅の山奥で遙かに、廣



東國民革命軍を呼應し、ひそかに捲土重來を策しつゝ、ある西北國民聯軍の近き將來は、廣東軍のそれと相並んで、最も注目に値する」と記したが、間もなくその後の變局は、悉くこの豫想を適確に裏書きした。

#### 四

民國十五年末、軍事的にもまた政治的にも、ひそ通り陣容を立て直した西北國民軍は、その攻進方向をいづれにさるか。即ち五原を起點として、その夏の敗退路を戻つて、張家口に出で北京をつくか。或は甘肅を越えて陝西に出で、河南省に入つて、南方革命軍と連携し、以て北京を南から攻めるか……この作戰上の岐路に立つた。最初國民軍の將領の間には、前説を唱へるものが多數を占め、馮玉祥自身も再三この説に傾いたのであるが、結局後説をとり、甘肅行軍をおこすに決した。馮玉祥が北京への最捷徑たる東北方向をすて、最も行軍の至難にして、且つ南と東へ遠き迂迴路をさるに決したこゝについては、固より南方の廣東革命軍の要求がその主なる原因をなしたものと見なければならぬ。

當時この作戰計劃はその頃北京に潜伏してゐた李石曾が奉天軍閥の實勢力について詳細なる報告を馮玉祥によせて、北京直攻の至難なるを説き、迂迴路によつて南方革命軍と協力すべきを勧めて來た結果、決定したものであると傳へられたが、しかし、事實の真相は然らず。馮玉祥をして甘肅

行軍を執行せしめたものは、國民黨に外ならぬ。即ち國民黨の本部が南は廣東軍、北は國民軍の兩軍をして、楊子江と黄河の間に、北軍を挾撃せしめんとして建てた北伐全局の作戰からわり出されたものであつたを考へられる。

さて然らば甘肅迂迴路によつて陝西と河南へ進出の作戰方針を決した馮玉祥はこの作戰遂行のため如何なる行動をおこしたか。

馮玉祥は民國十六年の年頭、聯晋(山西省との聯携)援陝(陝西省の救援)の二大方針を聲明した。即ち聯晋政策に依つて山西軍を敵から味方に抱き込み、背後を脅かされる憂をたち、以て甘肅より陝西に向つて進み、當時鎮嵩軍の包圍裡にあつた西安を救援することに決し、方振武、弓富魁、孫良誠、馬鴻逵、石友三、韓復榘、陳希聖を以て援陝七路總司令に任命した。

綏遠の西南隅より、陝西に入るには道を甘肅にさねばならぬ。人烟稀薄にして物資に乏しき甘肅行軍は非常の難事である。また當時陝西では省城西安が吳佩孚の配下たる鎮嵩軍に屬する劉鎮華軍によつて包圍され、籠城八ヶ月に及び、これが救援を急務としたが、甘肅省にも孔繁錦、張祀帥兩鎮守使が吳佩孚の命によつて兵を起し、甘肅駐屯の西北軍を攻めた。當時甘肅留守軍の西北軍は劉郁芬これを率ひ、武器は舊式であるが、敗走軍でなかつただけ、相當の戰鬥力を有し、土氣も壯んであつたので、間もなく孔張兩軍を討滅するこゝが出来たのみならず、彈藥、糧食、軍資金等少な



からざる分捕品を得て、國民軍のために、一時の急を救ふた。然し國民軍主力の甘肅行軍は同軍の會つて嘗めたことのない試練であつた。寒氣酷烈、沿道人家なく、食物と衣服の缺乏等あらゆる困苦艱難を戦ひつゝ、行軍を續けた。國民軍の入陝先鋒隊となつたのは孫良誠軍である。同軍は先づ孔張兩軍を討滅し、甘肅省に於ける後顧の憂ひを除いた。こゝにおいて馮玉祥は孫良誠に新手の兵一萬二千を與へ、馬鴻逵軍より彈藥十七萬發を配與せしめ、日に夜を繼いで西安に向つて急進せしめた。守將楊虎臣と李虎臣の二將は城をこもに亡びんことを誓ひ、楊氏の如き李氏に向つて「若し破るゝの日は兄は彼の鼓樓に、弟は此の鼓樓にあり、各々一條の繩を以て縊首して死なん」と悲壯な覺悟を告げ、將士擧つて死守したので劉鎮華軍も、つひに如何にもするこゝが出来なかつた。當時西安城内の糧食既に盡き、市民饑餓に瀕し、頗る危急状態にあつた。この時國民軍の先鋒孫良誠軍は長驅西安城におしよせ、その包圍軍を討破し、辛うじて、籠城軍及び市民の危急を救ふた。

##### 五

陝西省の戦局定まるや、馮玉祥は先づ、國民軍の整頓に銳意専心し、劉郁芬を駐甘總司令に、于右任を駐陝總司令に、宋哲元を北路總司令に任じた。當時岳維峻軍は山西より來り會し、國民革命のために盡瘁せんことを誓つたので、改めて彼に南路總司令の職を與へ、舊國民第二軍の諸部隊をその指揮下に歸せしめた。其頃、陝西にあつた舊國民第二、第三の兩軍及び吳新田に屬する部隊は

總て國民聯合軍の旗下に歸し、甘肅軍を合せて、全軍三十餘萬を號するに至つた。

しかし陝西及び甘肅の二省は、瘦瘠の地であつて、稅收極めて少なく、加ふるに連年兵燹打ちつゞき、且つ西安また久しく包圍を受け、民力殆んど枯渴の状態にあつた。然るにその矢先きへ、かかる大軍を入れたのであるから、省内の經濟界はいよゝゝ危機に瀕し、國民軍は非常の財政的難關にぶつかつた。

當時甘肅省長であつた蔣篤弼は馮玉祥に隨つて陝西省に入り、財政の難局に當つたが、就任當初の數ヶ月は、全省の稅收僅か二千元足らずで、全軍日々の食糧たる麥粉の代にすら事缺く有様であつた。一方國民政府からの補助も、交通の阻隔を爲替の不通等のため、長らく支給杜絶の状態にあつた。

その後陝西の市場には、銀貨は勿論銅貨すら姿をかくし、只だ西北銀行の紙幣を以て、唯一の貨幣として通用せしめてゐたが、これにて間もなく使ひ盡したので、陝西省立の富秦錢局の紙幣を借り、これに總司令の印を捺して通用せしめた。これを加字票と稱したが、やがてこの加字票もつかひ盡し、最後に、不換紙幣を發行して、一時流通の用に充て、河南省に入つて後も、二三月間は依然これを用ゐてゐた。

かくして陝西省に入つた當初の數ヶ月間、國民軍は財政窮乏のため、非常の困難に會した。その



頃兵士は毎月費食して五元、將校は上下の區別なく、十元宛支給されるのみであつた。或る日、馮玉祥は士卒の困窮状態を歎き、將校に五元、兵士に二元五角の臨時支給を配與した。これは實に五原誓師後一年間を通じて、たゞ一度の特別給與であつた云ふ。以て當時における國民軍窮乏の状態を推知し得るのである。

六

民國十六年の春、南方革命軍及び西北國民軍と、奉天軍を中堅とする北軍との所謂「赤白爭霸戰」は河南省を中心として、大展開を見ることゝなつた。

同年四月、漸やく陝西、甘肅兩省の根據地を平定した國民軍は、革命軍全局の作戰方針により、遙かに武漢軍と呼應して、兩軍同時に行動をおこし、河南省において、會師することに決定した。當時奉天軍は深く河南省に入つて、地盤をかため、その兵力は遙かに武漢軍を凌駕し、西北國民軍に對しては殆んどこれを眼中におかぬ勢ひであつた。實際武漢軍も、また國民軍も、單獨では到底奉天軍に敵することが出来ない。こゝに兩軍力を併せて、西と南からこれを挾撃する作戰をたてたわけである。四月末、馮玉祥は國民政府から改めて國民革命軍第二集團總司令に任ぜられた。

然し國民軍にまつては、武漢軍は同盟軍であるが、同時に競争軍である。河南へ入ること、鄭州を占領すること、馮玉祥としては、武漢軍におかれてはならぬ。一日でも早く、機先を制しな

ければ、たゞひ奉天軍に勝つても、河南の地盤は武漢軍にさられてしまふであらう。然るに國民軍は緩遠から甘肅迂廻の大行軍で疲れ切つてゐる。その財政は窮乏の極に達してゐる。加ふるに陝西においてその指揮下に入れた幾多の客軍は、表面馮玉祥の出動命令を奉じ乍ら、陰にこれに反抗して、その行動甚だ遅々たる有様であつた。四月末馮玉祥の發した左の軍令によつて見るも、當時馮が如何に客軍の操縦策に苦悶し、焦慮したかを知ることが出来る。

陝西各軍の同志諸士よ！吾が國民軍は青天白日の旗幟下にある。われ等は國民黨の主義をまつて國民軍の主義をなし、國民革命の大業に向つて進み、中國の自由平等を求むることを以てその使命をなす。然らば如何にしてわれ等の主義を實現す可きか。如何にしてわれ等の目的を達す可きか。曰く一は賣國軍閥の劃除、他は帝國主義の打倒である。この二大障害の除かれざる限り、國民革命は到底成功の希望なく、諸士並に予の責任達成の日がないのである。今や國民革命軍は長江以南の反動勢力を完全に肅清し、河南の保衛軍と共にわれ等共同の敵と奮闘の酣にある。われ等は黨の指導の下に兵を東潼關に進め、狂惡極まる敵軍と干戈を交へんことを。われ等の責任は重大であつて、その事業は至難である。予はわれ等が日夜怠りなき準備を以てしても、尙ほ且つ未だ及ばず、未だ充分ならざるを恐るゝのである。然るに各部隊の動靜を視るに、ひこり某師團長毓斌の統るる部隊のみわれ等の主義を理解し、また積極的に討賊の準備をしてゐるに過ぎない。



その餘の各部隊は概して然らず。軍隊の整頓及び出動命令に對しては、多くは陽にこれを奉じ、陰にこれに反する有様である。地方轄據の弊風依然として改まらず。又依然として民衆壓迫を事としてゐる。各自營舎内にありて、兵器の私造に日も尙ほ足らず。また秘かに土匪と通じてゐるものさへある。諸士はこれを以て軍隊の擴張と思ふやも知れない。然し斯くの如き野性馴致し難き部隊は、平時にありては人民を騷擾し、一朝事に會ふや、必らず戈を翻へして、われ等に背叛するであらう。萬一人民蜂起環攻せんか、終に諸士は自滅の外なきに至るべきは火を見るよりも明らかなのである。陝西省は諸士の祖宗墳墓の地である。諸士の子孫戚友皆なこの陝西に生を受けて居る。若しこれ等の胡行蠻幹をして長ぜしめんか、その結果たる、單に自己を殺すに止まらないであらう。玉祥日々兵士と次ぎの如き問答をかはしてゐる。即ち「汝等の父母は誰か」。兵士はみな答へて曰ふ「百姓」也。また「汝等の兄弟は誰ぞ」。曰く「百姓」也。「汝等の妻子は誰ぞ」。曰く「百姓」也。「汝等の親戚朋友は?」。曰く「百姓」也。「汝等の隣人は?」。曰く「百姓」也。また「汝等軍を罷めて家に歸りたる場合は如何」。曰く「百姓」也。「汝等既に自己及び自己一切の關係者皆な百姓なる事を知る上は、當然百姓を愛し、百姓を保護す可きではないか」也。

然るに各方面よりの消息によれば、陝西軍隊にして誠意われ等の主義に忠實なる者は極めて少く或る軍隊の如きは終日百姓より掠奪して食ひ、飲み、只だ百姓を害し、その平和を擾すのみであ

る。彼等はまた教練もせず、教育も受けず、主義の如何なき何等の理解をもたないのである。斯くの如きは、實に臭虫、虱子にも類す可く、只だ人血を吸ふを知つて、何等の益もなさないものである。諸士は先づ自己の良心は何れにあるや。諸士の面目は如何。何を以てか、百姓に對する何を以てか自己に對し得るやを自ら己に問ふてみるべきである。今や全國革命の勢ひ日に盛んにして、われ等は一大事業を樹立し、國家を救ひ、人民を救ひ、暗黒より光明に入らんとしてゐる實にこれ千載一遇の好機である。諸士は先づよくこの意を悟り、一は自己の改造、一は前進奮闘を期せねばならぬ。またわれ等の爲す所、眞の革命でなかつたならば、結局自己の破滅を招くであらう。また若しそれが口舌の「革命」に過ぎず、實際の行爲に現はれた革命でなかつたならば、それは全く匪賊の類と何等異なる所がないであらう。不肖玉祥今や黨の委託を受け、既に總司令の職責を負ふてゐる。然るに今尙ほ予の命令に服従しない軍隊がある。かくの如き軍隊は自ら民衆と絶ち、民衆の公敵たるものである。民衆の苦痛を目睹し乍らしかもこれを救はざるが如きは、予の到底忍ぶ所でない。予はこゝに改めて各軍同志諸士に聲明する。曰く、諸士の既往の不良行爲は總て悉くこれを免赦するが故に各軍は直ちに列伍を整へて命を待ち一齊に國賊の掃蕩に努力せよ。然らざる場合は、斷じて容赦なく處罰する。革命軍は對内對外いづれを問はず、飽く迄で、奮闘的精神を以て邁進し、妥協遠慮、誤魔化しの如き一切これを許さぬのである。玉祥本軍の全局



を統括し、夙夜兢々として革命事業の企畫にこれ勤め、千辛萬苦を忍ぶも、それは總て民衆の利益を目的とするものである。已に數次の勸告をなしたに係らず諸士は敢て予の言に従はうとしなかつた。これ實に予の一大恨事となすところ、敢て茲に重ねて鄭重戒飭を加へるのである。各軍の同志諸士よ。これぞ予の最後の勸告である。諸士は直ちに猛省し、一時も早く決心す可く、最早やその間一抹の糊塗をも絶對に容さぬ。

七

民國十六年春の國民軍は、總勢三十萬を號したけれども、その大部分は反覆なき客軍である。中堅をすべき舊國民第一軍もまた前記の如く、南口敗退以來の瘡痕容易に癒えず。加うるに甘肅行軍と陝西攻略戦で、少からぬ傷手を負ふてゐる。かゝる軍隊をもつて、更らに新らしい作戦行動に移るは、まことに無謀の舉ぐ云はねばならぬ。しかし河南の戦機は已に熟して來た。同盟軍たると同時に競争軍たる武漢軍は、四月二十日北伐宣誓式を挙げ、唐生智、張發奎二氏の卒ゆる南方革命軍の精銳數萬は、いよく湖北省より河南省に向つて北進を開始した。

この報に接した馮玉祥は、も早や一刻の猶豫もゆるさぬ。四月二十一日全軍を六軍に分ち、直ちに北伐開始を宣言した。新たに國民革命軍第二集團軍の名稱を接受した國民軍は、馮玉祥自らその中央軍總司令を兼任し、東路軍總司令には劉興華、南路軍總司令には岳維峻、西路軍總司令には孫連

仲、左路軍總司令には徐永昌、北路軍總司令には宋哲元をあけて、これに任じ、また劉郁芳及び于右任をして、甘肅、陝西兩省守備軍の總司令たらしめ、後方の警備を嚴にし、次いで馮玉祥は十六年五月一日西安において、北伐の宣誓をなし、國民革命第二集團軍總司令就任の式を挙げ、五日動員令を下して、全軍の出動を開始し、六日總司令部を潼關に進めて、親しく前線の指揮に當つた。中央軍は孫良誠を前敵指揮、方振武と馬鴻逵を副總指揮をなし、また張之江を以て前敵總法官に任じ、總司令に代つて前線の督戦に當らしめることとなつた。進撃命令下るや、全軍八萬擧つて出動し、一日一城を下すの勢をもつて東進した。新安に至つて、始めて張治公軍の抵抗を受けたが、二日にしてこれを激退し、勝に乗じて、これを進撃し、五月二十五日洛陽を陥れた。張治公軍は敗走潰亂し、萬福麟麾下の奉天軍もまた激戦數次の後、東方に向つて敗退した。

八

民國十六年五月の南北戦局を觀るに、津浦線においては、蒋介石を總司令とする南京軍は何應欽李宗仁、白崇禧、賀耀祖等の指揮下に、蚌埠及び徐州に向つて北進し、この正面における孫傳芳軍及び張宗昌の直魯軍と接戦し、京漢線においては、武漢軍の主力即ち唐生智の率ゐる第八、第三十六、第四十一の三軍、張發奎の率ゐる第四、第十一の兩軍は、梁壽凱、龐炳勛、魏益三の各部隊といひも、駐馬店一帶に集中して、郟城正面における奉天軍の主力、即ち張學良と韓麟春の麾下な



る第三、四方面軍に向つて攻勢に轉じた。

これより先き、奉天軍は靳雲鶚その他の河南土着軍を鎮定して、深く河南省内にその勢力を伸張し、その頃、南京に武漢に互ひに睨み合ひ、南方革命軍の足並漸やく亂れんことを恐るの形勢を見てこり、直魯軍その他の北方各軍を叫合して、一舉に南軍を長江以南に驅逐せんことを、次の如き作戰計劃をたてた。

一、張學良及び韓麟春の率ゐる奉天軍の精銳即ち第三、四方面軍は京漢線に沿ふて南下し、正面から武漢を衝くべし。

二、張宗昌、褚玉璞、孫傳芳の率ゐる直魯、孫の聯合軍は、津浦線を南下して南京を政略すべし。

三、萬福麟軍は、張治公軍と提携し、國民軍に對して、暫らく守勢をとり、京漢線方面における北軍の武勝關を出づるを俟つて攻勢に轉ずべし。

四、河南西部にある直隸派殘軍于學忠、徐壽椿、馬文德等の率ゐる五萬の兵をして、道を湖北北部にこり、漢水を東下して、武漢を側撃せしむ。

當時南方革命軍は事實南京に武漢間の關係益々緊張を加へつゝあつた。而して武漢方面においては、共產黨の活動益々激しく、その間に乘じて、暴徒の放火殺人を擅にするあり、また信陽一帯に

は紅槍會の鐵道を破壊し、電線を截斷するあり、河南に進出せる武漢軍はその後方の不安によつて多大の脅威を感じた。

しかし、當時の武漢軍は、連戰連勝の勢ひで、士氣大いにふるひ、殊に張發奎の率ゐる第四及び第十一の兩軍は、廣東軍の精銳であつて、「鐵軍」と稱せられ、向ふところ敵なしの概があつた。もごより兵數と武器において、張學良及び韓麟春の率ゐる第三、四方面軍は支那各軍を通じて最も優秀と云はれたが、何しろ奉天軍は政治的に何等の訓練なく、兵卒は何のために戦ふかをさへ知らない。加ふるにその指揮官たる張學良と韓麟春は、奉天軍閥巨頭中の新派であつて、片足をもつて右し、他の足をもつて左するの状あり。この二人は革命軍と接する毎に、一方戦ひつゝ、他方妥協運動を試みる。従つて彼等はなかく思ひ切つた戦闘をやり切らぬ。第三、第四方面軍は五月末、京漢線の中段において、つひに唐張の率ゐる武漢軍のために破られ、北方に向つて後退し、武漢軍はその後を逐ふて鄭州に肉迫した。この時已に洛陽を占領して東進の途にあつた國民軍は、最初あまり力を出さず、武漢軍と奉天軍との戦況の熟するをまつてゐたが、いよいよ奉軍後退し始むと見るや、韋馱天の如く、強行軍をおこし、急遽鄭州に進出し、先鋒の騎兵隊は五月卅日逸早くも鄭州城内に入つた。

唐生智と張發奎軍が奉軍を追撃しつゝ、翌三十一日鄭州にやつて來て見るに、もうそこには馮玉



祥軍が來てゐる。そして馮玉祥は唐張兩軍に向つて「お互ひに革命軍である。共同の敵奉天軍を破つたのである。實は國民軍に武器がないので、武漢の兵器廠から小銃彈丸の供給を受けた積りであつたが、幸ひ鄭州には奉軍の残して行つた武器があるから、先づそれを頂戴することゝする。そして國民軍はこれから更らに奉軍を追撃して北上するから武漢軍は京漢線の南部を警備し、後方を騒がせぬやうにして貰ひ度い」に出たものである。この老獪なやり口には唐張兩軍も反對のしやうがなく、折角奉天軍の主力を戦つて勝つたものゝ、その戦勝の結果として手に入れた鄭州城を、奉天軍の遺棄した多數の武器を、悉く馮玉祥のために横取りされてしまつた。何と云ふても、唐生智や張發奎では馮玉祥にはかなはぬ。彼等は馮に比べて、二枚も三枚も下の役者である。

## 九

かくして五原誓師の後、わづかに八ヶ月半にして、馮玉祥は、第一、一旦敗走潰亂した國民軍を再興し、第二、綏遠、甘肅の山奥から、長驅河南の中原に進出するの二大事業を成し遂げた。但し五原誓師より河南進出までの馮玉祥及び國民軍の千辛萬苦は、實に慘憺を極め、筆紙に盡し難いものであつた。私は民國十五年の秋から、翌十六年夏までの一年間を以て、馮玉祥の一代を通じ、最も酷烈なる試練時代であつたを信ずるのである。

五原誓師に際して、馮玉祥の周圍に集れるは、南口敗北以來の連戰連敗を、半年間にわたる流浪

離散の揚句、疲勞困憊の極に達し、全然戰鬥力を失つた敗殘兵であつた。人煙稀薄にして、何等の物資なき綏遠の山奥、甘肅の砂原に投げ出された國民軍には、衣食すべき何ものもない。軍資は夙くに底をたゞいてゐる。武器だけは馮玉祥がロシアからの手土産として若干持つて來たが、なかなか足りさうもない。それから更らに五原を發し、疲れ切つた足をひきずり乍ら、欲んき無人の境にもひきしき甘肅省の水地雪天、荒漠三千支里を行軍して、陝西に出で、所在吳佩孚の手先軍や、旗幟の不鮮明な土着軍と戦ひつゝ、國民軍の頽勢挽回をはかつた……その間の苦戰奮闘は實に慘憺たるものであつた。

當時國民軍は軍隊の編制、行軍、戰爭等の軍事的施設及び行動の外、所謂軍隊の黨化、即ち將卒の政治的訓練にも、亦非常の努力を要し、また、同時に、南方革命軍及びソウエート・ロシアとの提携をはかり、その援助を得るにつこむる等、幾多の難問題に逢着した。

五原誓師後における國民軍の軍事及び政治的立て直し事業の如何に困難であつたか、これがため馮玉祥が如何に廣東及びモスコの援助を得るべく苦心したか、ロシア顧問も亦如何に至難な立場にあつたか等の問題について、ここに一つ極めて興味深い資料がある。それは民國十五年の冬、即ち馮玉祥の五原誓師の直後、國民軍顧問として馮玉祥の帷幄に參劃したウズマールノフのモスコに送つた報告である。ウズマールノフの名はあまり世間に知られてゐないが、國民軍における彼は全く



廣東軍に於けるガロン將軍と同一の役目に當つてゐたものである。左記は同氏報告の摘録である。國民軍の士氣は今に至るも、なほ振はず。殊に馮玉祥の自ら巡視しなかつた地方の駐屯軍において甚だしい。その給料の不渡り已に一ヶ年に及び、駐屯地は屢々變つた。馮玉祥もこれに就いて頻りに焦慮してゐる。

軍事委員會は十一人の委員を以て組織されてゐるが、委員の多くは入黨後僅かに一二年しかたぬ無經驗者である。もし馮玉祥が歸來しなかつたならば、この組織の實現も至難であつたらう。何と云ふても、馮氏はその軍隊に對し、絶大なる強制力を有してゐる。そしてそれは將卒擧つて一面馮氏を尊敬することに同時に、他の一面馮氏を畏るゝに因る。

馮玉祥の主張は往々共產黨員の政策よりも、更らにより過激なることがある。共產黨員の方から却て馮氏にその過激政策の緩和を忠告することすらある。

國民第二軍は實力微弱にして、實戰に参加し得るものは、僅かに四旅に過ぎない。第一軍の先鋒部隊も亦精銳なりと云ふを得ず。國民軍の冬服は十一月十五日に至つて漸やく準備が出来た。五原より平涼に至る行軍は四十日間を要し、その途中七日間かかつて冬服を配給した。

馮玉祥は今に至るも意氣揚らず。時々彼はわれ等の面前にて泣くことすらある。彼の心事の那邊にあるか、何人もこれを知らぬ。こゝが出来ない。

國民軍の士氣銷沈し、殊に勞工組織運動は少しも振はない。

軍資金の缺乏は極端に達してゐる。廣東より百五十萬元補給の約束ありたるも、實際馮玉祥の手許に着したるは二十萬元に過ぎない。甘肅から二十萬元、包頭において四十萬元を得たが、最後の四十萬元は實に包頭市民の膏血である。

余等及び馮玉祥の請求事項にして、モスクワの回答を得たものは極めて少ない。馮玉祥は曾て「モスクワの回答を得るは前清皇帝の詔諭を拜受するよりもなほ難い」を冗語に語つたことがある。

十

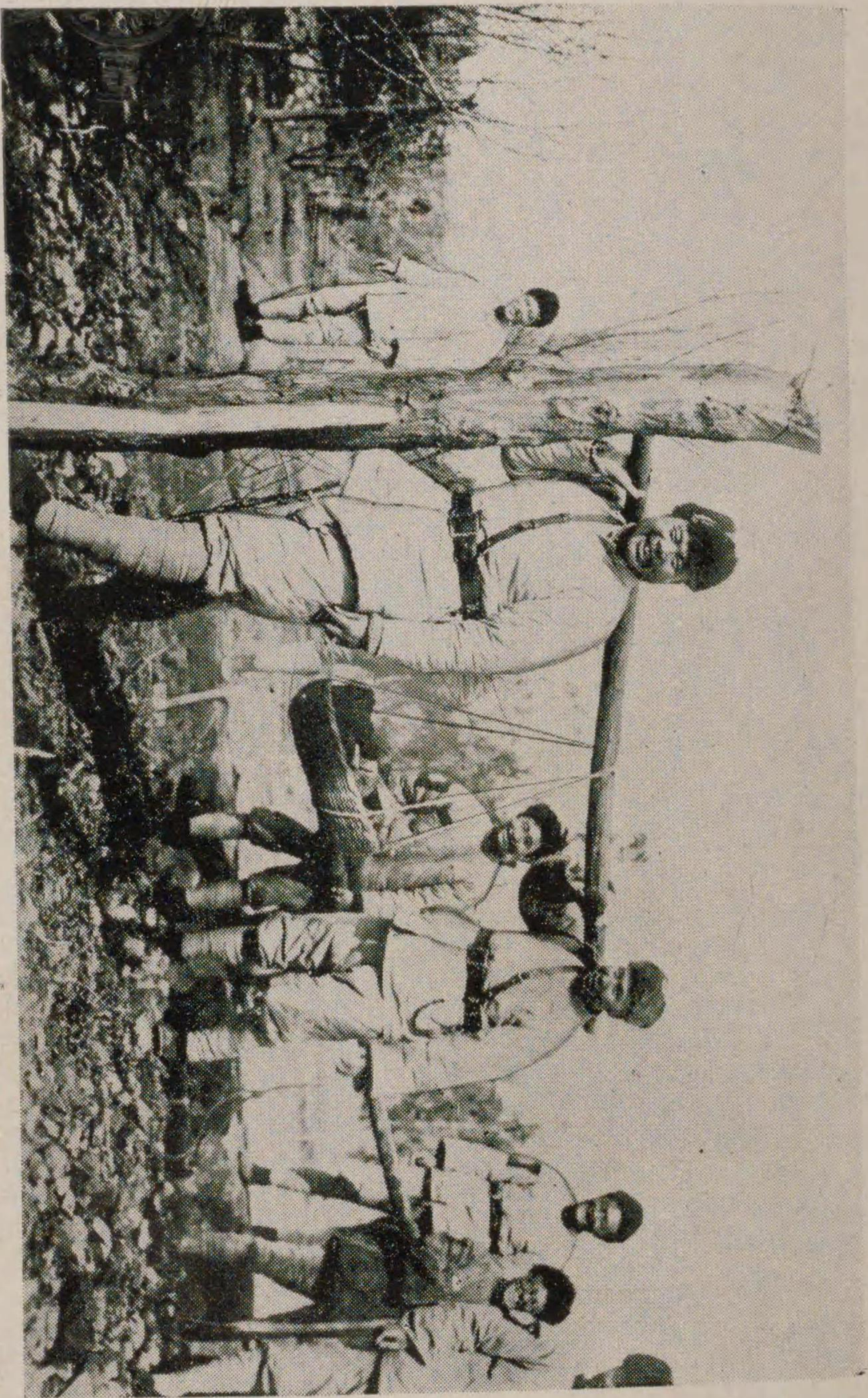
五原誓師から河面進出迄での「試練期」における馮玉祥の難戦苦闘振りに就いて、今もなほ私の記憶に深く刻まれてゐるのは、十七年七月十四日、北京の外交大樓において、馮玉祥その人から聞いた甘肅行軍の苦辛談である。その一節に曰く

民國十五年九月十七日、私は五原で、西北國民革命軍總司令に就職した。この秋、軍隊は南口から退却して來たのであるが、その間二千餘支里、將士は疲勞困憊の極、全然隊を成さずと云ふ有様であつた。殊に窮したのは食物の缺乏で、たゞあるものは羊肉と臭豆腐の二つである。羊肉と云へばいかにも結構に聞へるが、毎日食べては堪まらぬ。着るものは毛皮と云へばこれまたいか



にも贅澤さうに考へられるが、實はなめてないので、着てゐるまゝこわばつて仕方がない。甘肅の寧夏附近では、二三百支里の間、二日ぶつ通して歩いても人家は一軒もない。甘肅から陝西の長安に着いた時は、長安城の包圍八ヶ月の後で、城内で餓死せるもの二萬人、その慘狀、見るに忍びぬものがあつた……馮玉祥は不鮮明な男だま云ふ。彼は第一日に不知道(知らず)ま云ひ、第二日には突如として飛び出す……まここに不可解な男だま云ふのである。或はそんな事實があつたかも知れぬ。たゞへば民國十三年の北京クーデターの如きはその實例かも知れぬ。しかしあの時は早くから孫岳ま計劃を確定して居つたのであるが、事前にこれを公言し得なかつたのである……馮玉祥には少くとも一つ最も鮮明な點がある。それは彼が兵卒ま困苦を共にすることである。兵卒は八時間、將校は九時間働らく。官高ければ、高いだけ、眠るに遅く、起きるに早い……。五原誓師において、臥薪嘗膽を誓つた馮玉祥は兵卒ま苦を共にするま云ふよりは、卒先自らあらゆる難行苦行をもつて、試練を重ね、將卒の師本まあり、士氣の鼓舞につこめた。

馮玉祥は兵卒ま全然同一の服裝をつけ、食事も區別無しである。汽車旅行に際しては、總司令部の參謀將校は一等車にのるか、總司令自身は兵卒まにも無蓋車にのる。彼は午前五時に起床し、夜半まで勤務する。彼は好んで自ら剃刀をこつて、兵卒のために髻を剃り、理髪してやる。



馮玉祥の勞働振り



に士卒ごにも、土工に従事し、所謂兵工政策の實踐躬行にあたる。あの巨大な體軀に、天秤棒をかつぎ、土石を運ぶ有様は寫眞にもこつてあるが、その努力振りは驚歎の外ない。體力強き彼にこつては或はたいした苦痛でないかも知れぬが、彼の相棒を承る士官はたまつたものでない。于右任なごも、度々天秤棒かつぎのお相手をやらされ、大いに弱つたご云ふ話である。

かつて私はモスクワにあつた頃、一九二〇年五月一日の有名な「露西亞全國土曜勞働」<sup>スボトニク</sup>に参加し鐵道工事に當つたごがある。この日レーニンも亦枕木の運搬に従事した。しかしレーニンは雖もその實際の筋肉勞働に當つたのは、土曜勞働日の如き特殊の日に限つた。然るに馮玉祥はこれを殆んご日常の仕事ごしてゐる。東西各國の武將、もしくは政治家にして筋肉勞働、粗衣粗食、其の他の苦行難行の實踐躬行において、馮玉祥の眞似をなし得るものは幾人あるであらう。この點レーニンも彼に及ばず、ムツソリニーも跣足で逃げ出さざるを得ないのである。

馮玉祥の配下にあつては、飲酒、賭博、喫煙等、一切の道樂が許されぬ。甚だ窮屈なものである加うるに嚴しい軍紀に服し、行者的苦行に當らねばならぬ。しかし、一度この難行苦行をおし通しあらゆる困苦缺乏に堪へたものは、馮玉祥の信賴益々厚く、メキ／＼出世するのである。現在國

民軍の中堅をなすものは、主として彼ごにも甘肅行軍の辛酸をなめた士卒である。思ふに馮玉祥をして革命家ごしての修養を完成せしめたのは、實に五原誓師以後のごごである。



馮玉祥の今日あるは五原の誓師の難行苦行にあると云ふも決して過言でなく、恐らくは明日あること  
も、また然りであらう。

▲馮玉祥の理髮哲學▼

馮玉祥は兵馬恠徳の餘暇、自ら剃刀をこつて兵卒のために、髻を剃り、理髮してやる。  
左記はその理由の「理髮哲學」である。

余が兵卒の理髮をなすは、幾多意義のあることである。即ち、(第一)快刀亂麻を断ち  
舊をすて、新をこるの精神涵養。(第二)理髮職人階級を賤しむ風習の打破。(第三)  
勤勉、節儉及び互助の精神養成。(第四)官吏は人民の公僕であることの觀念の表現。  
(第五)士官の生活の兵卒化等がそれである……。

七 中 原 進 出



鄭州及び徐州會議・南京と武漢の政争調停・共産黨  
對策・北伐根據地の開拓・靳雲鶚討伐・新河南の建  
設・馮玉祥式善政の強制勵行

甘肅や陝西の山奥から、懸軍萬里、漸やく河南の中原に進出した西北國民軍は、始めて鐵道もあり、多少物資も補充し得る地盤に足をふみ入れた。馮玉祥は河南の新根據地によつて、徐ろに國民軍の勢力擴張をはかり、遙かに南方革命軍を呼應して、北伐遂行、北京攻略の時をまつこととした。

國民軍の鄭州攻略後、數日にして、武漢政府の委員汪兆銘、譚延闓、徐謙、顧孟餘等は、唐生智を同伴北上し、馮玉祥にも軍事及び政治方針につき、協議せんことを提議した。こゝにおいて馮玉祥は潼關より鄭州に來り、武漢政府委員と相會し、二日二晩に亘り、極めて重要な協議を遂げた。

鄭州會議の結果、政治方面では、河南、陝西、甘肅三省の省政府を正式に承認し、馮玉祥を河南の主席、劉郁芬を甘肅の主席、于右任を陝西の主席となし、(後に于右任辭して就任せず、石敬亭代つてこれを繼承した)また開封政治分會を組織して、三省の政治中心となし、徐謙及び顧孟餘の兩委員を留めて、河南に駐在せしむることとし、軍事方面では、第二集團軍を改編して、七個の方面軍となし、孫良誠、靳雲鶚、方振武、宋哲元、劉郁芬、于右任、岳維峻を以て各方面軍の總指揮に任じた。(後に于右任就任せず、石敬亭をしてこれに代らしめた)同時に、從來河南にあつた梁壽



愷の數部隊も、これをあけて馮玉祥の指揮下に置くことゝなつた。

鄭州會議はかくして、徹頭徹尾、馮玉祥のために有利なる結果を招來した。河南攻略における殊勳は、もこより奉天軍の主力即ち第三、四方面軍と接戦して、これを撃退した武漢軍にあるも、鄭州會議は河南全省の實權をあけて、馮玉祥の掌中に歸せしめた。かくの如き結果を見たるは一つは馮の外交的手腕に因つたことは云ふまでもないが、同時にまた當時武漢政府が内外において紛糾百出し、一時北方發展を中止するのやむなき立場に陥つたこともその一因であつた。

即ち、六月早々、四川の楊森が軍を率ゐて、東征し、武漢に進迫して來たため、一旦河南に進出した武漢軍は急遽南下して武漢に引つかへざるを得なくなつた。加ふるに當時已に南京政府と對立の状態にあつた武漢政府としては、大いに馮玉祥の御機嫌をこらねばならぬ種々の事情もあつたので、いや／＼乍ら、河南全省をあけて國民軍に譲つたわけである。そのみならず、當時武漢に駐在してゐた馮玉祥の代表劉驥は巧みに武漢政府を説きつけ、國民軍の軍資として、二百萬元をさして鄭州に送らしめた。

鄭州會議において、今一つ重大なる問題として議論の花を咲かせたのは「共產黨の跋扈」……云ふよりは「左傾小兒病の弊害」に對する對策問題であつた。當時の武漢政府委員は、何れか云へば、國民黨の左派に屬し、むしろ共產黨に近い人達であつた。また馮玉祥も訪露當時からの縁因で、共

産黨には可なり、深い同情をもつてゐた。しかし、支那共產黨は創立日なほ淺きに係らず、革命の發展にともなひ、黨員が無暗に増加し、幾多の不良分子を入れたので「似而非黨員」の專横跋扈甚だしく、所謂左翼小兒病の弊害百出には、武漢派も馮玉祥も餘程手古摺つた見え、鄭州會議では兩者ともに期せずして反共方針をこころに意見の一致を見るに至つた。こゝに一つ奇すべきは鄭州會議において、最も熱心に反共政策を提唱したのは、それまで武漢派巨頭中最左翼のリーダーと云はれてゐた徐謙であつたことである。

## 二

鄭州會議の直後、南京政府委員もまた、馮玉祥に急電を寄せて、ともに徐州に會して、革命の大計を議せんことを提議して來た。馮玉祥はかくして武漢と南京の両方からひつぱり風になつたかたちである。

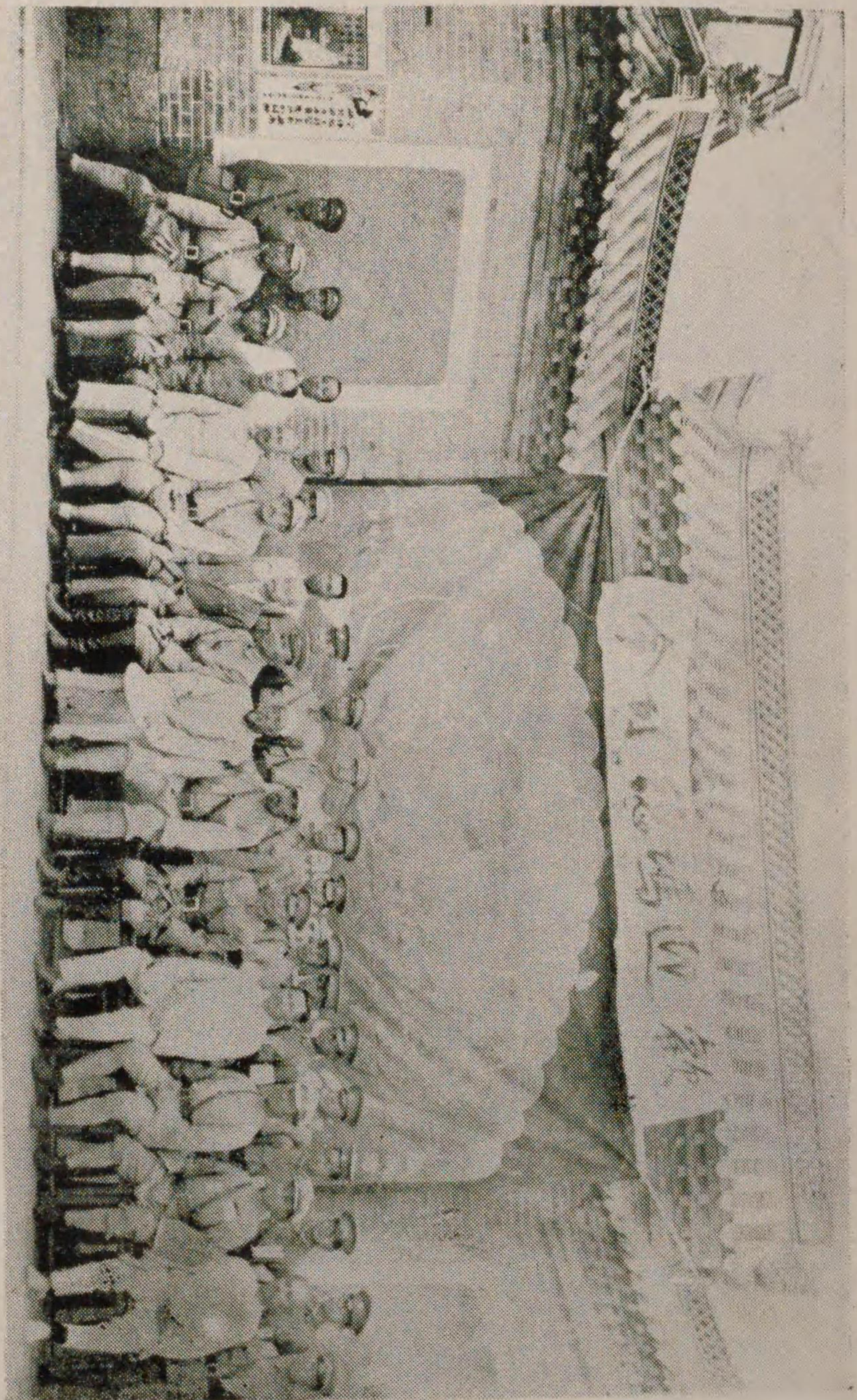
十六年七月十七日、國民革命軍總司令蒋介石は、胡漢民、吳稚暉等とともに徐州に到着したころ、已に同地には馮玉祥から「相離る遠からず。速やかに面會し度し」の返電が來てゐた。そして馮玉祥は十八日鄭州を出發し、十九日早朝、蒋介石、李宗仁、その他徐州各團體に迎へられて徐州驛に着した。この日馮玉祥は身に灰色木綿の軍服をまこひ、木綿帽、木綿靴、木綿の脚絆……一兵卒さ少しも變らず、そして左臂に「西北革命軍之馮玉祥」を書した青天白日滿地紅の腕章を懸け、



又胸に「我爲廢除不平等條約而拚命」(不平等條約廢除の爲には命をも惜まず)と書した白布を縫ひつけ、そのいかにも革命軍の將帥にふさはしき風手は、まことに四隣を壓するの概があつて、あまりに立派な將軍服をつけてすましてゐた蔣介石が却つてきまりがわるかつた云ふ話である。

この日は實に廣東より長驅して北上せる南方革命軍の總帥蔣介石、前年五原に誓師し、綏遠、甘肅、陝西を越えて東征せる西北國民軍の首領馮玉祥との初對面の日であつた。兩雄は徐州驛のプラットホームで、最初の握手を交はし、終つて蔣介石は驛前に集れる歡迎群集に向ひ、馮玉祥を紹介して曰く「本日西北革命軍總司令馮同志徐州に到着された。我等は舉つて衷心より歡迎を表するものである。只今馮同志の演説がある。諸君の御靜聽を請ふ」と。次いで馮玉祥は手を舉げて群衆に一揖し、やがて口を開いて

馮玉祥本日徐州に到り、各方面の熱烈なる歡迎を受け、誠に痛み入る。同志各位及び各界同胞に對して深く多謝する……諸君、革命軍は廣東、廣西より出帥してより、湖南、湖北、江西、浙江安徽、江蘇の各省を攻略し、その間千辛萬苦を甜め盡し、また多大の犠牲を拂つた。辛苦犠牲は我等軍人當然の責務に過ぎないが、しかし、革命軍の犠牲は全國民衆のひそしく寸時も忘る、能はざる所である。我等西北革命軍は、國民革命軍に伍して、三民主義に服従し、國民革命の完成を期する。我等は共同奮闘、以て實國軍閥を肅清し、帝國主義を打倒せしめばやまぬ……。



見會初の馮・蔣るけおに州徐



こ底力あるドラ聲はりあけて獅子吼するや、群衆一齊に「西北革命軍萬歲」「馮總司令萬歲」を叫び、徐州驛構内空前の盛況を呈した。

やがて蔣馮兩總司令は相携へて、自動車に同乗し、兵營に赴く。この夜、蔣介石は馮玉祥のために花園飯店において盛宴を張つた。宴會の席上、馮玉祥は演説して曰く

回想すれば、蔣總司令介石同志が、北伐の旗幟をおしたて、蹶起されたのは、去年の今頃のこと、爾來力戰奮闘一年にして、つひに今日の成功を見るに至つた。蔣總司令の率ゐる國民革命軍は、たゞに軍閥鐵蹄下の民衆を救ひたるのみならず、同時にまた我等西北革命軍をも救つた……我等は協力奮闘、命を擲け打つて、三民主義の國民革命を實現せんことを誓ふ……。

徐州會議の内容は極秘に附せられ、従つてその決議も不明であるが、鄭州會議の具体的であつたに比して、徐州會議は抽象的に失した嫌ひはあるが、しかし、それだけ双方の協定は精神的に結合をかためたものこそ考へられる。果して徐州會議の直後、蔣馮兩總司令は連名を以て「こもに力を協せて國民革命の完成に盡すべし」この宣言書を公表した。

### 三

南京及び武漢兩政府の關係は、その後益々悪化し、七月から八月にかけて、全く決裂の状態に陥つた。當時馮玉祥は漸やく河南へ出たばかりで、まだ十分實力を恢復するに至らず、加ふるに北方



から奉天軍の脅威もあつたので、實の所、積極的には何等行動をこり得ぬ状態にあつたのであるが南京に武漢が對立し、その勢力が略々均衡をこつてゐたので、馮玉祥は兩者の間に立つて、勝敗の鍵を握つたわけである。即ち馮玉祥にして、鄭州より南下し、湖北に鋒を向ければ、勝利は南京に歸すべく、その反對に國民軍が東に進んで津浦線につき出でんか、武漢は直ちに南京の死命を制するであらう。こゝにおいて、武漢に南京は、競うて馮玉祥の抱き込みに奔走し、國民軍は武漢政府から南京討伐、南京政府から武漢討伐の命令を、同時に接受したやうなありさまであつた。

然らば馮玉祥は武漢及び南京兩政府の唯合に際して、如何なる態度に出でたか。老練熟達、かゝる場合あくまで駈引に巧みな彼はいづれの側にも加擔せず、またごちらも敵に廻さぬ、即ち中立方針をこり、以て同時に兩者を操り、徐ろに時局の支配權を握らうとした。但し、當時國民軍においても、いづれか一方を助けて他の一方を討つと云ふやうな積極的行動には到底出られぬ事情もあつた。即ち國民軍は軍費も武器も、こもに大缺乏を告げ、何所からか絞り出さねば立つて行けぬ窮境にあつた。而して當時の馮玉祥としては、軍費はこれを南京に仰ぎ、武器はこれを武漢の漢陽兵工廠の供給にまつを以て最捷徑と化したわけで、彼が南京にもあたらす、また武漢にもさからはす、兩手に花を握らうとした一因はこゝにもあつたらしい。

かくして馮玉祥の南京、武漢の兩方に對する中立方針は、兩者のいづれをも敵としないかつたが、

しかしそれと同時にごちらの命令にも服従しなかつたので、兩方から恨まれた嫌ひも無いではなかつた。當時の馮玉祥は一面、兩方から引つ張り風の優越的立場を占めたが、他の一面兩方の間に板挟みの苦境にあつた。左に掲ぐるは當時馮玉祥が「全國同胞及び國民黨同志に警告するの書」と題して、各方面に送つたもので、その頃馮玉祥が如何に苦しい立場にあつたかを窺ふ資料としてこゝに挿入する。

全國同胞及び革命同志に告ぐ。不肖玉祥この度、革命健兒を統率して轉戦七千支里に及ぶ。而してこれを、決死以て救國の志を達せんことを期せるに外ならぬ。余は本黨にありては後進者であつて、敢て卑見を主張し得る立場にあるものではない。さり乍ら潼關を出で、河南に入るに及び始めて黨務紛糾、全黨まさに崩壊せんとするの状態にあるを知つた。兩派の同志諸君は、皆な予の常に敬服おく能はず、救國の師友と仰ぐ先輩である。然るに今や諸君は互ひに身を紛争の渦中に投じ、水火の苦を甜めつゝある。長江各省を回觀するに、到る所内訌紛々として、まさに一大恐怖時代が醸成されんとする有様である。大敵未だ除かれず、軍閥なほ野獸の暴を擅にし、人民恐怖、前途暗澹として如何なる危険の起り來るや圖り得ない。玉祥夙夜兢々として革命の功を一簣に虧かんことをこれ恐る。予はこゝに鄭州の軍次にあり、先づ教を武漢方面の諸同志に求めた。予は鄭州會議において、暫時黨争をやめ、一致以て北伐を敢行せんことを建議したる後、更に徐



州に趨き、南京方面の革命同志と會見し、蔣總司令と聯名を以て北伐の通電を發した。予は思ふ、兩派互ひに意志の疎通をはかり、双方の誤解を除去し、以て兩者聯合一致し、ともに討賊の一事に専心したならば、今日の紛争は立ちどころに解決するに至るであらう。本黨内の私争は總て軍閥掃滅の後を俟ち、全國代表大會を開き、黨規に照して合法的に解決す可く、現在に於ては、各同志諸君はよろしく臆説によることなく、斷然北伐を執行すべきであらう。

予は共產黨同志に對し、更に口を極めて苦勸せんことを欲する。諸君の採る所の革命方法にして若し國民黨の三民主義の革命方法と完全に一致せざるならば、兄等は先づ暫時國民黨の聯合戰線より身を引き、農工運動の階級闘争を停止し、兄等が後方にありて國民黨の實力を分裂せんことありこの天下の誤解を免るべきである。然らざれば則ち兩者俱に傷き、却つて軍閥帝國主義者をして殘喘を延ばしめ、再び死灰復燃し、永遠に不平等條約排除の機會を失ふであらう。

ソウエート聯邦同志の中國に來れるは、本來吾が國民黨を援助せんが爲めである。若し彼等にして別個の陰謀を有せんか、直ちにこれを國外に追放すべきである。然らざれば前日の善意は轉じて叢怨の淵となり、兩國の間、民族的感情の乖離を來たし、千秋の恨事をのこすであらう。今や農工運動の階級闘争は到る處に蔓延し、兄等の放ちたる火は燎原の火の收むるなきが如くである。兄等にして速かに身を引かざれば、遂に兄等自身を燒く火となるであらう。予は一つは民族

感情の機微を思ひ、今一つは故總理の對露政策に背かざらんが爲め、ソウエート聯邦の同志に向つて、この際自ら退去し、一切の嫌疑を避けんことを願つてやまないものである。中國は産業上落伍の國家であり、國民舉つて帝國主義の經濟侵略下にある。軍閥、官僚、買辦等皆な帝國主義の道具たるに過ぎない。資本家も亦帝國主義者たるを免れず。爾餘の國民には何等階級の區別無く、又従つて何等の闘争もあり得ないのである。しかもこれあらしむるは、畢竟人民相互の讐殺を醸し、社會を大亂に導けるに原因する。故に中國にありてはたゞ國民黨ありて、階級闘争あるべからず。國民黨の成功は農工の解放を求むるにあり、平等の實現を期するにある。何故諸兄は國民黨によらずして、徒らに階級皆無の中國社會に、階級を作り、自己の破滅を致すが如き不經濟極る共產革命の法をこらうとするのであるか。中國革命成らざるば、世界革命は決して望む可からず。中國革命若しならば、世界の帝國主義者は大勢已に去るを知り、豁然自悟の日の至るや必然である。諸兄にして、眞に帝國主義者を一蹴せんことを欲せば、中國全民族の爲めに犠牲となる可く、決して前掲の如き舉に出づ可きでない。これ予の切に中國共產黨同志諸君に告げんと欲する所である。

總理世を去るや、革命未竟の功を吾等後輩の同志に托された。在天の靈常に吾等の前に臨鑒す。況んや敵前奮闘の諸將士は、死傷者五六萬に及び、また全國同胞はまさに水深火熱の中にあり、



暴虐無道の軍閥は已に強弩の末をなすの時に於いてをや。吾等革命同志は大敵を顧みずして、互ひに争ふが如き斷じて許すべからざるころである。玉祥革命の領袖諸兄に對しては一様に敬愛の念に堪えない。然るに何ぞはからん、諸兄は數十年生死をも共にせる知己より一朝にして寇仇にならんとは。實に心に忍ぶ能はざる所である。既往の動亂における人民の犠牲は實に莫大である。然るに今又革命軍數十萬の生命を、少數人の感情上の争具や新學說の試験用に供せんとするは斷じて不可である。玉祥率ゐる所の軍隊及び一般革命同志は入黨の當初たゞ内は國賊を掃蕩し、外は不平等條約を排除し、以て中國をして永久に自由平等の地位に置かんとする一念あるのみであつた。その當初予は全く本黨内部の争ひの斯くの如く激烈なるものあるを知らなかつたのである。黨員擧つて互ひに左袒右袒の區別をなすは、實に全國同胞をして、赤色及び白色恐怖を抱かしむるものである。これ實に暴を除いて復讐をなし、革命をして混戦に陥らしむるものである。不肖玉祥の愚を以てしても尙ほこれを以て千秋の恨事とするのである。予は双方同志諸兄に對しては黨國を害し、反革命の行動をなし、或は徒らに事態を粉糾せしめ、遂に自らその渦中に入り、その身を忘るゝが如きことあらんとは、決して信じ能はざる所である。さり乍ら事已に茲に至つた上は、たゞ快刀亂麻を斷つる法によらざる可からず。もし諸兄にして既往の紛争は總てこれを忘れ、將來新たに身を以て革命の爲めに盡くされんか、予の幸福、これに過さるるはない。茲

に年來の素志に基き、吾が主張態度を表明して、以て忠誠苦國の勸を致す次第である。幸ひにして全國同志並に革命同志諸賢の御諒察を乞ふ。

同年秋、馮玉祥は更らに國民軍駐漢代表劉驥をして左の如き釋明を發表せしめたが、これも亦當時國民軍のこつた中立方針に對する武漢及び南京の非難に對して、馮玉祥の苦衷を訴へたものである。

民國十五年の春、西北國民軍の北京撤退に際し、廣東政府は特にその代表を馮總司令の許に派遣して來たが、當時馮氏は已に訪露の途に就いた後であつたので、その頃恰度張家口に居合せた余は馮氏に代つて、廣東特使と會見した。その後余は總司令の命によつて、自ら廣東に赴き、馮氏の代表として、廣東軍との攻守盟約交渉及び締結の局に當つた。

西北國民軍はその建設の當初から革命を志したのであるが、久しく北洋軍閥の勢力圏内に介在し、四面みな敵の環境にあつたため、その旗幟を鮮明にするを避け、鋒鏃をかくすを得策した。漸やく十五年六月、廣東との盟約成立するに至り、始めて、名實ともに革命軍たるの態度を表明したのである。次いで、國民政府の漢口に移さるゝや、余も亦同地に赴いたが、間もなく國民政府に内訌起り、南京及び武漢の兩派に分裂し、互ひに反目對立するの狀勢となつた。然し、馮總司令は南京、武漢兩派の分裂を以て、「兄弟の反目」をなし、兩者いづれに對しても、友軍の關係に



ある國民軍としては、いづれか一方に左袒することも出来ねば、またいづれか、他の一方を攻撃することも出来ず。たゞ居中調停、以て兄弟和合の目的を達せんことに努力するの方針をこつたのである。

この方針の下に、馮總司令は李鳴鐘を南京に特派し、また余を駐漢代表として漢口に駐在せしめ以て兩派の調停に努めたのである。然るにその結果、兩派ともに馮氏の苦衷を解せず。南京では、馮氏は大軍を擁し乍ら、つひにこれを動かさず、徐州の失守を坐視したて非難し、漢口では、馮氏が唐生智の懇請を拒否して、東征しなかつたことを詰責した。然るに事實はこれに正反對で徐州の失守は國民軍の應援がなかつたためでなく、全く作戦上の齟齬に原因する。即ち南京軍は七月五日徐州を撤退したが、余の鹿鍾麟にも、兵三萬を率ゐ、濟寧を占領したのは、七月六日である。その間の差、僅かに一日に過ぎなかつた。もし南京軍にしていま一日持ちこたえるか、或は西北軍にして、いま一日早く濟寧を占領したならば、徐州は守を失せずして濟んだであらう。西北國民軍が唐生智の要求を容れず、東征出兵を肯んじなかつたのは、馮總司令が、武漢も南京も、元來一家に屬し、如何なる内訌も、會商によつて、解決すべく、干戈に訴へて、相殺傷すべきでないこの見地に立つたからである。當時大敵なほ革命軍の前に控え、少しの隙もあらば、それに乗じて、逆襲に備せんとしてゐた時である。もし西北軍にして、あの時唐生智の懇請を容れ

て、東征出兵を決行したとせんか、敵軍はこゝに南下逆襲の機會を得たであらう。即ち馮總司令は武漢當局に對して、先づ北伐を決行し、軍閥を打倒した後、始めて内訌の諸問題を解決するも決して遅からずと答へたのである。しかも唐生智は東征を先きにし、北伐を後にせんことを主張してやまず、こゝに彼我意見の衝突を惹起するに至つたのである。

馮總司令は已に國民黨に加入した以上、黨の命令に服従し、各軍一致協力、以て敵軍撃滅の事にあたるの外、何等他意なきは云ふまでもないところである。南京、武漢の分裂對抗に當り、西北國民軍のこつた政策方針についての是非の批判は今更ら辯明するまでもなく、近き將來において、おのづから判明するであらう。

四

馮玉祥は十六年秋から、十七年春にかけて、河南における地盤の開拓に専心したが、その間彼の成した事業の最も顯著なるものをあげれば、第一、共產黨の排除、第二、靳雲鶚軍の討滅、第三、馮玉祥式の新施設である。左にこの三項について記述して見やう。

馮玉祥が赤露より歸つた當初、國民黨内において「馮は共產黨員である。彼は赤化した」この評判が高く、馮の河南進出後も、頗りにこの説が傳へられ、また鄭州會議に際しては、共產黨はさかんに同會議の結果、武漢派も亦馮玉祥にも左傾し、時局は益々赤化傾向に向ふであらうこの説



を云ひふらし、これがため、馮の國民黨に對する態度は一時疑問の眼を以て見らるゝに至つた。

しかし、事實はむしろその正反對で、當時は恰かも武漢派、即ち左派國民黨すら、湖南における共產黨の跋扈に漸やく手を焼き始め、同時に甘肅及び陝西において、所謂左傾小兒病者が、共產主義をはき違へて、無暗みに過激な運動を始めたため、最初ソウエート顧問すら舌を卷いたほど過激な政策を鼓吹した馮玉祥すら、これではたまらぬ氣がついた時であつたので、双方ともに共產黨排除問題について、意見が接近したと云ふのが事實に近い。而して馮玉祥はその後、徐州において蔣介石と會見するに至り、いよく反共方針に傾き、鄭州に歸るや否や、直ちにその實行にこりかゝつた。しかし、流石は用心深い馮玉祥だけあつて、同じ共產黨狩りをやるにしても、決して暴力には訴へない。たゞ共產主義は支那にこつて「時機尙早」と云ふ簡單な理由で、共產黨員の國民黨領外立退きを要求したに過ぎない。従つて河南でも陝西でも、湖南や上海で行はれたやうな共產黨員の慘殺を見るに至らず、頗る無事に片附けた。

八月始め、ボロヂンは武漢を逐はれて、河南に來り、洛陽に馮玉祥を訪うた。當時のこゝについては、種々の説があつて、真相を知るに苦しむ。一説によれば、馮玉祥のボロヂンに對する態度は極めて冷淡で、たゞその領内を普通の旅客として素通りせしめたに過ぎないとも云ひ、また馮玉祥自ら十七年夏彼を豫州百川に訪ふた大塚格、家員田知花、信量氏に向つて「ボロヂンを放逐したのは乃

公だ」と大聲し、足で人を蹴る素振りまでして見せたこと云ふことである。しかし私の知る限りではこれ等ボロヂンに對する冷淡なる取扱説は、要するに馮玉祥が「赤」と呼ばるゝことを避けんがために、殊更らに鼓大に吹聴したもので、真相は必らずしもさうでなかつた。固よりボロヂンが武漢から逐はれ、居所がなくなつて、河南に來たことも事實であると同時に、河南に來た後、馮玉祥にも容れられず、つひにロシアへ引揚ぐるの已むなきに至つたことも事實であるが、しかし、洛陽におけるボロヂンはたしかに賓客の待遇を受け、また馮玉祥は親しく彼と膝つき交せて談じたこと云ふ確説がある。但し兩者の意見は全く相反し、ボロヂンはその重々しいそして力ある能辯を振るひ、勞農革命の徹底論を諄々説き去り説き來り馮玉祥を説服することに努力した。しかし、馮玉祥もまたその天才的雄辯を以て左傾小兒病の危険なること、階級闘争の時機尙ほ早きことを論じ、ボ氏の説を駁して譲らず。結局流石のボロヂンも沈黙させられ、悄然洛陽をすて、モスクワに歸つて行つたのである。

##### 五

民國十六年夏以降における馮玉祥の共產黨及びソウエート・ロシアに對する態度については、馮玉祥自ら當時の演説または文書において極めて精細にこれを表示してゐる。左に掲ぐるは十七年一月三日鄭州において、總司令部全員を集め、共產黨に對する國民黨の大方針を題して、試みた講演



の梗概である。

本日早朝、こゝに諸士の來集を求めた事は「共產黨に對してわが國民軍の今後採るべき對策」を講話せんがためである。共產黨は唯物史觀及びマルクス主義の書籍を唯一無二の聖典として、その黨員たるものは、強制的にこれを閱讀しなければならぬ。彼等はマルクシズム以外の書籍は三民主義、五權憲法等その他すべてこれを反革命的或は妥協的理論となし、絶対にその閱讀を許さぬのである。黨の決議案に對しては、その合理的なる否を問はず、共產黨員たる者は絶対にその遵守を強制されてゐる。若し共產黨員にして黨の決議案に對し、少しでも不満もしくは反對的態度を示さんか、彼等は直ちに黨規違犯として、嚴重なる制裁を加へられるのである。故に共產黨員は黨の決議に對し、たゞ十分それを理解し得ない場合においてもこれに服従せざるを得ないのである。共產黨は往々極めて微細なる過失に對しても除名處分をなすことがある。而して一旦除名處分を受けたる黨員に對しては他の一切の黨員は言語をすら交へず。従つて共產黨員はみな戦々怖々除名處分を恐れてゐる。然るに吾が國民黨は黨員に對する甚だ寛大であつて、たゞへな戦々怖々除名處分を恐るゑも、容易に除名處分を加へるが如きことはないのである。吾黨同志黨員にして大なる過失をなすも、容易に除名處分を加へるが如きことはないのである。吾黨同志の新黨員を紹介するに當り、他人をして入黨書を代書せしめることすらある。共產黨は常に國民

國民黨はたゞ共產黨の如く、無理解なる壓迫手段を採らぬのみである。

數月前、同志吳稚暉氏は申報紙上に、約三萬字の長文を寄せ、予のこゝにも言及し、「馮玉祥同志は露國と絶交せざるも、その軍紀は極めて嚴明、民を愛する子の如く、ボリシエウイキミ雖も國民軍を擾亂破壊することが出来ない」云々論じてゐる。

この記事について、一つ思ひ出した出來事がある。即ち昨年秋露人クローノフが陝西に於て狩獵し、大きな鵝鳥を獲てこれを予の許に贈つて來た。その折、余は吾が國には外人の禁獵令あり、外國人にして中國において狩獵を爲さんとする者は、中國官憲の許可證を要し、また二十餘元の狩獵税を納めなければならぬ。然らずして狩獵を爲さば、法律違反である。故に予はその地方の道尹と縣知事に「貴官等は何故外國人を恐るゝや。クローノフなるもの、許可證無くして狩獵をなせるに、何故これを罰しなかつたか」と詰責し、クローノフの所罰を求めた。こゝにおいて顧問ウスマーノフはク氏の狩獵をなせるはたゞ一回のみであるから寛恕されたいと陳情したが、予はこれに對し「君は予の顧問である。予より質問ありたる時、これに答ふ可く、今予より何等の質問なきに何を云ふか」として、一言の下にウスマーノフの嘆願を拒否した。吳稚暉同志の論文所説はまさに右の事實に當るのである。

予は嘗つてボロヂン氏に一通の電報を送り、速かに中國を去り、歸露せんことを促した。その後彼



は武漢より鄭州に來り、予を訪ふて曰く「予は中國にありて革命事業のため多大の貢献を爲した積りである。然るに貴下は予に向つて歸露を促さる。そは何故であるか」云。予はこれに對し「貴下の歸露は予一人の希望に止らず。汪精衛、徐季龍等の諸氏もまたひさしく切望してやまぬころである。何となれば、そは貴下の兩湖に於て爲したる事績は甚だ當を失したからである。ソウエート・ロシアの貴下を中國に派したるはその國民革命を援けんためであつた。然るに貴下は素りに兩湖地方に階級闘争を惹起せしめたではないか。勞働者をして工場主と戦はしめ、小作人をして地主に反抗せしめ、店員をして店主と亂闘せしめ、遂に民衆をして生存に法なからしめたではないか。故にわれ等は貴下の歸國を要求せざるを得ないのである」云答へた。

予は嘗つて在露當時屢々共產黨員と辯論を戦はした。當時予はボリシエウイキーに向つて「貴國が人を派して中國に至らしめたのは中國の革命を援助せんがためである云ふけれども、貴國の中國援助は結局共產革命を助けたのみで、國民革命を助けなかつた。共產革命は吾が中國にあつては徒らに民衆に禍害を及ぼすのみで、われ等はかゝる毒物を必要としないのである」云語つた。予はまた彼等に向つて「兄等は既に共產革命を實行せり云ふ。然らば彼の街上幾多食を得ざる老人の群をなすは如何。兄等は自己の父母と同様、彼等を養ふことを得ざるや。またロシアにおいて到るころ悔徳が出發し、萬年筆を携帯するものは必ず、すられる云ふ現状は如何」云。

ボリシエウイキーはこれに對して苦し氣に「現在われ等は未だ完全に共產主義革命を實行してゐるのではない。その完全實現はなほ百年以後の事である」云答へるのであつた。

先頃露國から四人の同胞が歸國した。予は彼等に「お前達は共產黨員か」云問ふた所、彼等は「然り」云答へた。そこで予は重ねて「お前達は既に共產黨員である。然らば共產黨は何故お前達を去らしめたか」云問ふたところ、答へて曰く「共產黨は予等は馮玉祥派の者であつて、眞の共產黨員でない。故に予等を國外に放逐したのである」云。予は彼等に「三民主義を研究したことがあるか」云問ふた所「三民主義は讀んだことがない」云のこゝなので、予は蔣子良、鄧飛黃等同志に請ふて、彼等に三民主義を講義せしめた所、彼等は二週間ならずして、三民主義の價值を知り、共產黨の黨籍を離脱して、忠實なる三民主義の信徒となつた。

現在營倉内になほ數人の共產分子を禁錮してあるが、予は彼等に對しては、常に人を遣はして三民主義の意義と共產主義の錯誤とを講釋し、彼等の悔悟を待つて禁を解いて、釋放すること、もし彼等にして、迷ひ醒めず悟らざる時は永久に囹圄にあらしむるのみなることを告げしめてゐる。國民軍の各部、その他の官廳において、共產分子あらば即刻新聞紙上にこれを廣告し、共產黨との關係脫離を聲明させなければならぬ。大丈夫事を爲す、須らく公明磊落の態度あるを要する。もし外面羊皮を被り乍ら、内面虎狼の心を抱き、本黨内を攪亂せんか、その發覺次第嚴罰に



處するであらう。

各部責任者は常に良くその部内人員の言語行動に心を留め、共產主義的嫌疑者あらば、直ちに報告せよ。今後何部の論なく、共產分子發覺してもこれが報告を怠らんか、予の目に止り次第、責任者も亦相當の處分を覺悟しなければならぬ。

## 六

民國十六年五月より六月初めにかけて、鄭州及び開封が國民軍の手に歸し、同軍先鋒の隴海線楊山に進出するや、津浦線の北軍は歸路を截斷されんことを恐れ、倉皇として山東南部に撤退し、南京軍は勢に乗じて北進し、南京西北の兩軍は徐州において會師するを得、馮玉祥は鄭州において武漢代表と會議したる後、更に徐州において南京派領袖と協商し、北伐の大計を決したるは、前項所説の如くである。

その後國民軍は孫良誠、韓復榘、石友三、馬鴻逵の各部を以て、京漢線方面を擔任し、孫連仲は襄陽に、方振武は南陽に、岳維峻は信陽に駐して、唐生智を牽制し、以て武漢、南京兩派の提携を促進せんことにつこめ、尙ほ前方にある鹿鍾麟、靳雲鶚、劉鎮華、梁壽愷、龐炳勳、鄭大章等の各部隊を山東西部方面に配置し、靳をして黄河に沿ひ、濟南を突かしめ、他は道を分つて濟寧に進出せしめんとした。これ等各部隊中勢力の最も大なるは靳雲鶚軍であつた。靳雲鶚は國民軍の瀋陽を出

でない以前、曾て保衛軍總司令の名義を以て、河南境界の各軍を率ゐて、彼自ら十二萬の大軍を擁すこととしたはごであるが、十二萬は誇大であるとしても、少なくとも五萬の實力を有してゐたのである。加ふるに靳雲鶚は山東人であるので、馮玉祥は一つは靳の實力を認め、一つは彼の野心を満足させんため、七月十一日特に靳をあけて山東宣撫使に任じ、已に蘭封、曹州一帯に集中せる鄭大章、梁壽愷の各部の東進を制して、山東のここはあけて、靳軍に一任するの方針をこつた。もし當時この方針通り、戦局が發展したならば、或は十六年中に山東省は南軍の手に歸したかも知れぬ。然るに靳雲鶚は他に野心あり、陽に服命を表示し乍ら、陰に孫傳芳、張宗昌、唐生智と結托し、國民軍の河南における勢力を根本より顛覆せんとし、日々軍費と武器の要求を口實にして出動を肯んぜず。五萬の兵を擁して河南の中部郟城、臨潁等十餘縣に盤據し、國民軍のために後方の一大脅威をなした。こゝにおいて馮玉祥は山東省の西部に對して十分の兵力を送ることが出來ず、同時に武漢の唐生智が東征を高唱するに及んで、南京も亦大部の軍隊を山東境界から武漢方面に移動するこゝとなり、山東正面における南軍は國民軍も南京軍も殆んど同時に手薄となり、八月始め、江蘇山東省境における激戦で、南京軍敗北し、つひに徐州を抛棄するこゝとなつた。當時南京では徐州の失守を以て國民軍が坐視して救はざりしに歸し、甚だしきは唐生智の豫定の計劃なりと誣蔑するものさへあつたが、事實は必らずしもさうではなかつたらしい。當時國民軍の軍費及び軍需品は多く南



京及び上海に仰いだので、徐州は國民軍にこり、南京及び上海との連絡上、極めて重要な地點であつた。従つて徐州の得失は南京軍よりも國民軍にこつてより重大な關係をもつてゐた。果して徐州の失守後國民軍は物質上、精神上多大の打撃を蒙つたのである。されば國民軍が江蘇北境における激戦に際して、南京軍の救援をなし得なかつた主なる原因は靳雲鶚軍のために牽制されたことにあること云ふ説の方が事實に近いやうに思はれる。徐州陥落の直後馮玉祥は東路五萬の軍を率ゐ、そのうち三萬を以て専ら濟寧を攻め、二萬を以て徐州の助攻に當り、別に後方より選りぬきの精銳數萬を移動し、これに策應せしむることゝした。然るに國民軍が夜中に出勤して徐州西方の郝寨、九里山等の地に馳せ至つた時、蒋介石は突如八月五日兵を撤して南京に歸つてしまつた。これがため國民軍も亦暫時碭山一帯まで撤退せざるを得なかつた。それは一面には南京側と充分なる聯絡を遂げ期を約して挾攻をなすべく、一面には靳を促して出勤せしむるためであつたが、はからずもその後武漢、南京兩派の關係は日々險惡となり、蒋介石をしてつひに一時引退を決行するの止むなきに至らしめた。

徐州の失守後、南方革命軍の旗色振はず見るや、靳雲鶚はいよくその野謀を露出し、一方孫傳芳、他方唐生智と連絡をこり、國民軍にこつて代つて、河南省の實權を掌握するの計を廻らした。靳雲鶚は元來直隸派に屬し、吳佩孚の部下であつたが、十五年冬から十六年春にかけて、吳佩孚の

河南に戻り來るや、奉天軍に通じて、吳をおひのけ、奉天軍敗退するや、革命軍に内應し、身を青天白日旗下に托した。最初所屬軍隊は纔かに三萬人に過ぎず、従つて討奉戰爭に於ても、その功する所は甚だ少ないのであつたが、しかもなほ國民政府は靳を第二方面軍總指揮、河南省政府委員に任じ、その後暫らくして、民政廳長を兼任させた。馮玉祥も亦靳に對して、禮を盡し、また前後五十餘萬元の軍資、軍服、彈藥、食料等を給し、直屬軍隊よりも、遙かによき待遇を與へたが、しかも靳はこれに満足せず、屢々政府に向つて第五集團軍總司令に任ぜんことを要求した。武漢政府はやむを得ず、改めて靳を中央政府直轄第八方面軍總司令に任じたが、靳はなほこれを以て、不平をなし、河南獨占の野謀を逞しうして、密かに孫傳芳及び張作霖と三角同盟を結び、その條件として孫は江蘇、安徽を、張は山東を保持し、両者は靳の後援によつて、河南を攻畧し、西北軍討滅の後河南全省をあげて、靳に與うる計劃であつた。故に靳は政府の命令に接し乍ら、出勤を肯んぜず、つひに徐州失守の結果を招くに至つた。

こゝにおいて馮玉祥はいよく武力を以て靳雲鶚を討滅し、北伐の一大障礙を除去することに決し、十六年九月六日つひに靳の總指揮免職を命じ、新たに馬吉第を正軍長に、秦德純を副軍長に任命した。これに對し、靳雲鶚も亦戦闘準備に着手し、その所屬軍隊に向つて、郟城に集中を命じたが、靳はもこより馮の敵でない。馮玉祥は三日内に十萬の兵を動員し、靳の領域十一縣を四方より、



包圍し、孫良誠の部隊をして北方より、孫連仲の部隊をして南路より、同時に迫攻挾撃せしめ、兩部隊は十一日漯河に會師し、僅かに七日間にして靳軍を討盡した。靳は身を以て逃れ、その所屬部隊は或は陥り、或は逃乏し、靳軍はこゝにいよく全滅するに至つた。

靳雲鶚軍の討滅後馮玉祥はいよく河南全省の實權を確實に掌握するこゝが出来た。かくして國民軍はその勢力、甘肅、陝西の山奥から、河南の中原に伸び、三省を根據地として徐ろに北伐の機會を待つこゝになつた。

## 七

馮玉祥は民國十一年、吳佩孚のために、河南督軍から陸軍檢閱使にまつりあけられ、北京に去つてから、恰度五年振りで、再び河南省に舞ひ戻つた。そして今度はたゞに河南全省の實權を掌握したばかりでなく、更らに陝西、甘肅兩省も亦彼の版圖に歸し、その部下の國民軍は武器その他の軍需品こそ不足あれ、その總勢四十萬に達し、いよく革命軍中、押しも押されぬ一方の重鎮たるに至つた。而して五年振りで再び河南、陝西の支配者となつた馮玉祥はその新領土内において、如何なる政治を行つたか。彼は河南に入りて、新たに省政府の主席となるや、先づ三民主義に基礎を置く廉清政府を樹立し、積弊を打破して、省民こゝもに革新を行ひ、「新河南」を建設すべしと標榜し、左の河南統治六大綱領を公表した。

第一、軍政の統一 兵を養ふはもこ民を守らんがためなりこは古來の明訓である。然るに軍閥專制の弊生するや、地方に轄據し、省區を視るこゝ、私産の如く、兵士を以て自己の爪牙に比し、貪殘暴戾爲さざる所なく、國に禍ひし、民を養するこれより甚しきはない。玉祥軍を治めて年あり、専心以てこの弊を除かん事に努め、其の軍紀の嚴なる、遠近皆な良く知る處である。今次、河南を治するに際し、予は、誓つて一兵を練つて、以て一兵の用を收むるこゝを期し、且つ凡そ兵たる者は皆な民衆の武力たる可く、決して軍隊を以て、私人の走狗、争權攘利の具たらしめざらんこゝを期するものである。

第二、吏治の刷新 國家の官を設くるはもこ民の爲めである。然るに官吏道德廢頹し、賄賂風をなし、一度官吏こなるや、百姓を以て魚肉こなし、劣紳こ相俟ち、惡を爲すに至らざるなきありさまである。古人の所謂清慎その職に勤むこ云へるが如き精神は全くその存在を失ひ、爲めに吏治すたれ百姓何等の得る所もなきは當然の事である。予は誓つて貪官汚吏、土豪劣紳を打例せんこゝを期す。若し收賄職を穢す者あらば、總て法に問ふて實を質し、敢て民意に問ふまでもなく嚴重に懲罰を行ひ、官界の惡習を一洗す可し。但し徒らに誣告をなし、或は叫囂秩序を紊亂する者も、亦決して許さぬ。

第三、財政の整理 國家の支出を度る、もこ常則あり。然るに、政綱弛緩して、貪吏一旦權を得



れば、即ち擅に貨を貪る。或は私官を濫用し、或は巧に名目をたて、人民よりその厘毛を取り盡し、財貨を見るこも泥沙の如くである。而して官肥え民瘦するも、これを笑罵するものがない。民の租賦を納むるは、民事を辨ぜんが爲めであつて、軍政の經費官吏の薪捧、一錢も人民の膏血にあらざるはない。其の來る所の安からざるを思へば、いよく妄にこれを用ふ可きにあらざるを悟る。故に金錢は之れを人民の爲めに用ふるに於ては巨萬も多ししない。然らざる場合に於ては、一文も雖も、妄費も云ふ可きである。河南の財政今や紊亂の極にあり、今に至つてこれが整理を行はんに、先づ節制以て租を取り立つるを要す。而して一面には無能機關を廢止し、一面には官吏の薪を減少し、總て冗費を省いて財はこれを民用に供せんことを期す可きである。

第四 教育の黨化 教育は立國の根本要政である。人材を育成し、社會を改造するも皆なこ、によるのである。故に凡そ平民學校、半日學校、夜間學校等は必らず一刻も早く設立し、以て教育の普及を求むることを要する。總て三年以内を期し、老幼に論なく、五十歳以下十歳以上のものは一切最少千字を知らしめ、以て三民主義を了解し、舊來の陋習を打破し、社會能力を改革し、一致團結の精神を養成せしめんことを期す。

第五 災民の救恤 吾が河南省は連年兵戰の巷々化し、常に灰燼を被れるは、實に心を痛ましむ

る次第である。惟この禍災全省に普遍し、財政枯渴の時にあたり、巨額の救恤資金を準備せんことは、實に易からざる事である。乍然無法の内にも極力努力せざる可からず。即ち被災の區は其の最も甚だしきものより、救恤をなさねばならぬ。例へば彼の洛陽の張治公の部下に焚燒慘殺を蒙るや、立ち所に課税を減少し、救恤金を與へたるが如きは、其の明證である。凡そ一人も雖も之れを失ふは心に忍びざる所にして、力能く及ぶ可くんば、決して之れを坐視せぬであらう。

第六 盜匪の肅清 盜匪の類の多き河南を以て其の最たるものとなす。人は決して生れ乍ら盜匪たるものでなく、多くは飢寒に迫られ、身を挺して險に走つたものである。故に盜匪を肅清せんには、宜しく清源の法を取り、之れが爲めに衣食の充足、教育の振興を謀らなくてはならない。思ふに河南省民の窮乏は一は水患に災ひされ、一は水利無きによるのである。患を除いて利を生ずる、これ爲政の大本である。爾今予は先づ水災防禦の施設を行ひ、井を穿ちて水利を興し、民をして安然業に就き、家給して人足るの實を擧げんことを欲する。又懇切なる教化を施して、自ら盜匪たるなからしめなければならぬ。兵力を以て剿滅するが如きは、治標の法に過ぎず。決してこれを用ふ可からず。

八

前項の河南統治六大政綱は從來馮玉祥が採り來つた政治方針あまり變つたところなく、従つて



彼の河南統治策は五年前のそれをくりかへすもので、たいした新し味はあるまいかと思はれたが、いよく實際やり出した施政振りを見るに、全く世人意表の外に出づるものばかりである。

即ち五年前の彼はクリスチャン・ヂエネラルとして、大いに「基督教式善政」を強制勵行して、「善良なる暴君振り」を發揮したが、今度はロシアから歸つたばかりの「赤化」將軍として以前よりも更らに奇抜な變つたやり口を見せた。その施政方針には大分「赤み」を帯びて來た。殊に彼が陝西及び河南兩省で施行した、一、佛寺の學校化、二、大仕掛の清潔法、三、婦人の放足、四、模範農村の建設等は、たしかに彼が訪露中ポリシエウイキーに學んだものに外ならぬ。即ち佛教の壓迫はポリシエウイキーの宗教打破運動の眞似と見るべく、清潔運動の催うしはレーニンの度々試みた土曜労働に比すべく、婦人の放足運動はロシアにおける回教婦人のチャルダ廢止運動と同一の筆法で模範農村の建設はロシアで見て來たソウエート農村、共產農村、組合農村等をそのままを實驗しやうとしたものであらう。

十七年二月半頃、北京の晨報紙上に載つた鄭州通信に、馮玉祥の「新河南の建設振り」が面白く書いてある。その一節に曰く

毎月、一日と十五日が掃除日である。馮玉祥は何所にあつても、自ら箒をこり、塵籠をかついで、掃除にあたる。部下の將校は云ふまでもなく、各縣の縣知事始め、文官も亦街路の掃除にあたらぬ

ばならぬ。曾て馮玉祥が陸軍檢閱使として、南苑に駐在してゐた時、あの廣大な南苑兵舎に、一匹の蠅さへるなかつた云ふことは有名な話であるが、南苑ばかりでなく、彼の往くところ必らず清潔法が勵行される。しかしてそれが今では馮玉祥自ら掃除夫となつて、實踐躬行の手本を示すのである。掃除の勵行にとも、市街の外観をこゝのへるべく、開封では家屋の色の統一が始まつた。即ち商戸の表てはすべて青色、住宅の壁は白色と云ふ定めである。開封が濟み次第、鄭州、洛陽、西安に及ぼす云ふ。北京時代でも知られた如く、白壁や、塀に白色で色々な格言や教訓を書きつけたものであるが、今度は三民主義からこつた文句を到るこゝろに書きつけたものである。殊に道路に建て、ある昔の徳政碑などは悉く三民主義の訓言に刻り直してしまつた。寺奄や、觀音廟は封鎖してしまつて、そのあごに學校、圖書館、遊民習藝所等を設け、僧侶と道士は教養院に入れられ、そこで別の職業を仕こまれるこゝになつてゐる。宗教はクリスチャン一點張り云ふのであらうか。佛寺は存在をゆるさぬ。お次ぎは例の醜業婦征伐である。曾て七八年前吳佩孚の下に河南督軍をやつた時も、開封の遊廓は悉く閉鎖されたものだが、今度も御同様、醜業婦は全廢で、娼妓は片つばしから逐ひ出され、そのあるものは病院に入れて看護婦の修業をやらせてゐる。この廢娼は開封ばかりでなく、西安、鄭州、洛陽等、河南及び陝西兩省の主なる都市到るこゝろ嚴重に勵行された……。



▼節儉の對聯▲

馮玉祥の節儉主義は有名なものである。彼は自らこの主義の實踐躬行者たるのみならず、あらゆる機會において革命の同志にもこれを強制的に勸めてやまない。國民黨員が北伐成功して長江へ進出するや、武漢に入つて漸やく奢侈に流れんごし、武漢政府當局者も亦、時々の會合に際し、その卓上に茶菓を出すご云ふ始末ごなつた。これを耳にした馮玉祥は自ら一幅の對聯を認めて武漢政府委員に送つた。對聯に曰く。

三點鐘開會。五點鐘到齋。是否眞正革命精神？半棹子餅干。一棹子菓木。忘了前敵飢寒戰士！（三時の開會、五時の御揃、是れ眞の革命精神か？半棹の餅に一棹の菓物、敵前飢寒の戰士を忘る！）

ご。それになほ「完全官様」なる四字の横額を添へた。

八 北 京 入 り



北伐四大戦局・國民革命軍の新陣容・蝸牛式戦略・  
山東攻畧戦・保定の會戦・張作霖の都落ち・京漢線  
のマラソン競走・北伐完成奉告式・碧雲寺の革命軍  
巨頭・北京より南京へ

南方革命軍は民國十五年八月五日、蔣介石が韶關を發してから、十七年六月八日、山西軍の北京入城まで、約二年の歳月を経過して、遂に北伐の目的を達した。而してその間戦局は一勝一敗、加うるに内訌の頻發を以てし、幾多の波瀾曲折を経たが、これを大別して次ぎの四期に分つこゝが出来ること思ふ。

北伐戦局の第一期は、民國十五年七月、國民革命軍の廣東出動から、同年秋の長江進出迄でこし、第二期に入つて、西北國民軍は五原において誓師し、國民革命軍は南京及び上海を攻畧して、長江一帯を平定するこゝが出来た。第三期に入り、西北國民軍は十六年の春陝西より、武漢軍は湖北より、相競うて河南へ進出し、奉天軍を黄河以北に逐ひつめ、これと同時に南京軍は江蘇省を攻畧し、山東省の南境に達したが、中途にして南京と武漢の間に内訌おこり、また國民軍は河南における靳雲鶚の灰色軍に牽制され、南軍陣容亂るゝや、直魯軍機に乗じて逆襲に轉じ、ために南京軍は徐州を奪回され、その結果、蔣介石は一時國民革命軍總司令の職を辭し、北伐戦局はこゝに一大頓挫を見るに至つた。

民國十六年秋、北伐戦局はその第四期、即ち最後の幕に入つた。同年十月、山西軍はいよく革命軍に加はり、俄然十數年來固守し來つた山西モンロー主義をすてゝ、反奉行動をおこした。こゝ、



において京綏及び京漢兩線の沿道にわたり、奉山兩軍戦端を開き、同時に河南における國民軍も亦山西軍と連携して再び北進行動を開始することゝなつた。

同年十一月一日、馮玉祥は南京の國民政府に向つて「西北國民軍は再び徐州において南京軍と會師せん」と打電し、南京軍の北伐再開を促した。この時已に武漢では、唐生智失脚して、南京と合併することゝなり、蒋介石は十一月八日、日本を發して急遽南京にかへり、再び國民革命軍總司令の職についた。

爾來蒋介石の率ゆる南京軍(第一集團軍)は、津浦線に沿ふて北上し、馮玉祥の率ゆる西北國民軍(第二集團軍)は、一部東北方向に進出して、南京軍と策應し、一部京漢線を北上して、奉天軍にあたり、閻錫山の率ゆる山西軍(第三集團軍)は京綏、京漢の兩線に沿ふて、北京を目標に前進を始め、北伐各軍の陣容大いに振ふ。

## 二

これより先き、西北國民軍は河南の靳雲鶚軍及び陝西の田玉潔軍の反馮動亂を平定して後、内憂漸やく去り、同時に唐生智の失脚後、南京と武漢の妥協も成立し、また山西軍との協同作戰の協定も成立したので、いよいよ北伐討奉の本戦に入ることゝなつた。たゞし西北國民軍は兵力依然充實を缺き、殊に武器彈藥において平常の缺乏を感じた。この時において馮玉祥は民國十六年秋、京漢線

方面は暫く守勢を持し、その主力はこれをあけて隴海線方面に集中するの作戰方針をこころに決した。當時隴海方面の北軍は、約十五萬人で、その主力は張宗昌の率ゆる直魯軍であつた。褚玉璞、王棟、許琨、徐源泉の各軍は、正面より徐州、楊山及び歸德に向つて進攻し、方永昌、劉志陸、潘鴻鈞の各軍は右翼をなし、定陶、荷澤より考城一帯をねらひ、左翼の寇英傑、于學忠、張繼武、張敬堯の各軍は、拓城、鹿邑一帯に向つて迂迴運動をおこした。これに對し、西北國民軍は三路に分れ正面は孫良誠、韓復榘の兩軍、右翼は鹿鍾麟軍、左翼は劉鎮華軍をもつて對抗した。正面の歸德以東、楊山附近には初め鹿軍が駐防してゐたが、やがて北軍西に向つて動くを見るや、鹿軍も亦密かに西方に移動した。當時國民軍は兵力手薄にして、彈丸また缺乏し、且つ給養の不足、運輸の遲滯等種々の困難があつたので、やゝもすれば北軍のために三面から包圍さるゝの危険状態にあつた。こゝにおいて馮玉祥は俄かに戰略を變更し「内戰作戰法」をこつた。即ち鹿軍をしてなるべく敵を誘ひ、深く河南に入らしめ、漸次蘭封附近に撤退し、又轉じて南下し、拓城一帯に防備線を布き、然る後、機を見て右翼より北軍を壓迫し、同時に孫、韓兩總指揮所部の主力を以て、蘭封正面に逆襲し、張宗昌軍を三方よりたゞく計劃をたてた。

第一次の接戦は十月三十日より十一月四日迄で續き、大体の戦局は馮軍の作戰通りに展開し、深く誘き入れられた直魯軍は、蘭封より楊山附近に至つた頃、鄭大章所部の國民軍騎兵隊は楊山の東



方から背後に迂廻し、猛烈なる不意討を加へ、ために直魯軍潰亂敗走し、國民軍は俘虜八千餘人の外、鐵甲車「北京」「山東」「河南」「泰山」「河南」等數輛を奪獲した。然し當時南京軍の行動豫期の如く進展せず、國民軍のみ、深く追撃するの危険なるを顧慮して、一時前進を中止し、徐ろに直魯軍の逆襲し來るを待つこととした。案の通り、直魯軍は間もなく大舉逆襲して來た。國民軍は再び敵を誘ひ入れて、側面からたゞく前回の作戦をくりかへし、その中央部隊をして蘭封附近に退かしめた。十一月十二日馮玉祥は左の軍令を下した。

- 一、孫良誠の第三軍は蘭封附近に集中す。
- 二、石友三軍は柳河の西南に集中す。
- 三、鹿鍾麟軍は歸徳の西南にありて、石軍と聯絡し、その一小部隊は歸徳城に據るべし。
- 四、馬鴻逵軍は曹縣或は同地と蘭封の間に集中す。
- 五、騎兵の甲部隊は大軍の右翼を援護し、乙部隊は敵軍の不意に乘じ、その司令部を襲撃す。
- 六、劉鎮華軍は考城及び荷澤の線にあつて持久作戦をこるべし。

十一月十六日、第二次の決戦が開始されたが、國民軍の左翼劉鎮華軍は最初から兵力少く、且つ第一次決戦の直前に、姜明玉、梅花魁の兩軍が北軍の誘惑にかゝつて叛旗を翻へし、全軍の作戦に非常の困難を生ぜしめたことがあつたので北軍は劉鎮華軍の弱味につけこみ、大舉して考城正面に

猛襲して來た。こゝにおいて馮玉祥は特に孫良誠軍を左翼に移し、劉鎮華軍を援助せしめたが、孫劉兩軍よく戦ひ、對手を侮つて盲滅法に前進して來た直魯軍は、再び大敗し、孫良誠軍は考城の一戦で、一萬四千餘の直魯軍を捕虜にし、軍長潘鴻鈞及び師、旅、團長十餘人を擊殺した。同時に正面の韓復榘、石友三各部も亦左翼軍に呼應して前進し、直魯軍の主力に向つて猛襲を加へ、ために褚玉璞等もまた頽勢を挽回するのいさまなく、全軍敗退するに至つた。

この時何應欽及び賀耀祖の率ゆる國民革命第一集團軍も亦津浦線に沿ふて北進し、十二月十六日、徐州を占領し、西北國民軍も同地で會師することを得た。

河南進出直後の國民軍は、益々武器彈藥に缺乏し、しかもこれが供給を受くべき途をもたなかつた。ロシアからの援助は中止され、武漢及び南京からの補給にも種々の故障があつて、中々手にはいかない。こゝにおいて、馮玉祥は敵の武器をこるの外なしとし、河南東北の戦争において、前記の如く、二回くりかへし、同一の作戦を用ひた。所謂蝸牛式作戦をこり、出たかと思へば忽然として、穀中に没し、引込んだかと思れば、また突如として、鎌首を擡げ來る。馮玉祥が實戦において、最もよくその戦術の手腕を發揮したのは、この河南東北の戦争である。

かくして巧みに敵を深く誘ひ入れて、側面からこれをたゞき、敵の主力部隊を捕虜にしたのは、即ち敵を討ち乍ら、その武器彈藥を補獲せんとの一石二鳥を打つたのである。同じ



作戰を二度も續けて成功した馮玉祥の手腕も、驚ろくべきであるが、またくりかへし同じ手についた直魯軍の眞拔さにも驚かざるを得ない。

### 三

徐州再度の占領後、蔣馮兩總司令は重ねて鄭州において會商し、最後の北伐作戰の計劃を議したその結果、國民軍は、一、京漢線に鹿鍾麟、韓復榘、龍炳勛、劉驥各軍を、二、大名方面に劉鎮華、張維璽各軍を、三、濟寧方面に孫良誠軍を配置し、大体の作戰方針としては、先づ主力を以て濟南を攻下し、その勢に乗じて、京津線に進出し、京綏、京漢兩方面にある奉軍は、これを自發的に退却せしめんことを期した。而して國民軍は聲東擊西の戰畧を用ひ、馮玉祥自身はわざと新郷、彰德、道口一帶を往來して、主力軍が京漢線方面に向ひつゝあるかの態度を示したので、北軍は奉軍の主力、即ち第三、四方面軍及び鄒作華の砲兵をあけて、京漢線に集中し、大名方面には、褚玉璞、于學忠の兩軍、濟寧方面には孫傳芳軍、津浦線方面には張宗昌軍を配置し、先づ孫傳芳軍の迂迴運動によつて、徐州を奪回し、南京軍と國民軍との連絡を截斷し、然る後京漢線において攻勢に出づるの計劃をたてたのである。

十七年の春四月、北支那の平野も漸やく、戰爭シーズンに入り、南北兩軍ともに決戰の準備をこゝのへた。この時に當り、いつも缺乏づくしの國民軍が軍資の途出に窮した揚句、馮玉祥は孫良誠の率ゆる國民軍の精銳をあけて、蔣介石の指揮下に移し、以て漸やく南京政府から二十萬元の補給を受け、山東攻略の軍費にあてた。この一事を以てしても國民軍の窮乏察するに餘りあるのである。

その頃また馮玉祥は人に語つて「鹿鍾麟軍と韓復榘軍は五原誓師この方、全く一文なしで、今日迄で戰爭を續けて來たのである。この一事は寸時も余の腦裡をはなれたことがない」と歎息したさうである。

津浦線方面の南京軍は繆培南、劉峙兩軍これを擔任し、數日ならずして、鄒縣、滕縣各地を攻下した。濟寧方面は孫良誠、方振武、賀耀祖の各軍これを擔任したが、孫傳芳軍が中々優勢で、この方面の戰鬪は頗る激烈を極めた。四月の二十日頃、孫軍は賀軍を擊破して豊沛にあらはれ、一直線に隴海線を突き、まさに第一、第二兩集團軍の聯絡を斷つて、徐州の後路をつくの形勢を示した。然るにこの時津浦線正面において孫軍に呼應し、長驅南下すべかりし直魯軍は、却つて滕縣及び界河の線において、南京軍の奇襲に會し、バタ／＼と兗州に向つて退却した。これがために、已に沛縣より豊縣の附近迄で進出し、今一息で徐州をつかんだ孫傳芳軍も、中途から逆戻りせざるを得ないこととなり、北軍の作戰に重大なる齟齬を生じた。馮玉祥はこゝに戰局轉換の機に乗じ、四月二十一日、左の軍令を發した。



- 一、孫良誠及び馬鴻逵軍は敗退敵軍を追撃して甯陽、汶上の線に至つて、命令を待つべし。
- 二、方振部軍は濟寧より甯陽大道に至り、敵を追撃して、甯陽に止つて命を待つべし。
- 三、石友三軍は濟寧附近を肅清し、全軍鉅野に至つて令を待つべし。

孫傳芳軍はその退却の途中、黃口車站の北方六里の地點において、石友三軍と衝突し、多大の損害を蒙り、孫傳芳は江蘇、安徽、江西、浙江、福建五省聯盟總司令の印を遺棄し、肩輿に乗つて逃亡するの見苦しい敗北振りを見せた。これに前後して、孫良誠軍も亦濟寧を攻下したので、孫傳芳軍は全く後方との連絡を斷たれ、敗殘部隊を集合する邊さへなく、全軍いよく敗走潰亂に陥つた。

山東戦局の有利なる發展を機會に、馮玉祥は四月二十七日蔣介石を野鷄崗に訪問し、重ねて山東攻略の作戰を議した。兩總司令は先づ濟南占領を決し、全軍に向つて攻撃繼續の軍令を下した。この時早く孫良誠、馬鴻逵、席液池の各軍は、破竹の勢を以て、濟南城の西南方に肉迫した。蔣馮兩總司令は近く濟南で會合すべく電約し、勢に乗じて天津を衝くの計劃であつたが、この時突如五月三日の濟南事件勃發し、蔣介石軍はために多大の損害を蒙り、山東正面の戦局は一時停頓状態に陥つた。

四

これより先き、馮玉祥は新郷より蘭封移駐に際し、鹿鍾麟に彰徳の死守を嚴命した。奉軍の精銳たる第三、四方面軍は、密集重砲を以て彰徳城を環攻したが、守將鹿鍾麟はよく戦ひ、苦戦一ヶ月に及んだ。

この時漸やく津浦戦方面における孫傳芳及び張宗昌の兩軍は、滄州に退却したので、京漢線の奉天軍主力も亦保定に後退の已むなきに至り、北軍は保定、滄州の線によつて、北京及び天津の最後の防禦戦を試みるに決したのである。然し津浦線の南軍は濟南において、日本軍のために交通線を遮斷されたためか、その北進行動遅々として發展せず、五月半頃から南北戦争の中心は、主として京漢線に移り、戦闘は保定正面に集注することとなつた。最初山西軍は京漢線及び同鐵道の西方正面を擔當し、馮玉祥は主として京漢線の東側(即ち京漢津浦兩鐵道の間)に沿つて北進した。

五月下旬に至つて、保定正面の戦局はいよくその酣に入つた。

保定會戦に際し、南軍側では山西軍主として攻勢をこり、馮玉祥軍はその所在をかくして、主力部隊の姿をあらはさず。奉天軍は馮軍を見失ひたるため、作戰上多大の困難を感じた。自ら激戦に加はらずして、しかもよく奉天軍を牽制したのは、馮式戰術だけあつて、頗る老巧を極めたものである。



京漢線正面の山西軍は五月十三日より二十七日に至る三週間、その主力をあけ、多大の犠牲を拂つて攻勢に轉じたが、奉軍優勢にして、少しも動搖の模様がなかつた。然るに最初山西の北部正面において、張作相の率ゆる奉天第五方面軍と對抗しつゝ、あつた山西第七軍が張作相軍の北退するを聞くや、この正面を撤して、靈邱、淺彈、廻龍嶺を越え、二百二十支里を迂廻し、突如として京漢線の北方滿城に向つて、奇襲を試み、二十七日同地を占領した。滿城は奉天軍右翼の背後における要地であるが、奉天軍はこの方面に對し、二ヶ師の兵力を持つてゐたにも拘はらず、山西軍の奇襲に會して大敗し、歩兵銃四千挺、機關銃、迫撃砲數十門を奪はれて潰亂した。背面を突破された奉天軍は大勢支へがたしと見て、全線の總退却を始め、山西軍は三十日朝、完全に保定を占領した。保定の占領は云ふまでもなく、北京の運命を決したものである。

##### 五

奉軍の精銳を集めた第三、四方面軍はその武器と訓練において、從來の支那各軍中随一と稱せられ、殊にその最も誇りとする砲兵は頗る優秀なもので、軍事専門家の觀測では、第三、四方面軍にして、卓越せる指揮官の下に、眞劍に戦ふならば、一時に南方各軍を相手にしても、勝算があること云はれたほどである。

十七年五月、直隸平野における奉軍の戦況概は、楊宇霆や、張學良から、退却の外なしとて

の窮境を訴へた時、張作霖は北京の大元帥府から前線に向つて、「保定—滄州の線によつて、あくまで防守すべし」この嚴命を發し、「この線以北には南軍の一兵も入れず」と傲語してゐた。當時奉天軍の主力は兵數においても、また武器においても、優秀な戰鬥力を完全にもつてゐた時で、十分決戦の成算があつたのである。

然るに第三、四方面軍はたゞ山西軍の側面攻撃を受けただけでタヂ／＼となり、馮玉祥の主力は遂に決戦を交へるに至らずして保定の線を退き、次いで琉璃河をすて、間もなく北京を去るに至つた。奉軍は如何にしてあれだけの武力を有しながら、かく見苦しい敗北をなしたか。それは私の觀るところ、主として軍長の張學良や楊宇霆等が、張作霖のかたく決心した決戦の方針は全く正反對に、戦ひながらも、常に南方と妥協の道を見出すことのみ焦慮したことの原因すると思ふ。いぢかば、ちかの勝負を一戦に決する度胸は楊張の胸中になかつたのである。この二人は、最初から何かして圓滿に張作霖を下野させ、奉軍をして青天白日旗の下にその存在を續けしめ、以て自家の政治的生命の延長をはかつたのである。この陰謀があつたからこそ、眞劍に戦はうしなかつた同時に、また思ひ切つて退却も決行しかねたのである。

保定—滄州の線で、馮玉祥と雌雄を決せんとは、張作霖のかたい決心であつた。然し、一度保定の線の破れたとき、張作霖は早くも北京引揚を決意した。保定退却の後、なほ張作霖が北京居すわり



を主張し、楊宇霆や張學良が泣いて彼に直諫した……云ふは全く事實の反對である。保定の線破れて、奉天軍が琉璃河の線に後退したとき、張作霖は楊宇霆に向つて「何故灤洲の線まで退かなかつたか」と叱責した云ふ話がある。さすがに張作霖の戦略はいつも玉碎主義である。決戦の意志も堅いが、いよく敗れたとなつた時は、思ひ切つて退却を決行する。然るに五月直隸平野の戦争において、楊、張兩軍長のまつた作戦は全くその反對の方針をまつたものである。保定では決戦せず、敗戦後の退却はだらしのない不徹底なるものであつた。

然らば、何故、楊、張は決戦の勇氣をかき、又同時に退却を濫つたか。當時楊、張、南方各派の間には、孔繁爵、危道豊、葛光庭等の政客が來往し、頻りに妥協交渉を進めつゝあつた。その主要條件は、張作霖の下野後、北京に成立すべき委員制政府に張學良、楊宇霆を入れ、二人だけはこのまゝ、北京に居残るべし……云ふにあつた。即ち張作霖を犠牲にして、楊張が北京におけるその政治的生命を延ばさうと考へたのである。この野望があつたからこそ、第三、四方面軍はその退却を濫つたのである。張作霖が北京を引揚げたあきでも、楊張の二人はなほ妥協成立に一縷の望みをおいて最後まで居残りを策したのであるが、やがて孔繁爵等の交渉は固より楊張をのせて、その戦意を鈍らせるための政策であつて、少しも誠意のないものであることがわかつた。妥協交渉は果して何等の成果を見ずに破裂し、六月五日、楊、張は倉皇として北京をおちた。

しかもこの二人は灤河の線に退却した後においても、なほ實力を擁して、これをなるべく高値で賣るべく交渉を試みた。一時青天白日旗を滿洲にかゝける云ふ條件で、滿洲における自家實權の承認を要求した云ふ説が頻りに傳へられた。その遣り口のかげ引多く、にえ切らざる、結局女さかしようして賣り失ふものではなからうか云はれ、又恰かも大阪城が外濠を埋められ、次いで内濠を埋められ、最後に落城の運命に會した如く、ジリ／＼壓迫を受け、だら／＼退却した揚句、殆んど戦はずして南軍のために呑まれ、つひに關外に退いて滿洲にたてこもる外ない羽目に陥つた。楊、張の行動は郭松齡の如き露骨な謀叛の形式をこそこらなかつたが見やうによつては、いよいよ叛逆であることも非難されたが、その結果は果して張作霖一人を犠牲になし、張學良等が滿洲にその存在を續けることゝなつた。新舊兩派てふ二つの異つた椅子に座した張作霖はその一方の椅子のグラつくや、忽然として没落の悲運に會することゝなつた。

六

六月三日の未明、張作霖都を落ち、四日早朝皇姑屯の奇禍に倒るゝに至つて、張學良及び楊宇霆も亦五日倉皇として北京を去り、六日には治安維持會及び外交團の諒解を得て、過渡期の北京警備のために居残つた鮑毓麟軍を除き、奉天軍は一兵も止めず、北京を引揚げた。こゝに於て南軍は何日北京に入るであらうか。山西軍、馮軍、いづれが入城の先鞭をつけるか。或は馮、閻兩軍入城



の先きを争ふて、同志討ちをせぬであらうか……北京はまたしても寸前暗みの不安状態に陥つた。

これより先き、保定南方の會戰中、山西軍が京漢線の西側中央正面において攻勢をこりつゝあつた時、馮玉祥軍は京漢線と津浦線の中間にあり、最初からその主力の所在をかくし、奉軍の牽制に當つただけで直接戦闘を交へなかつた。即ち激戦は主として山西軍の正面に集中され、殊に京漢線の西側滿城の山地から奉軍の右翼に加へた山西軍の攻撃最も功を奏し、奉軍は遂に保定の線を琉璃河に移し、ついで北京に退却するこゝになつた。それまでかくれてゐた馮軍の主力はこの時突如として、その正体をあらはし、京漢線の東側に沿うて追撃戦に移つた。馮玉祥は將卒激勵のため、左の詩を賦して全軍に分ち、北京を目標として強行前進を命じた。

打到北京過端陽、臨陣不能無死傷、革命軍人抱犧牲、轟轟烈烈幹一場、

打到北京過端陽、爲民除賊萬民揚、碎屍萬段精神樂、不與賊匪共世上、

打到北京過端陽、禍國軍閥莫下場、三民主義定實現、福國利民動外洋。

この時已に奉軍は保定の退却と同時に、北京放棄の方針を決めてゐたことゝて、逃げ足早く退却したが、追撃に移つた山西及び國民の兩軍も亦互ひに北京一番入りを競ひ、大急行で北進した。京漢線の東西兩側に沿うて兩軍は實に、晝夜兼行、いきもつかずに強行軍をつゞけた。これを馮、閻兩軍の「北京入りのマラソン競争」と云ふのである。

六月六日の夕方に至り、北京城外蘆溝橋に徐永昌軍(山西軍)現はるこの報道が傳はつたが、それと殆んど同時に、南苑に韓復榘軍が約二萬到着したこの急報が飛來した。六日の夜半には兩軍互ひに入城の先きを争ひ、蘆溝橋の附近で、小競合を演じたこの説さへ傳はり、六日から七日にかけての北京はいよく不安の空氣に包まれた。

國民軍としては、恰かも十六年五月、河南の鄭州入りに際して、唐生智軍の機先を制した如く、北京でも山西軍をおしのけて、都入りの先鞭をつけんしたのであらう。しかし鄭州に於ける手際よき成功は、北京では見苦しい失敗に終つた。一、北京及び天津は南京政府が最初からこれを閻錫山軍の手に委するこゝに決定してゐたことゝ、二、外交團側が馮軍の入城を忌避したこゝ等が障碍で、韓復榘軍は南苑には着いたものゝ、遂ひに北京に入ることが出来ない。

甘肅の山奥から懸軍萬里、連戰苦闘、漸やく北京城外に達した國民軍は北京の城壁を目の前に眺望し乍ら、城内には一步も足を入れることを許されぬ。云ふまでもなく國民軍にまつては實に千秋の恨事であつたに相違ない。

六月八日に至りいよく山西軍の入城を決し、張蔭梧の率ゆる山西第六軍の三ヶ聯隊は、青天白日旗を先頭におし立て、喇叭の音も勇ましく、彰儀門から北京に入城した。

この日、滿城青天白日旗と滿地紅旗を以て飾られ、五色旗は全くその影を没し、こゝに南方廣東



におこつた北伐の叫びは、二年の後遂に北京に及ぶに至つた。六月八日は實に國民革命史上、永久に紀念す可き日であらねばならぬ。

山西軍の入城後、第七軍長張蔭梧が、北京警備司令に就職し、直ちに市内の秩序維持に當り、かねて懸念された騷擾もなく、人心は漸やく落ちつくことが出来た。たゞこゝに突如として起つた一問題は、韓復榘軍が鮑毓麟軍のある部隊をその歸奉途中に押へて、武装解除を斷行したこゝである。鮑軍は治安維持會と外交團の懇請及び國民政府の保證の下に残留した軍隊で、治安維持の使命を果して歸奉の途についたものである。然るに韓軍がこれを通州に待ち伏せて、武装解除を行つたこゝは必然外交團及び治安維持會の當局をして狼狽せしめ、こゝに韓軍と外交團との間にひき悶着をひきおこし、日英米佛和の五國公使自ら自動車を連らねて南苑に韓を訪ふなご大騒ぎを演じたが、結局韓軍の方で折れ、武器の一部を返却するこゝとなつた。國民軍は斯くして北京には入城も出来ず、また敵軍の武器分捕りにも與れず、十六年秋の鄭州入の時の手を再び北京に於て試みんしたこゝは全く見苦しいあて外れに終つた。

七

六月十日、山西軍即ち國民革命第三集團軍總司令閻錫山は北京に入城し、即日京津衛戍總司令の職に就いた。かくして、京畿攻略の完成を告ぐるや、蔣介石はこゝに、革命の一段落を機會として、

孫總理の遺靈に、北伐成功の報告式を擧ぐべく、國民革命各集團軍の總司令を北京に召集するに決した。

六月の末、蔣介石は南京を發し、先づ長江を遡り、武漢に立ち寄つて、李宗仁を誘ひ、七月一日鄭州に着し、同地で馮玉祥の歓迎を受けた。

七月三日、蔣介石は宋美齡夫人を携へ、李宗仁と列車を前後して北京に着し、直ちに西山に赴き、孫文靈柩の安置してある碧雲寺境内の含青齋に投じた。かくして、國民革命軍の巨頭は、第一集團軍總司令蔣介石、第三集團軍總司令閻錫山、第四集團軍總司令李宗仁の三人だけは出揃つたが、第二集團軍總司令馮玉祥の顔が見へない。

馮玉祥はこの歳の春、風邪に罹り、烈しい咽喉カタルをおこしたが、平常頑強にして、我慢強い彼のこゝこゝで、病氣を顧みずに、無理をおし通して、病勢をつのらせた上、張作霖の奇禍の報に接して氣が抜け、すっかり弱つてしまつたのが、漸やく輝縣百川の温泉で、靜養の結果、稍々快方に向つたものゝ、まだ充分恢復したとは云へなかつた。加ふるに國民軍と山西軍との折合が、北京入城の競争當時から、益々悪化し、種々の謠言が傳へられたので、馮玉祥の北京入りは一時大なる疑問された。

かくするうちに、馮玉祥は突然新郷の總司令部を發して、北上の途についたとの報が傳へられた



が、しかし馮玉祥乗列車の石家莊に着くや、彼は同地は北伐戦争に際して、最も激烈なる戦場となり、莫大なる損害を蒙つたところであるから、市民を慰問しなければならぬとて下車し、市民を集めて慰問の講演なさして一日滞在した。次いで七月四日夜半、保定に着くや、彼は停車場より、直ちに保定城の西北隅、薛家莊の南にある先祖の墓地に参詣し、墓碑の傍らに小さいなテントを張つて、席を敷き、毛布を一枚ひろげて野營した。彼の先祖の墳墓は碑石、亭閣、樹木など悉く吳佩孚軍のために破壊されたまゝになつてゐる。馮玉祥は長い間兵馬倥傯、東奔西走、つひに祖先の墳墓を敵の馬蹄にかけたる不孝の罪深しとて、祖塋の前に静座黙思すること、二日二晩に及んだ。馮玉祥は保定到着の日、かねて用意しておいた意見書を發表した。主として軍權の統一、裁兵の速行、財政の整理、黨務の刷新、國民生計の改善を論じたもので、大要左の如くである。

我が中華民國の救國三種族保護の國民革命運動は、孫先總理の唱導以來、已に四十餘年。而して帝國主義の侵略は消滅せず、不平等條約の束縛も解除する能はず、三民主義の國家も未だ實現するに至らない。また賣國軍閥は根本的に肅清に至らず、全國の同胞は水深火熱の中に伏し、無衣、無食、死亡相繼ぐ。これ實に直接間接革命運動に参加する者の均しく痛心泣血し、自責の念にたえないところである。罪戾叢振、何ぞ功を録するに足らん。茲に北伐勝利し、將に軍政時期より、訓政時期に入る、建國事業の遂行再進に就いて、中央黨部は七月十五日を期し、首都において、第五大全体會議を召集し、計劃を確立することに決定した。而して最近、各方同志は大局收拾の意見を發表す。崇論閎議極めて鉅觀を呈す。玉祥病を抱き、建白する所無かりしを深く悲しむ。茲に國民政府の命を奉じ、且つ蔣總司令の召をうけ、本月四日病を押して、保定に至る。更に往いて總理の靈を西山に祭らん。且つ各方武裝同志、軍事結束の方法を協議し、中央の採擇に備へんとし、謹んで愚見を畧陳する次の如し。

#### 一、軍權の統一

軍權の統一は未だ裁兵の實行し得ざる以前にありては、先づ各集團軍總司令、各方面軍各軍團總指揮を廢除し、軍或は師を以て、軍制の最高單位とし、各軍は即日軍事委員會にて接收し、並に各軍事管轄の領袖を統一し、中央各種の工作に参加し、常に首都に駐在し、職務を履行し、協力合作せしむべきであつて、徒らに委員の虛名を擁するが如きは、一切これを撤すべきである。

#### 二、裁兵

數百萬の「工せずして食するの軍隊」を養ふてゐるは國家は破産せざるを得ない。兵工政策の勵行を棄て、第二條の出路はない。中央は即日裁兵委員會を組織し裁汰條例を明定し、武器不全の者、老弱用に堪えざる者、紀律不良の者、訓練を缺如せる者の如きは裁汰すべきである。各軍は軍事委員會の接收を完了した後、派員點檢し、點檢を終了した上は裁汰條例に照し、これを裁し、さ



れを留めるかを決定し、分別緩急期に按じ、裁汰を終るべきである。各集團軍をして平均或は比例裁汰せしむるは不可である。蓋し軍隊は國家の所有に係るもので、各軍事領袖の私有し得ざる所のものである。國家の裁兵に國際間の軍縮會議は、その性質根本的に同様でない。國際間の軍縮は國際間の武装平和を維持するにある。國內の裁兵においては、その著眼する所は各軍事領袖の勢力を限制するこいふのでは斷じてない。此のこゝが最も明確に認められざる限り、心理的にはいつまでも各軍事領袖の割據状態が繼續されるであらう。裁兵實行の時、各軍事領袖は必ずこの點に留意すべきである。國家の生死存亡に關するにおいては、互に誠意を以て之に出で、裁兵以前においては、招兵及び敵軍殘部の改編を嚴禁すべきである。若しこれによつて己の勢力擴充の用をなすものありせば、裁兵を言ふも、空言にして、耳を掩ふて鈴を盜むに過ぎぬ。

### 三、政權と財政

政權と財政統一の必要は人々能く之を知る。また能く之を言ふ。余は政權の統一は、須らく地方割據の悪因を根本的に打破するにあると信ずる。また財權統一は須らく國家財政の破産の補救に著眼すべきである。これが實行は一定の順序と方法を確定し、阻碍の減少を期し、次第に推行すべきである。所謂「以黨治國」の眞義は即ち「黨義を以て國を治める」にある。黨員を以て國を治めるこいふの謂ひではない。今後國家の建設は政治方面に於ては須らく天下の才を用ふべき

である。以て邦國の難を救ひ、經濟方面に於ては須らく天下の材を用ひ、以て建設の功を成就し財源を開發し、豫算を確定し、用途を公開し、支配を平均すべし。これを以て今後國家財政整理の法門とす。

### 四、濟南事件

濟南事件發生後、外交方針は大体忍辱負重を主張す。たゞ如何なる程度に忍ぶか。漫然として際限なく畏縮するは不可である。國家が世界に立つ上は不抗不卑を以て最も重要とする。たゞ國力充實せず、臥薪嘗膽、以て不平等條約を廢除するは我黨の根本生命である。無畏の精神を奮ひ、此の目標に向ひ、生命を堵して、之に赴き、絲毫も假借せず。自ら革命の旗幟を破るが如きは斷じて許さぬところである。

### 五、黨務

黨務問題は年來黨潮紛起し、理論錯雜し、黨員及び民衆は實に遵從する所なきの感がある。全國統一、黨務發展の際に當り第一の緊要事は理論を整齊し、意志を統一するにある。若し共信不立歩趨各異のこゝあらんか、民衆を繋ぐこゝ能はざるのみか、黨員をして、分散せしめん。危険まここに甚し。



## 六、國民の生計

十餘年來、禍亂相次ぎ、民生安ずるの日なし。國家何を以て立たん。今後一切の地方政治施設は人民生活の小康恢復を第一歩とす。苛捐雜税を除き、匪を剿して郷を清め、農村組織を改良し、職業教育を提唱し、水利を振興し、小規模の機械工業を奨励する如きは、均しく人民苦痛を解除し、人民の福利を増進するの前提である。若しこの最底限度の要求も亦實行する能はざるにおいては、國民の生計問題は、永へに正當の解決を得ること不可能にして、所謂革命運動云ふも自ら人を欺瞞するのみ。

以上の六ヶ條は玉祥目前の最急務と確認する所のものである。請ふ、中央主持これを辦理し、各方同志應力合作して共に事の成功を致さんことを、想ふに今後一切の施設は、國家盛衰存亡の分る所とす。また吾黨功罪得失の判る所である。懺悔するも事實を補するなく、方針再誤するを容さず。救亡の分れ目この一舉に在り。幸ひ全國の同胞全黨の同志我れに教示を垂れんことを切望してやまない。

かくして、馮玉祥は保定までやつては來たもの、前記の意見書を公表したま、先祖の墓前に腰をおろしたきり、北京へ來さうもなく、一時國民革命軍の巨頭會議は結局、保定で開かれるだらう

しかし、北京の蔣、閻、李の三總司令から、人を保定に派して頼りに馮の入京を促し、また鹿鍾麟なども、かくなつた上は、馮自身入京する外はないと勧めた結果か、七月六日孫文の祭禮の當日未明、馮玉祥は例により無蓋車に打ち乗つて、保定を發し、籤から棒の如く、突如北京に來り、西直門驛から直ちに西山に赴き、祭禮式場に油布をかけた麥藁帽をかぶり、價三元の兵卒服をつけたその六尺大の巨軀を現はした。

## 八

國民黨總理孫文の靈に、北伐成功を報告するの祭典は、民國十七年七月六日、蔣介石、馮玉祥、閻錫山、李宗仁總司令の司祭下に、その靈柩の安置しある碧雲寺において舉行された。

この日早朝八時二十分、碧雲寺境内の一隅に起れる奏樂に、張群を先導者として、蔣介石、馮玉祥、閻錫山、李宗仁の四總司令がそろつて塔下の廣場に姿を現した。實はその瞬間まで本日の祭典に列席するかさうかが疑問とされてゐた馮玉祥が突然こゝに姿を現はしたのみか、その魁偉なる巨軀を、極めて粗末な灰色軍服に固め、肩から斜めに皮帶をかけ、腰には小さな劍を夾み、両脚は卷脚半でまきかため、支那靴を穿き、頭には青布の油布をかけた古るぼけた麥藁帽を戴き、病のためであらうか、もやくこのびた頬鬚に埋つた顔の中に、眼だけを光らせ、悠然と重々しい歩を運んで來たさまはまことに、あたりを壓するの概があつた。



かくて奏樂につれて蒋介石、馮玉祥、閻錫山、李宗仁は喇嘛塔の高い石段を上つて、その塔内に設けられた祭場の席に就き、吳稚暉、邵力子等在京の國民黨幹部、白崇禧、鹿鍾麟、陳調元、方振武初め各軍長及び内外新聞記者、各團體代表が石段を上つて着席した。

式場は喇嘛塔の高い石段を上りつめ、塔をくりぬいた二間四方もあらうかと思はれる石室で、孫文氏の靈柩は北京で客死して以來、ごこへも動かさるゝごこなく、ごこに安置されてゐたのである。式場内の光景は中央に孫總理の遺骸を納めた黒漆塗りに花模様巻繪をほごした見事な靈柩が安置され、靈柩の前には宋慶齡女史が三年前北京を去る日にたむけた花輪が、その儘飾られ「妻宋慶齡」を書いたリボンが目惹く。その上の正面に總理の肖像額を青天白日旗が交叉され、孫氏の遺訓たる「革命尙未成功。我同志仍須努力」の對聯が靈柩の兩側に垂れ、正面の天井には「有志意成」の額が掲げられ、その他七寶の香爐、花瓶、花輪等が處狭いまでに飾られ、香の匂があたりを漂ふ。

主祭者たる四人の總司令は靈柩前の右前に奥から蒋介石、馮玉祥、閻錫山、李宗仁の順序で直立し、參列者一同の着席終るや、いよく儀式に移つた。哀樂先づ奏せられ、蒋介石はやをら身を進めて三度靈前に生花をたむけ、これが終つて主祭者打ち揃つて總理の遺像に三鞠躬の禮を行ひ、參列者一同もそれに次いで三鞠躬の禮を捧げた。次いで河北省政府主席委員商震は靈柩前方の右側より歩を進め、靈柩に向つて默禮し「維中華民國十七年七月六日、中國國民黨……」を祭文を捧讀する

や、祭場は水を打つたやうな靜肅さにかへる。

祭文の朗讀終るや、「三民主義の實現」「南京遷都」「不平等條約解除」を初め「孫總理の遺訓に基づく革命の完全なる達成」等八項の誓言を連ねた蔣氏個人の祭文が、同じ商氏によつて代讀される。

北伐成功報告祭文捧讀が終るに、祭典者によつて靈柩を覆へる青天白日旗、滿地紅旗が取り除けられ、蒋介石、馮玉祥、閻錫山、李宗仁の革命軍四巨頭は歩を靈のほごりに運び、柩上の硝子の小窓から孫總理の遺容を拜せるが、流石に永年その深き董陶をうけた蒋介石は、故總理の遺容に謁して感極まり、聲を放つて嗚咽し、參列者をして涙を新たにせしめた。蔣馮閻李四將復席の後、革命先烈の靈に對する三分間の默禱が行はれ、奏樂の裡に四巨頭は靜かに石段を下つて退場したが、蒋介石の顔は頬も眼も涙で赤く光り、馮玉祥や閻錫山の面にも深い感激の色が漂ふてゐた。かくて支那國民革命史上永久に紀念すべき北伐成功報告式は九時四十分莊嚴裡に終了した。

## 九

碧雲寺祭典の翌七日、馮玉祥は閻錫山、李宗仁、白崇禧等を歴訪かたぐ西山から、民國十五年春の引揚げ以來二年目で入城した。この日馮玉祥は病氣も快癒した見え、前日のやつれを見せず。日にやけた鬚ボウ／＼の顔に微笑をたゝえつゝ、自ら軍用荷物自動車の運轉臺につて悠々市中をのり廻はし、大いに市民の前に馮玉祥式を發揮して見せた。



同日午後二時、平津衛戍總司令閻錫山は北京の主人公格で、蔣介石始め、來京中の國民革命軍の巨頭及びその幕僚を外交大樓に招いて一大盛宴をはつた。席上蔣介石は主人公の乾盃に對する答辭において、「北伐完成の時に當り、同志一堂に會するを得たるは一大快樂とするところである」として同慶の喜悅を述べ、馮玉祥は起つて

蔣總司令は今日の歡聚を以て、一大快樂である云はれたが、余はむしろ、一大悲痛事と思ふ。それには三つの理由がある。

さて、蔣介石の言を駁し、革命未成の理由を説明して左の如く論じた。

その第一の理由は不平等條約未だ廢除されないことである。中國は元來東亞數千年の先進國であるが、最近百數十年來、列強から不平等の待遇を受け、不平等條約の束縛を蒙りつゝあり、まことに痛心に堪えぬ次第である。われ等は一日も早く不平等條約の羈絆から脱しなければならぬ。然らざる限り革命は完成された云へない。たゞへば白耳義の如き最少の國家を以てすら、今なほ我國に平等の條約改訂に肯じない。従つてその他の大國のこれに應ぜぬは云ふまでもないのである。列國は中國人を視るに、犬や豚にも及ばぬ位である。痛哭の至りではないか。われ等は死を誓つて不平等條約の廢除に努力し、その目的を達せざれば止まぬ覺悟でなければならぬ。上海、漢口、沙基及び最近の濟南事件を追憶すれば、更に一層われ等をして刺戟を感じ、痛憤措かざらし

めるのである。然り、われ等は一身を捨て、これに力争せねばならぬ。革命未だ完成に至らぬ第二の理由は舊軍閥の殘黨が未だ全滅に至らぬことである。われ等は今後引きつゞき反動派の打倒に奮闘せねばならぬ。第三の理由は各軍裁兵未だ實行に至らぬことである。革命はとにかく一段落を告げた。従つて革命軍の全部を存在せしむるの必要を認めない。一兵多ければ、多いだけ人民はその一兵の負擔を増すのである。民國の十七年間變亂はみな兵禍にその端を發してゐる。目下の最大急務は裁兵を勵行し、解備された兵を以て、工人に使用することにある。余は特にこの事を以て重大視してゐるもので、諸同志の贊同努力を希望する次第である。もし將來以上の三項が成功した曉において、諸同志と一堂に會することがあれば、何程か楽しいことであらう。その時こそ、眞に革命の完成を喜ぶことが出来るのである。

十

馮玉祥は久し振りの北京入りを機として、七月九日、二年前國民軍が難戰苦闘多數の死傷者を出した南口の故戰場を弔ひ、陣亡將士の追悼式をあげた。

南口は北京北方の要地である。十五年春、北京から北退した國民軍は、南口の天險によつて、奉直聯合軍と戦ひ、奮闘四ヶ月に及び、つひに利あらず、多大の損害を蒙つて、綏遠奥地に敗退するの已むなきに立ち至つた。即ち國民軍は南口戰役において大敗したのである。しかし四ヶ月間の南





南口祭壇の上の馮玉祥

口防守は實に直隸軍をして南下の機を逸せしめ、吳佩孚は空しく長辛店に立往生し、つひに湖南の急を救ふことが出来なかつた。國民軍の南口扼守は、戦ひ敗れたりとはいへ、革命戦の全局から見ると、決して無意義でなかつた。國民軍の犠牲によつて、廣東軍は湖南に進出することを得たのである。即ち馮玉祥が、北伐完成、北京攻略の機會において、特に南口陣没將士の靈のために招魂祭を挙げたのは決して偶然のこゝではない。

式場は南口の町はづれ、關帝廟前に設けられ、祭場は三方を大天棚にて包み、正面には孫文の肖像の下に、「陣没南口之犠牲烈士之靈」を大書せる祭壇を設け、その左右には馮玉祥、蔣介石、李宗仁、白崇禧その他國民革命軍領袖の挽聯、その數五百餘、祭場の隅々まで埋もれた。馮玉祥の挽聯は「不共國賊載天、四月戰邊關視死如歸、數萬健兒餘白骨、終教元取授首、兩年收燕薊招魂、何處一腔血淚奠黃沙」を墨痕淋漓。式は十一時過ぎに始まる。馮氏の衛隊及各軍の代表祭場に着くや、先づ當時の戦に於ける國民軍の指揮官鹿鍾麟立つて追悼會開催の由來を説く。さすがに當時の追想に感極まり、聲涙共に下る。次いで祭主馮玉祥祭壇に花を献じ、長文の祭文を朗讀する。蔣介石、李宗仁、白崇禧の祭文朗讀三鞠躬の禮、默禱三分間、式は嚴肅の裡に進む。次で壇上に進んだ馮玉祥は疎髻蓬々、病のやつれは見ゆれども、この日精氣滿身に溢れ、沈痛極りなき態度をもつて、一場の演説を試みた。態度の莊重、音聲の蒼亮、隅々まで響き渡る。場内は水を打つた如くシンシなる。



不平等條約の撤廢、予は一刻も忘れぬ。我等の責任は全精神を以て一切を敢行し、この南口に陣没せる兄弟達の靈を慰むるこそこれに在る。

南口の戦に於て陣没せし將士、それには皆父母がある。子女がある。その父母、その子弟は皆我が父母であり、我が子女である。それに對する孝、それに對する養、それは我等の盡さねばならぬ最も大切なる責任である。中央當局に於ても斷じてそれを看過することはせぬ。兄弟達よ、今日この祭典の様子こそ馮玉祥の言葉を犠牲となつた兄弟達の家へ手紙に書いて出して呉れ。この馮玉祥は必ず實行することを誓ふ。

馮氏は拳をあげて「兄弟們聽見了沒有」(兄弟達、わかりましたか)と叫ぶ。その聲の下に祭場の兵士は一齊に「聽見了」(わかりました)と答へる。この日の馮の言を聴くものみな肅然たらぬはなかつた。馮玉祥の獅子吼終るや、蔣介石、李宗仁、相次いで演壇に立つたが、態度に熱なく、聲量もた低くして聞えず。最後に郭春濤の發聲で、口號を叫び、式を終る。

#### 十一

北伐成功報告祭及び南口追悼式の機會において、北京は蔣介石、馮玉祥、閻錫山、李宗仁、李濟、孫等の革命軍巨頭を迎へ、非常の賑ひを呈した。私は革命軍將星の滯京中、蔣介石は碧雲寺の含青齋、外交大樓において、馮玉祥は閻錫山は外交大樓、李宗仁は李濟は國務院内において、



各別に會見の機會を得た。革命軍の巨頭を語つて、私の特に感慨に打たれたことは、私の北京に來てから、四年しかたぬ中に、舞臺の役者が、その顔ぶれを一變したこゝである。

たしか民國十四年春のこゝであつたと思ふ。馮玉祥がなほ張家口に居た頃、蒙古視察に赴いた大倉翁は馮をその總司令部裏の宿舎に訪ねたこゝがある。その時大倉翁は馮にその波瀾多き立志談を物語り「自分が立身の基礎を築いたのは四十六歳のこゝである」を述べ懐したこゝ、馮は「余は今四十四歳である。四十六歳までには、もう二年ある」を手を打つて喜び、更らに「余は現下の各武將中、歳最も若く、体力もまた最も強い」を語り、支那の天下をこゝるは乃公である……云はんばかりの氣焰をあけた云ふ話である。

當時南北支那において權勢を張れるは、段祺瑞、張作霖、吳佩孚、孫傳芳、張宗昌等で、彼等に比すれば、馮玉祥はたしかに歳も若く、また体力も強かつた。然るにその後僅かに三年しかたぬうちに、局面一變のこゝにも、舞臺の役者もすつかり變つてしまつた。段祺瑞は再び天津に隱遁し、吳佩孚は四川に逃げ、張作霖は皇姑屯の奇禍で倒れ、張宗昌や孫傳芳の如きも没落の悲運にある。而して彼等に代つて中央の舞臺に現はれた國民革命軍の巨頭を見るに、悉く若手揃ひで、その中の最年長者は何ぞ知らん、三年前群雄中最年少を誇つた馮玉祥その人であらうこゝは。

即ち北伐完成報告書に集つた革命軍巨頭の年齢を比較するに、馮玉祥は四十七、蒋介石は四十三、

閻錫山は四十五、李宗仁は四十、李濟琛は三十八で、馮玉祥をもつて最年長者となす。然し、その腕力、体力、精力を問はんか。今日もなほ恐らく依然として馮玉祥に及ぶものがなからう。

北京に集つた國民革命軍の五總司令中、資格から云へば、第一集團軍の總司令であると同時に全軍の總司令たる蒋介石が第一位を占め、馮玉祥はその次位にあり、儀式や會議の席においても、馮は常に蔣の次席にいたが、しかしその魁偉なる風貌こそその豪快な氣骨は、常に他の四巨頭を壓し、いつも嶄然一頭角を抜いて居たかに見へた。殊に碧雲寺の報告式、外交大樓における閻錫山の招宴、及び南口における戰没將士の追悼會において、馮玉祥はたしかに他の總司令を凌駕し、二枚も三枚も上の役者であるこゝを、われ等の目前に實演したのである。しかし北京における馮玉祥の身邊は常に四方から脅威が加はり、流石の馮も不安にたえなかつたものを見え、北京滞在の七日間、その宿所を變へるこゝ六度に及んだ。即ち七日は西山、八日は八大寺、九日は南口、十日は湯山、十一日は西山、十二日は西城……こゝ、毎日宿所を變へて、その所在を晦ましたのである。

## 十二

北京に於ける國民革命軍の巨頭會議は何を議したか。當時私は前記の如く蒋介石、馮玉祥、閻錫山、李宗仁、李濟琛等の各巨頭に面晤し、親しくその所見を叩き、また従つて會議の内容も略々窺ひ知るこゝを得た。會議の主題は裁兵案、直魯軍の改編、東三省對策の三問題であつた。而して各問題を通じ、馮玉祥は閻錫山と對抗の地位に立ち、蒋介石が兩者間の調停役となつた如く思はれる。



即ち裁兵案について、馮玉祥は精兵主義を唱へ、老年兵及び不良兵の截徹を主張したが、これは云ふまでもなく主として老年兵の最も多数な山西軍の裁減をはからうとしたものに外ならぬ。これに對し、閻錫山は各軍一率減兵主義を唱へたが、成立した案文を見るに、概して馮玉祥の意見が勝ちを制したやうに思はれる。尤も裁兵は今日のところ、もごより口に唱へるのみで、實行は豫期されず、従つて北京會議の決議も空文に過ぎない。

天津に於て革命軍に投ぜる直魯軍(主として徐源泉軍)は山西軍に改編されたが、これは國民軍にこつて最も不利なところで、馮玉祥は痛烈にその不當なることを力説し、閻錫山もつひに馮の説に屈するの外なく、結局改變部隊はすべてこれを解散し、その押收武器は一時蒋介石の所管に移すことに決した。最後に東三省問題に就いては馮玉祥は蒋介石に一任せんことを主張した。これは要するに閻錫山をして對奉交渉から手を引かせる魂膽であつたらしい。

かくして北京會議における馮玉祥は事毎に閻錫山と唾み合つたが、しかし蒋介石は極力衝突を避け、あらゆる機會において、胸襟をひらき、交誼を温むることに腐心した。

五巨頭會商終るや、馮玉祥先づ北京を去り、次いで蒋介石、李宗仁、李濟等相前後して南下し、ひこり閻錫山のみ北京に残つた。

北京より南京に歸つた蒋介石は愈々國民政府の建設を完成すべく、先づ國民革命軍の巨頭を南京

に招いた。これに應じて眞つ先きに南京に來たのが馮玉祥である。閻錫山は再三の招電に接し乍ら遲疑して動かさず。漸やく一度北京を發して、南下の途についたが、途中發病に籍口して、山西の太原に引つかへしてしまつた。

#### ▲五 鷄 の 歌 ▼

馮玉祥は軍を進めて、その幕營を移す毎に、その地方の農夫を招き、農村の現状を聞くを慣例としてゐる。

民國十七年、馮玉祥は蘭封に駐屯してゐた時、四月二十六日、城外に住む六十餘歳の老農夫を招き、具さに農村の窮狀をたづねた。老農夫は馮に告げて、「私の一家は鷄五羽を飼つて、僅かに生計を營んでゐましたが、昨年奉軍河南に入るや、悉くこれを殺食してしまいました」と語つた。馮玉祥は老農夫を慰め、「新たに鷄を買つて生計をたてよ」として十元を與へ、老農夫感泣叩頭して去つた。馮また感慨のあまり、左の一詩を作り、これを老農夫に贈つた。

我家有五鷄 我家に鷄五羽あり。

每日下三蛋 毎日卵三つづつ産む。



賣錢雖不多  
可以換油鹽  
去歲奉軍來  
殺牛又打雞  
非是我倒電  
家家均被欺  
每一念及之  
痛恨實不已  
今日錢有了  
趕緊再買雞  
心中快樂了  
言語說不及

これを賣つた金は多からざるも。  
以て油と鹽を買ひ得る。  
去歲奉軍來り。  
牛を殺し、また雞を打つた。  
われ等に何の禍ちなきに。  
家々均しく欺かれた。  
一念これに及ぶ毎に。  
痛恨實にやまない。  
今日錢あり。  
急ぎ再び雞を買ふ。  
心中の快樂。  
言語に盡し難し。

九張作霖と馮玉祥



好敵手張作霖・三年間の争覇戦・兩雄の對照・東北  
ミ西北・保守主義ミ進歩主義・新軍人ミ舊軍人・張  
作霖の都落ち・皇姑屯の慘劇

支那近代の武將中、最も傑出せるは誰か云へば、何人も、先づ吳佩孚、張作霖、馮玉祥の三人を指すに躊躇せぬであらう。たゞこの三人の中吳佩孚はその出世の早やかつただけ、その没落も亦早やかつた。あつ氣ないほぎ彼の政治的生命は短かく、實に權花一朝の感があつたが、張作霖ミ馮玉祥の二人は北洋軍閥亂劇の最後の幕にあらはれ、互ひにねばり強く戦ひ、世人をして幾度か手に汗を握らせた。

馮玉祥ミ張作霖ミは、時代を同じうして、北洋軍閥の間に身を起し、革命の動亂に乗じて一代の勢力を築きあげ、やがて四方の群雄をなで倒して、二人だけが北支那の霸權を争ふの場面に立つや、互ひに鎗を削つて一勝一敗をくりかへし、最近数年間の北支那は全く兩雄の争覇地ミ化した觀があつた。最後に至つて張作霖一敗地に塗れ、皇姑屯の奇禍に遭つて倒れたが、しかも彼は馮玉祥にミつては誰よりも手強き好敵手であつた。

人を知らんミ欲せば、その敵手によつて判すべく、謙信を知るによつて始めて、信立を知るべし……云ふならば、馮玉祥を知る上において、その好敵手張作霖の性格ミ事蹟を想起するは、決して無用のこゝでなからう。私は左に民國十七年五月皇姑屯事件の直後に草した張作霖追憶記事の一部を挿入するこゝとした。



張作霖が薄氷を踏むの危地に身を置いたことは、その波瀾多き五十四歳の生涯を通じて、幾度なるやを知らぬが、その今日まで世上に知れわたつた最も顯著なる事實を云ふならば、少なくとも左の三度を數へなければならぬ。

その一つは彼がなほ遼西の綠林に出没した頃、わが滿州軍のために捕へられた時のことである。

彼は露探の嫌疑を以て逮捕され、當然銃殺に處せられる筈であつた。然るに、その群を抜いた精悍な風貌と、俊敏な舉動は、わが滿州軍當局の注目を惹き、總司令部參謀田中少佐と、新民屯の軍政官井戸川少佐は「こいつ何かの役にたつかも知れぬ」と云ふやうなことで彼のために命乞ひをなし、そのお蔭で危いところを救はれたのである。この話は當時の井戸川少佐、今日の豫備中將が、先年北京へ來た時、親しく私に語つたところで、間違ひのない當事者の直話である。井戸川中將は來燕の序でに張作霖を訪ふたので、私はその時の印象はさうであつたか尋ねたが、中將は「張作霖は當時の恩儀なご少しも記憶してゐる風が見えず、むしろ昔の讐敵にでも會ふかの態度であつた。或は彼本人にまつては、あの時誰が彼のために命乞ひをしてやつたかわからず、却つて彼を捕縛した當局として、余等に對し、今もなほ怨を含んでゐるのかも知れぬ……」と答へ、「恩を仇でかへされた」と云ふやうな不快な印象を與へられたと云ふ話であつた。



霖作張の年晩



星移り、月變つて、當年の馬賊頭目の張作霖が中華民國の大元帥となつた。同じ民國十六年の春、彼を救つたもひ、ひの田中(當時の少佐)がわが内閣總理の榮位を勝ち得たことは、不思議な運命の對照云はねばならぬ。田中前總理が内閣組織の挨拶かたぐ、芳澤前公使を介して、張大元帥に贈るに「日本武士の人形」を以てしたのは往時張作霖を救つてやつた恩儀關係から、彼に對し、互ひに相ゆるす親友としての交誼を表示せんとしたものであらう。然し、當の張自身は田中大將に對しても、井戸川中將に對すると同様「恩を仇」に感違ひをしてゐたものか、「日本武士の人形」の御禮に彼は東三省内においてその年の夏から冬にかけて、極めて辛辣な邦人排斥を斷行した。

◇

第二次の遭難は、民國五年、宗社黨から爆彈の見舞を受けたことである。當時の張作霖は已に奉天省の重鎮をなし、やがて滿洲全局の實權を掌握せんとして、その勢ひ當るべからざるものがあつた。恰もその頃、袁世凱帝政の反動として、前清の復辟を目的とする宗社黨が滿洲を根據地として、討袁興清の旗を翻へさんとし、これがため、袁世凱の謳歌者目された張作霖を倒して軍門の血祭りとし、かねて彼よからぬ吉林將軍孟恩遠を擁立して、一舉に奉天の東城を屠り、滿洲を宗社黨の天下となすの計劃を廻らしたのである。

同年五月二十七日、張作霖が旅順から來奉した關東都督中村男爵を奉天驛へ迎へた後、歸城の途



中、小西關に潜伏せる宗社黨の刺客は張作霖一行の馬車を目掛けて、爆弾を投げつけた。然し、宗社黨の陰謀は張作霖もうすく探知してゐたもの見え、往路先頭車にのれる彼は歸途わざと後ろから二番目の馬車に乗りかへ、その所在をくりましたので、宗社黨の刺客は最先頭の馬車にのれる湯玉麟を、張作霖を見違へ、爆弾は湯の馬車に向つて投ぜられた。しかも湯自身は微傷を受けただけで、犠牲者は多く護衛兵であつた。その殺那づつ後ろの馬車に乗つて居た張作霖は爆音を聞くより早く、車上から馬にのり移り、馬丁の衣服をこつて變装し、裸馬に鞭をあて、一目散に將軍行署に向つた。この時の臨機應變、電光石火の逃げ振りは、流石多年死生の巷を馳驅し、變に處するの修養をつんだ張作霖だけある人をして舌を巻かした。

◆ その後張作霖があゝの豪膽無比を以てしても、なほ心膽を寒うせし第三次の遭難は、民國九年、徐樹錚のために狙はれた一幕である。

同年六月、張作霖は段祺瑞と曹錕、即ち安福派と直隸派との調停を標榜して北京に入つた。しかし張の肚裡には一もつがあつた。それは當面の競争者たる徐樹錚を倒して、蒙古における彼の地盤を奪ひ取らうと云ふのであつた。従つて張作霖の調停は最初から公平を缺き、彼は事毎に直隸派の肩をもつて安福派を抑へんとした。こゝにおいて、張作霖の肚の底を見抜いた徐樹錚は、前年陸建章

を天津において欺殺した手段を以て、張作霖にもこれを適用しやうと企てた。當時野心満々の徐樹錚にこつては、張作霖は目の上の瘤で實に彼の勢力擴張上の最大障碍であつたのである。

同年七月五日、徐樹錚は親しく張作霖をその旅營に訪ひ、曹錕討伐會議に列席せんことを諄々懇請するこゝに一時間に及び、巧みに張作霖誘出しの芝居を打つた。俊敏犀利の張作霖も徐樹錚の狡猾なる手にはすつかりのせられたもの見え、彼は七日夜、段祺瑞邸における直隸軍討伐會議に參列した。徐樹錚は段祺瑞を電話口呼び出し「この機會に張作霖を拘禁されよ」と勧めた。張作霖の生命は實に風前の燈火の如く危ふかつた。たゞしかし段祺瑞の立場としては、徐樹錚の云ふがまゝに、輕舉に走るわけに行かぬ。彼は度々張作霖の援助を受けたこゝもある。流石の段も、張作霖を拘束すべきか否かについて、躊躇と煩悶の色なきを得なかつた。この時早くも段祺瑞の顔色のたゞならぬを讀んだ張作霖は、危険の身邊に迫れるを直感した。彼は直ちに便所に行く風を装ふて危地を抜け出した。翌八日の午前一時、張作霖は段祺瑞、徐樹錚、曹錕等にあて、「兩派の主張強硬にして互譲融和の見込みたゞ、調停の途は愈々絶えた。遺憾乍ら余は一應退京するに決した」との通告を發し、匆皇として北京から天津に落ち延びた。徐樹錚は「長蛇を逸した」として、地だんだ踏んで口惜しがつたさうであるが、もはやさうかへしはつかなかつた。



かくして、張作霖は幾度か死線を越えて、きわどい九死一生の運だめしをくりかへした。而してその度毎に、危機に處して動ぜず、巧みにこれを切り抜けて、榮達の新機運を開拓し、やがて東三省をあけてわが掌中に握り、更らに關内に勢力を伸張して、北京に乗り出し、ついに大元帥の榮位にあけられ、北支那全局の支配者となつた。

先年、ある日本の觀相家は張作霖を觀相して、その額の皺が「王」の字をあらはせるを見出し、「貴公は中華民國の元首なられるであらう」と豫言した。その後間もなく彼は大元帥に推戴されたしかし前記の觀相家は彼の額の「王」の字の下の線があまりに短いので、「作霖王はすわりがわるい」と氣遣つたこのことであるが、果然、大元帥就職一週年をまたずして、彼はその最後の没落の運命に會した。

張作霖最後の都落は一般に十七年五月末の直隸平野における大敗戦の結果に見られてゐる。しかし、私は數年前來、張作霖の敵は外にあらずして、むしろ内にある。彼を倒すものは國民革命軍でなくて、奉軍内部の新派である……この觀測を下して來たが、彼の晩年における事變は悉くこの觀測を裏書してゐる。

張作霖は由來綠林に生ひ立ち、俠氣を以て乾兒を悦服せしめ、權謀を以て敵手を陥弒し、逐次地盤を開拓して、あれだけの權勢を張つたのである。従つて彼の腹心の部下は皆な舊式の武將である張作相と張景惠は、綠林時代、彼と兄弟の契を結んだ間柄である。湯玉麟もその出身を同じうし、かつて一度争つてしりぞけたのを再び採用したものである。張作霖の勢力の根底は實にこれ等舊式武將にあつた。彼等は張作霖の采配下に親分乾兒の關係をもつて、相より相扶け、理窟や打算を超越した所謂「綠林道」をもつてその結束をかためて來たのである。

然るに、奉天軍閥の勢力の増大につれ、地盤が擴張され、兵力また逐年増加するに至つて、張作霖は、もはや舊式の武將のみによるこゝが出来なくなつた。第一、新式の武器が必要になつて來た第二、新式戦術の智識を求めなければならぬ。即ち新式の教育ある士官を必要とする時代となつたやがて張作霖の周圍には舊式武將の外に「新派の武將」なるものが集つて來た。楊宇霆、張學良、韓麟春、郭松齡等は即ち後者の筆頭である。

晩年の張作霖は各々その傾向を異にし、互ひに反撥をこゝ、する新舊兩派の武將によつて圍繞されてゐた。彼は實に同時に「二つの異つた椅子」の上に座したのである。彼の地位の安定を缺くに至つたのは當然である。



民國十四年の郭松齡事變は決して郭松齡ただ一人の反張戦争と見るべきでない。あきらかに新派對舊派の大叛亂であつたのである。郭松齡の一度事を山海關にあぐるや、同じく新派の巨頭たる楊宇霆は眞つ先きに大連に逃げ、張學良は旅順から秦皇島に赴いて、郭松齡との妥協をはからんとした。その他の新派將士は殆んど悉く郭の指揮下にあつて、反張の旗幟を翻した。而してこの間終始一貫、張作霖のために奮戦したのは主として舊派の武將である。山海關から奉天に直進せんとした郭軍の先鋒を抑へ、郭軍作戦の第一歩に一大齟齬を來さしめたのは張作霖軍である。遼河河西の決戦で白旗堡の郭軍總司令部に向つて、勇敢なる奇襲を決行し、郭軍潰亂の因をつくつたのは吳俊陞軍である。

張作霖も吳俊陞も、それ／＼一省の督軍として地盤を開拓し、獨立の地位を築きあげ、敢て張作霖のためにあれまで忠勤をぬきんで、死生をこもにしないで、支那軍閥一流の遊泳術を以てすれば、立派に立つてゆける……云ふよりは、取つて代るべき地位にあつた。しかも一朝有事のとき彼等はいつても張作霖の麾下に馳せ參じ、その命令の下に動く。張作霖はこれ等舊派武將の人心を收攬するにおいて實に妙を得てゐた。彼はいつも親分肌の度胸と恩威を以て乾兒をなでつけ、巧みに依氣さ、機智で群衆を駕押して來た。しかし新派の武將に對しては張作霖は心から理解をもたな

かつた。新派の武將の多くは思想的に南方かぶれをしてゐる。しかし新思想の何物たるかを解せぬ張作霖にこつては、これにかぶれた新派武將の心事を洞察するの明をもたなかつた。張作霖の馮玉祥や閻錫山に比して、遠く及ばぬはこの點であつた。張作霖は郭松齡等がいつの間、南方にかぶれ、また如何に舊派に對して不平を抱くに至つたか、その叛亂の勃發するまきまで、全く氣づかずに居た。のみならず、彼は實にわが子學良も亦、郭等と略その方向を一つにしてゐたことも知らずゐたのである。

郭松齡事變の翌年、私は滿洲に遊び、この事變について、最も信すべき筋から、左の如き興味深い機微の消息を耳にすることを得た。

郭松齡叛起の直後、張學良は旅順を経て秦皇島に赴き、郭の代表と會見した後、再び旅順に來り關東長官兒玉伯に向つて「今回の事、非は父作霖の側にあります。郭松齡の方が正しいのです。私はこれから奉天へ歸つて父に下野を勧告します」と告げた。これを聞いた兒玉伯は嚴然として張學良に向ひ「子にして親に叛かんとは何事ぞ」と言下に面罵し、嚴しく彼を叱責した。張學良は兒玉伯の威壓に萎縮し、一夜考慮の末翌日に至り「それではこれから奉天へ歸つて父にも郭軍を討ちます。郭軍討伐の後再び御目にかゝりませう」との挨拶を残して、旅順を去つた。然し張學良は奉天へ歸つた後も、逡巡躊躇、容易に出陣を肯んじなかつた云ふことである。



當時わが當局は張學良の不思議な措辭を舉動によつて、郭松齡の叛亂には、馮玉祥も參劾し、またその背後にロシアの「滿洲赤化の陰謀」がひそんでゐるこのヒントを握り、その結果わが滿洲駐屯軍の増兵となり、また白川關東軍司令官の滿鐵沿線二十支里内支那軍隊通過禁止の布告を見るに至つたのである云ふ話がある。この説の當否は別問題として、張作霖は敢然として奮起し、その手許に残つたある限りの豫後備兵をくり出し、遼河河西に陣を布いて、奉天軍の精銳をあつめた郭松齡を邀撃し、奉天軍閥の危急を、最後の戦で救ふたことは、まことに奇蹟的の出來事云はねばならぬ。

◇

同じ北洋軍閥の間に伍して身をおこした武將でも、馮玉祥や閻錫山は新しい思潮の傾向をよく洞察し、これに適ふの愚なるを知り、これが利用の要領を心得てゐる。彼等は孫文の三民主義、レーニンの共產主義、ともにこれを自家の政略に利用すべきであるをなし、また青天白日旗、滿地紅旗いづれも都合次第で、掲揚差支へなししてゐる。彼等の今日は、軍閥打倒を標榜する國民黨を以て、自家軍閥の勢力伸張の機關に用ひつゝ、あることも云ひ得るのである。

しかしこの藝當は張作霖にははまらぬ。彼は赤化討伐の一枚看板で押し通さんとして來た。彼は新しい思潮に進行することのみを知つて、これに掉すことを知らぬ。否、この新思潮が自家の脚

下におしよせて來ても、それに氣がつかかなかつた。

郭松齡の叛亂で苦い經驗をなめたにも係らず、彼はこれによつて少しも教へられず、郭松齡の亂後、依然として同一の失敗をくりかへした。即ち彼はその奉天軍の精銳(第三、四方面軍)をあけて新派の張學良及び韓麟春の指揮下に屬せしめ、またその總參謀に楊宇霆を用ひた。而してその結果は如何。十六年河南に於ける大敗戦の直後、張學良及び韓麟春が「青天白日旗の掲揚」を「三民主義の標榜」を條件として南方と妥協の密約を交はしたことは匿れもない事實である。而してこの二つの條件は、あくまで五色旗をおしたて、赤化討伐を以て終始せんとした張作霖の根本方針と全然逆行するものである。その後、韓麟春はしりぞけられ、そのあとに楊宇霆が第三、四方面軍長を兼任することゝなつた。然るに楊宇霆も亦對南妥協腰において韓麟春に譲らず。彼は常に張學良を誘つて對南妥協のあらゆる機會を捉へることに腐心した。楊宇霆が十六年の暮、歐米記者に「日本大罵倒のインタービュー」を與へて國際的大波瀾をまきおこした如きは、云ふまでもなく彼が南方の御機嫌を伺はんとした芝居的一幕に外ならぬ。

私は曾て奉天軍の北京撤退の直後、過渡期の北京政局に當つた國民黨の機關順直委員から、楊張と南方との關係につき、極めて重大なる機微の消息を耳にした。即ち同委員の云ふところによる「十五年李石層が北京引揚の直前、屢々張學良及び楊宇霆と秘密裡に會見し、南北妥協策を議し



た」云ふのである。張學良や楊宇霆等の新派は一面張作霖に忠誠を誓ひ、奉天軍閥の柱石を以て自ら任じつゝあると同時に、他の一面、私かに南方を簡を通じて奉天勢力の「色のぬりかへ」を企てつゝあつたのである。十七年春の奉天軍大敗退、つゞいて張作霖の没落を見るに至つたのも、煎じつめれば、これ等新派武將の對南妥協策に原因する云ふも、決して過言でないのである。

◇

私が始めて張作霖を面晤したのは、民國十二年の秋、彼が第二奉直戦争で、吳佩孚軍を破り、北京に入城した時のことである。私は順承王府の奥深き一室で、張學良の紹介によつて、彼と語つた當時の彼は戦勝の勢にも似ず、謙讓云はんよりは、むしろおづくした態度で、私の政治問題に關する質問に對しては「知らず」「關せず」と答へて逃げてしまつた。

その後間もなく北京を去つた彼は十五年秋國民軍を破つて再び北京に入り、私は同じ順承王府で二三度彼を訪ねた。彼は十六年六月懷仁堂において大元帥に就任したが、私はその就任式にも臨むことを得た。當時の彼の得意振りは今もなほ彷彿として思ひ浮ぶのである。

大元帥就任後、張作霖は順承王府の私邸から中海の居仁堂にその居を移した。居仁堂は民國十四年の秋關稅會議の會場にあてられ、國際史上に紀念を残したところ。「ガラスの間」「黄金の間」など、繁華たる堂屋は在時西太后の豪華をもの語るものである。

しかし、張作霖の大元帥生活は極めて短時日であつた。居仁堂にあること僅かに一年にして没落の運命に會することとなつた。實に槿花一朝の夢の感にたえないところである。

私は決して運命論を信するものではないが、支那近代の偉傑が多くその末路を同じうするを見てそこに、一種不可思議なフアタリチーの力を感じざるを得ない。袁世凱は帝位に登り、洪憲を號して後、間もなく倒れ、段祺瑞また執政たること僅かに二年にして、隱退再び立つ能はず、政治的にはもはやその生涯を終つたものである。而して張作霖も亦大元帥を最後の榮達として、急轉直下、北京を逐はれ、皇姑屯の鬼になつてしまつた。

二

馮玉祥と張作霖を比較するに、二人の間には、互ひに相似た點もあれば、また正反對なところもある。いづれにしても、両雄の對照には、興味の津々たるものが少くない。

先づ兩者の相似た點をあけんに(一)二人も貧家に生れて、その青年時代あらゆる艱難辛苦をなめた。しかも(二)貧賤より身をおこして、天下取りの野心を抱き、こもに武人として身を立て、張作霖は己に短命乍ら大元帥の地位まで漕ぎつけ、馮玉祥も亦現代において、押しも押されぬ一流格の將帥たるに至つた。(三)兩者が斯くの如くにして一代の中にかゝる勢力をなし得た所以は、二人も、一つはその部下との間に、親分乾兒の關係を打ち立て、その結束を固め得たこと、今



一つは形勢を見るに敏にして、且つ一度方策を決定するや、それに向つて邁進したところにある。また(四)馮玉祥は自家の勢力増進をはからんがためには、ソウエート・ロシアの援助を利用した如く張作霖も亦度々日本の庇護の下に危地を脱した。しかも援助の必要がなくなるや、直ちに尻を向け、却つてその國にたてつかうとする。馮玉祥は河南において共産黨を排斥し、張作霖は東三省において、排日運動をおこした。外國勢力の利用においても、二人は優劣なき手腕をふるつた。

### 三

かくの如く馮張二人は如何にもよく似た對照點を有するが、然しいづれか云へば、正反對な點の方がより多いやうに思ふ。

即ち、二人は、第一、その風采と体格において正反對である。張作霖が五尺の小男なるに反して馮玉祥は六尺大の偉丈夫である。張作霖がそのひきしまつた顔面に神経筋をたて、犀利俊敏の氣宇をたゞよはせ、その小さいな軀幹は如何にも敏捷と膽勇のかたまりの如く見えるが、馮玉祥はまるく太り、大きな山のつき出た如く、重みをもつて人を壓するの慨がある。前者は尖鋭、後者は鈍重、一方は細くして鋭く、他方は太くして強しの感を與へる。

第二、張作霖は物資豊富にして鐵道その他の交通機關發達し、種々の點において優越した「東北」の地盤によれるに對し、馮玉祥の根據地たる「西北」地方、即ち綏遠の北部、甘肅及び陝西の各省は人口稀薄にして、文化は半開状態にあり、支那各省中最も貧乏なところである。十六年手に入れ

た河南省は前記各省に比すれば遙かに富饒であるけれども、吳佩孚時代から屢々戰禍に見舞はれ、省内到る處疲弊荒廢の極に達してゐる。即ち張作霖は豊富なる地盤を有せるに反して、馮玉祥の地盤は頗る貧弱である。張作霖が常に自ら帝王の如き豪奢振りを極め、その部下も亦舉つて私財を蓄へ、贅を盡してゐるが、馮玉祥は常に困苦缺乏と戦ひ、自ら兵卒と同じ生活を續け、部下の將領にも蓄財の餘裕を與へない。これは下記の如く両者の主義と信條の相違にも因るが、同時にまた地盤の關係にも因るものと見なければならぬ。

第三、張作霖の閱歴を見るに彼は屢々いぢかばちかの危い冒險をくりかへした。あるだけのカードを出し盡して、一舉に勝敗を決しやうとした。彼はやま氣が強く、運づくで盲目滅法に進まふとする慨があつた。然るに、馮玉祥は細心綿密、何事も石橋をたいて渡らうとする。もごより、彼も天下取りの役者だけあつて、時々大きな芝居を打つ。やぶから棒を突出すやうな場合もある。人をしてあつご云はせることがある。然し、彼は決してカードの全部を投げ出すやうなことはしない如何なる計劃も、必らず最悪の場合を豫想していざご云ふ時の逃げ道をつくることを忘れぬ。たごへば南方巨頭が悉く反共産政策をこり、共産黨員の大虐殺を行ふと同時に、ソウエート・ロシアに斷交したが、馮玉祥だけは表面はごにかく、事實において今なほソウエート・ロシアとの絆を切つてゐないご云ふ説がある。事實然りごすればそれは云ふまでもなく、一朝中原の形勢不利ごなつた



場合、再び陝西、甘肅、綏遠の奥地に退却せねばならぬ。而して西北の奥地に引込んだ場合、ロシアにたよる外、救援を得る道がないと云ふことを深く顧慮した萬一の用意であらう。

第四、馮玉祥と張作霖との對照において、最も重大なる相違點は前者が進歩主義をされるに對し後者が保守主義を以て終始したところである。張作霖は概して王社黨であつた。彼は袁世凱の帝政運動に賛意を表し、當時袁に向つて「帝制成らざるば死すも再生を欲せず」と極言し、一死以て袁世凱に殉ずるの態度を示したほぎである。彼はまた張勳の復辟に際してもひそかにこれを聲援した。宣統廢帝に對しても彼は軍閥巨頭中最も深き敬意と同情を表した一人である。これが爲め、一時彼は入京する度毎に復辟説を傳へられたものである。而して張作霖の晩年は赤化討伐を内外に向つて宣言した。勿論それは彼の目指す敵將馮玉祥に對する戰略上のかけ引でもあつたであらうが、また同時に彼の思想の保守主義であつたところにも原因する。

然るに馮玉祥は辛亥革命の時、已に革命黨側に加擔したのを始めとし、袁世凱の帝政運動に際して雲南討伐に向ひ乍ら、蔡松坡と和し、また四川將軍陳宦を促して反袁の旗幟を翻へさせ、張勳の復辟に際しては復辟軍討伐の先鋒隊を指揮し、護法軍討伐に際して武穴に和平を唱へ、民國十五年の北京クーデター以降は一方ロシアの援助を仰ぎ、他方國民黨を提携し、首都の「赤化」に怪腕を振り、宣統廢帝の放逐を断行した。昨年武漢及び南京と同時に河南省においても、共產黨排除を行

ひ少しく右傾せる如く見へたが、しかもその最近の言論、その日常の行動に照らしてこれを見るに彼の「赤化」はたいして褪せたものは思はれぬ。十七年秋、國民政府の行政院副院長兼軍政部長に就任すべく南京に移つて以來の馮玉祥は明らかに左派國民黨に傾きつゝある。

第五、馮張両者の思想的相違は政黨關係においても明白に反映してゐる。張作霖には政黨の背景なるものがなかつた。彼は政黨を利用することなきで、んから考へなかつたらしい。そこは奉天派にこつて最も大なる弱點であつた。これに反して馮玉祥は常に新しい思潮に注意を拂ひ、これが利用策に腐心した。彼の孫文をかつがうとし、また國民黨に接近し、ついに自ら同黨に加入するに至つたのは、政黨の力をかりて自家の背景とし、以て勢力の伸張を計り、その抱負を成し遂げやうとするに外ならぬ。一方は政黨を嫌ひ、これを無視し、これによつて時代におくれ、自ら敗滅の因をつくり、他方は政黨を利用し、思潮に投ずることにおいて、絶倫の手腕をふるひ、また現に顯著なる成績をあげつゝある。

#### 四

私は李世軍及び孟憲章両氏の編纂せる「馮總司令最近之言論」を讀んで、特に面白く感じたのは彼が十七年二月二日新郷において總司令部附將校を集めて語つた「新軍人と舊軍人」と題する講話である。この講話の前半において、馮玉祥は先づ、「新軍長官と舊軍長官」の比較を論じてゐる。



それを一讀して見るに、新軍長官は彼自身を指し、舊軍長官を以て張作霖を諷してゐるかに思はれる。もごより馮玉祥の論ぜるは新舊軍人全般に對して下した總括的批判であるが、然し彼は平素「新らしき武將」の典型を以て自ら任じ、その目指す敵の張作霖を以て、代表的「舊式武將」を目して居た關係から、彼の新舊武將比較論が自然彼自身を張作霖との比較論となつてしまつたわけである。云ふまでもなく、馮玉祥は口をきわめて新軍人を賞讃し、舊軍人をあくまで悪しざまにこき下して居る。一寸聞いたところ、甚だしい偏破な議論の様にされるのであるが、然し一面前者を理想とし、後者を敵として居る彼の所論としては當然さうある可きであるのみならず、實際事實に當つて居る點も少くない。即ち講話の前半に曰く

新軍人と舊軍人を比較するに、両者は訓練、組織、任務、目標、志願等總ての點に於て相違して居る。先づ新舊軍隊長官の比較から述べて見やう。舊軍隊の武將はたゞ榮華を貪り、財を得んことをのみを欲し、仕事は少くして甘い物を喰ひ、立派な着物を着、豪華な邸宅に住まうとする。新軍隊の將領はその志榮華を貪るに非らずして、大事をなすにあり。大いに財を得んことに非らずして大業をなさんとするにある。仕事を少くして財を多く得んことに非らずして、出来るだけ國を救ひ、民を救はんとするにある。飲食、住居、衣服を質素にし、困苦を嘗め、缺乏に耐え、朝は早く起床し、夜は遅く就寝する。舊軍隊の長官は唯だ富貴尊榮に安んじ、怠慢にして懶惰、

靴すら自分で穿かうとせず、人を呼んで穿かせ、部下を呼ぶに名すら呼ばうとせず、只だ「おいこら」と呼ぶだけである。新軍隊の長官は人格も生活も士卒と一律平等で、飲食、起居、すべて何等の差等がなく、たゞ職責上に相違があるのみ。例へば騎兵は騎乗し、砲兵は馬に砲を引かせ、歩兵は銃を荷つて歩行する等の相違はすべて各人の地位と服務の不同なるによるもので、尊卑階級の區別に至つては絶對にない。これ新舊軍隊長官不同の第一點である。

舊軍隊の長官は他人を疑ひ、容易に信頼をおかない。たゞその兄弟、親戚、郷黨のみを信じ、その起用するは多くその兄弟でなければ、親戚である。賢と不賢又は才能の有無はこれを問はず、たゞその親戚、故舊でありさへすれば、グン／＼援擢登用するのである。張敬堯が湖南にあつた時自ら大帥と稱し、その兄弟は二帥、三帥、四帥、五帥、より六帥、七帥、に至り、彼の舅を舅帥と稱し、又その妻の妹婿を姨帥と稱した。新軍隊の長官はこれに反して人を用ふるに賢を用ひ能を用ふる。即ち墨子の所謂「賢を尙び」「能を尙ぶ」のである。賢を用ひ、能を用ふるは何を云ふか。例へば五百米突の標射を、甲が撃ちあてず、乙が撃ちあてたならば、即ち乙を用ふるに云ふのである。唯だ賢能か否かに依つて、取捨を決定し、情實によつて人事行政を爲すを許さぬ。然るに舊軍隊の長官は人を用ふるに、賢不賢を問はず、先づ近親か、否かを問ひ、能不能を問はず、先づ郷人か否かな問ふ。新軍隊の長官の人を用ふるや、近親か否かを問はず、唯だ賢不賢を



問ひ、郷人が否かを問はず、能不能を問ふ。こは新舊武將の不同の第二點である。

舊軍隊の長官は無用の交際に冗費を投じ、阿諛を、虚禮に無駄骨を折る。娘の縁組、父母の誕生祝等、つまらぬ事に體面を装ひ、馬鹿々々しい騒ぎをする。その度毎に各方面から禮を受ける。師長、旅長が斯くの如くであるから、營長、縣長も亦斯くするのである。一方多く禮物を受ける者はこれを以て財産を作り、他方禮物を贈るものは、上官の御機嫌を取る事が出来る。新軍人は唯だ革命のために戦ひ、救國救民を求むるのみ。絶對にこの種の偽善を虚禮を顧みない。同志の間で婚禮誕生等の喜び事があつても、あまりに冗費を投ぜず、又社會に於ても輕薄の風を助長しないただお互ひに會つてひと言賀辭を述べらるのみである。我等は革命軍人であるから、一文の錢を使ふにも、人民と共に、一文だけの幸福をはからねばならぬ。我等は何事につけても、革命の見地に立つて、民衆の利益を考へなければならぬ。これ新舊軍隊長官不同の第三點である。

舊軍隊の長官は私心私利をのみ念頭におき、人民の血と汗を搾取して、たゞ自身の富貴をはからうとする。彼等の蓄財するや、支那の銀行だけでは、尙不安とし、外國銀行にも、三千萬、五千萬、八千萬の巨資を預け入れて居る。新軍隊の長官はこれに反し、唯だ愛國愛民を知り、全國人民のために、幸福をはかつて居る。それ故に、あくまで兵卒の困苦を共にし、患難をわかち、飯が出来ても、兵士が喰べぬ中は、先きに喰べやうとせず、湯が沸いても兵士が飲まねば自身は先

飲まうとしない。朝は兵士の起床せぬ中に起き、晩は兵卒皆な就寝してから就眠する。總べて長官は兵士と一體となり、兵卒化するのである。兵卒化した長官こそ、眞に革命軍の武將たり得るのである。然からざるものは舊軍閥と何等差がなく、これを反革命軍人と目する外はないのである……。

馮玉祥の所論を要約するに舊派武將は私利私慾をはかり、時めけば直ちに豪華な生活を營み、親族故舊をあけて、要路に用ひ、敢てその材能の有無を問はない。然るに新派の武將はこれに反して一定の主義主張のために戦ひ、兵卒にも困苦缺乏をわかち、人材を抜擢して、情實に囚はれない……と云ふのである。而してこれを馮自身も張作霖との對照にあてはめて見るに、大體においてあたつてゐるやうにおもふ。殊に馮玉祥の兵卒と同一の生活振りは、晩年居仁堂の奥深くに帝王を氣取つて豪華を極めた張作霖とは全く正反對の對照である。また晩年張作霖は或は麻雀に徹宵し、或は阿片に親しみ、多數の妻妾にさりまかれ、清朝末年の大官そのもの、如き情落した生活をなしたものであるが、馮玉祥はこれに反して、難行苦行の行者的生活をなし、夜おそく寢て朝早く起き刻苦勉勵自ら士卒の師表たらんことにつとめてゐる。

##### 五

民國十三年の北京クーデターによつて、直隸派の驍將吳佩孚を一蹴した後、馮玉祥の目標させる



敵は主して張作霖であつた。民國十四年から十七年までの北支那の形勢は一言にしてこれを云ふならば張作霖對馮玉祥、所謂赤白兩軍閥二大巨頭の對抗状態にあつた云ひ得るのである。十六年春私が張作霖を順承王府に訪ねた時、彼は「余は閻錫山も、また蔣介石も、妥協を希望し、且つそれを十分可能のこころ考へてゐる。たゞ一人馮玉祥は斷じて妥協を許さぬ。余はあくまで彼を討つ決心である」と語つたことがある。而して馮玉祥も亦その眼中にある相手はたゞ張作霖あるのみにしてゐた。彼が五原に誓師して二年間臥薪嘗炭したのも、要するに張作霖と雌雄を決せんがためであつたのである。然るに北京に入れる張作霖は自ら大元帥となつて高くおさまり、奉天軍の精銳（第三、四方面軍）はこれをあけて、「若き將軍」張學良も、常に南方を欸を通じて張作霖に對し、二心を抱ける楊宇廷に委して、自ら顧みるころがなかつた。果然張、楊の率ゆる奉天軍は戰意なく、五月から六月にかけての京漢線における戰鬪において山西軍に破られ、つひに馮玉祥軍と決戦を交へずして、保定の線を敗退し、張作霖自身も亦匆皇として都を落つるこころなり、奉天への途上、彼は皇姑屯の奇禍に遇ふてあえなく倒れてしまつた。

しかし張作霖最後の都落ちは頗る堂々たるものであつた。いつものやうにコソ／＼と逃げたのではなく、彼は引揚に決意した翌日先づ外交團を元帥府に招いて、悲壯なる告別をなし、また長

老王士珍を招き、奉軍退却後の治安維持を託した。彼は更らに過渡期の北京警備のため鮑毓麟軍をのこし、外交及び内務兩總長を残留せしめて、外交と内治はこれを須臾もゆるがせにせぬ用意を示し、六月三日午前一時二十分、潘復總理以下閣僚を隨へ、堂々北京の正門から出城し、正陽門東車站から特別列車で奏樂裡に悠々奉天に向つた。かくの如きは支那近代各元首の都落ち中、最も堂々たるものであつた云はなければならぬ。いつも目から鼻へ抜ける敏捷さを以て間髪を容れぬ危機から脱却するを常とした彼は今度に限つてあくまで大元帥の威容を持って、北京を去つた。鳥の死するや啼く聲悲し、人の死するや、言よし。張作霖の今次の行の堂々たりし、畢竟その前途に死の待てるを虫が知らせたこころも云ふべきか。

x x x x x x

馮玉祥は、七月一日鄭州における蔣介石歡迎の宴において「余は最近の二三年間日夜張作霖討伐の戰意に燃えてゐた、然るに張作霖突如として死去すこの報に接し、余は俄かに氣がゆるみ、三日間病床についた。爾來今日に至るもまだ全快するに至らぬ」と語つたさうである。往昔上杉謙信が武田信玄の死を聞いて箸を投じ、「われ好敵手を失へり」と歎息した史實と對照してまことに興味をおぼゆる話柄である。



私は十七年十一月四日、南京において、馮玉祥を訪ふた時、彼と張作霖との關係について、極めて興味深い問答を交はした。(第一章参照)ここに挿入の馮玉祥の書は、その時の私の質問に對する彼の筆答の一部である。

六

なほここに附記すべきはあるソウエート政治家の、北京クーデターの直後、私に語つた吳佩孚、張作霖及び馮玉祥の三人についての批評である。その大要に曰く、

吳佩孚と張作霖はともに一介の武弁である。たゞ前者は人格高潔なる愛國者で後者は所謂「綠林」出身の梟雄たるの相違はあるが、政治上の經驗または思想問題に至つては、二人とも何等の理解をもたない。然るに馮玉祥はたゞに軍人としての性格を充分に備へてゐるのみならず、政治家としての膽略もあれば、また思想家としての深みもある。彼は實に支那當代稀れに見る傑物である。殊に彼は年齒最も若く、支那軍閥頭目中最も多望の將來をもつてゐる。余は嘗つて、馮玉祥に向ひ「世間では頻りに貴下の第二奉直戰爭當時の寢返りを非難し、貴下の人格を疑ふものがあるが、貴下はこれに對してなんぞ説明するか」と訊ねたことがあつたが、馮玉祥は「當時、成る程余は吳佩孚の部下であつた。しかし、それは單に軍務上の等級差別に過ぎなかつた。余の心身を捧げて仕へつゝあるは、支那國民である。支那國民の利益に反するものがあるならば、それが

張作霖吳佩孚均是  
三民主義的仇人非我  
個人之仇人也乃國民  
黨之敵人也

布流



余の上官であつても、余は國民のため、國民の命するところによつて、これを討たざるを得ない  
これ、即ち、余が第二奉直戦争の終りに、余の軍隊を「國民軍」に改名した所以である」に答へた  
彼の抱負の大にして識見の高き、これを以ても察するにあまりあるのである……云々

批評の當否は別として、これによつて、ソウエート當局が支那軍閥の巨頭、殊に馮玉祥に對して如何なる見地から觀察を下してゐたか、推知される。

しかし、支那革命がボリシエウイキ一の指導を離れて、ボロヂン始め、ソウエート顧問の支那から逐ひたてられるに至るや、ソウエート當局の馮玉祥に對する批評も變つて來た。十六年の夏、赤化頂上當時の武漢で、大いに「赤い氣焰」をあけた赤色國際勞動組合同盟幹事長ロゾフスキーの如き支那から逐はれてモスクワに歸るや、共產黨機關ブラウダ紙上において「老獪狡猾馮玉祥の右に出づるものなし」なき、手厳しくこき下ろしたものである。



▼ハイカラの馮玉祥▲

馮玉祥は大のハイカラである云つたならば、あの兵卒服を着て無蓋車で行軍する馮玉祥がどうしてハイカラか？云ふ疑問がおこつて来るわけであるが、然しあれで彼にも仲々隅におけぬたしなみがあるのだ。第一に彼の髭を見よ。時にポー／＼と髭鬚を立て、鍾馗のやうな顔をぬつこ出して来るこどももあるが、然し平素は唇の上にチャップリン髭を蓄へ、しかもそれを時には五分巾位にかりつめたりしてハイカラを氣取る。時には全部そり落して若々しい無髭男となるこどももある。訪客が彼に寫眞を撮らせて呉れよ云ふこ必らずそのわきに寫眞機を持った彼の副官が立つて居て、同じ寫眞を同時にレンズに入れるのである。彼のハイカラにはかうした念入りの用意もある。李徳全夫人からの世話もあらうが、馮自身も一見邊幅を飾らぬ豪傑のやうに見へて、その實、あれで仲々の苦勞人なのだ。

十 蔣介石と馮玉祥



戴天仇の私の議論・孫文主義は中庸か左傾か・蔣介石の「中正」主義・支那のケレンスキー・爪をかくす鷹・私と田中前首相との對話・支那を動かす二つの力―蔣の財力と馮の武力・編遣會議と第三次代表大會・武漢爭奪戦・援蔣討漢か援漢討蔣かはた中立厳守か・海へ―港へ！

民國十七年七月、蔣介石夫妻は北伐成功奉告式舉行かたぐ、北京に來た機會において、一日、内外の人士を招き、外交大樓において、賑やかなファイブ・オックロク・テーを催した。恰度その頃、南京政府が日支條約廢棄を聲明した結果、日支關係が極度に惡化し、わが當局は一人もこのレセプションに出席しなかつた。

この日、同じ外交大樓において、私は國民黨首領戴天仇と會見した。レセプション・ホールでは主客が茶菓の間に閑談を交しつゝあつた時、私と戴天仇とは、奥の客間において議論を戦はしてゐたのである。

私と戴天仇との會見談において、議論の焦點となつたのは「孫文晩年の思想」である。この問題において、私と戴天仇の意見は全く右と左にわかれてしまつた。

私は前年著した「レーニンのロシアと孫文の支那」において、孫文の思想的エウオリューションを論じて左の如き斷定を下した。

……孫文は國家民主主義の革命家、即ちロシアのナドロニキーと同じ思想をもつて起ち、中途にして民主主義から社會主義に移り、最後に更らに一步左傾して共產黨の手を握るに至つた。レーニンはマルクシズムに據つて出發し、眞つ直ぐ社會革命に向つて進み、最後に至つて、政權掌握



の後、新經濟政策をこつて、俄かに右へ逆戻りした。かくして晩年に至つて左傾した孫文、右傾したいト、ニ、こは、「新經濟政策」のプラットフォームにおいてピツタリ落ち合つた……

……孫文の思想、その創始せる三民主義は、時こもに進化し、漸次左に傾き、そのエウオリウシヨンの最後の階梯においては、可なり近くボリシエウイズムに接近して來た……

……晩年における孫文の言行、その農工、聯露及び容共の三大政策、ボロヂンに對する信頼、その臨終に際しての遺言等幾多の事實から推すに、われ等も亦、三民主義——晩年孫文が思想的エウオリウシヨンの最終の階梯における三民主義——に對しては、恰かも張作霖の云へる如く、「煎じつめれば、結局共產主義こなりはせぬか」の感なきを得ない……

私が戴天仇に向つて力説したのは、以上の持論の通り、晩年の孫文はたしかに左傾した。「赤」かつた。ボリシエウイズムに近かつた……こ云ふ断定である。私はこの説を更らに力強く肯定するために

孫文晩年の思想的左傾は決して、書物を讀んだり、人の説を聞いたりした上のここでなく、實際的革命運動における幾多失敗の經驗によつて教へられたものである。それだけ孫文晩年の左傾は深刻なものであつた。眞剣なものであつた……この見解をもつけ加へ、大いに自説の主張につこめた。

然るに戴天仇はあたまつから、私の説を否定し、「孫文の思想を捉へて、ボリシエウイズムに近かつたなきこ云ふは、飛んでもない見當違ひである」にて「孫文主義は右でもなければ左でもない、中庸である」この前提の下に、左の極めて興味深い一つの秘史實を私に語つて聞かせた。

民國十四年春、孫文先生は北京の客舎で、不治の重患に罹り、臥床の人こなられた。たしか先生が不歸の客こなられる十日ほご前のここであつたこ記憶する。私は重い病氣の先生を煩はすのは甚だ濟まないこは思つたが、しかし、これだけは先生の生きて居られる間に、是非こも確かめて置かねばならぬこ考へ、先生の枕頭に咫尺して「私は平素から先生の教義の根本は要するに中庸にあるこ信じてゐます。三民主義の要諦は中庸にあるこの定義を下して、間違ひがありませんか」こ聞いて見たのである。そして、先生はこれに對し「ウン、お前の云ふ通りだ」こ答へ乍ら、頭を下けて、うなづかれた。

戴天仇はこの孫文の永眠十日前における本人自身の口述を論據こして、「晩年の孫文は赤かつた」こ云ふ私の説を覆へさうこした。然し、私は如何にしても、戴天仇の説に同意するここが出来ない。

「少くこも農工、聯露、容共の三大赤色政策は中庸の思想からわり出されるであらうか」こ厳しく反駁して見たが、結局折り合はず、戴氏は「君の議論はあまりに科學的だ」この珍妙な捨てせりふをのこして、席をたつた。



恰度そこへ蒋介石がひよつこり顔を出したので、そばに居合はせた張群が、如才なく蔣を引  
き合はせてくれた。私はその前にも蔣と會つたことがあるが、互ひに名乗りあつて挨拶をかわした  
のはこの時が始めてある。張群は特に私が「ソウエート東方策」及び「レーニンのロシアと孫文の  
支那」の著者であることを蒋介石に紹介したが、蔣は「貴著はかねて拜讀して居ります」なきに類る  
如才ないものであつた。但し私の前記二著の中、「ソウエート東方策」は北京、天津及び上海の三ヶ  
所で漢譯され、廣く支那の識者間に讀まれてゐるが、「レーニンのロシアと孫文の支那」は數名の支  
那人が漢譯を試みたけれども、國民政府のために禁止され、つひに出版さるゝに至らぬ。國民政府  
當局は何故「レーニンのロシアと孫文の支那」の漢譯出版を許さぬか。それは云ふまでもなく、私の  
同著における孫文晩年の赤化斷定が、戴天仇始め國民政府現幹部の孫文主義中庸論と全然相反して  
ゐるからである。

二

私が戴天仇から「孫文主義の中庸論」を聞いて思ひ出したのは蒋介石の雅號「中正」である。

私は十七年秋、長江筋を旅行した時、確か漢口であつたと思ふ、ある左派國民黨の領袖との談話  
に際し「蒋介石の思想的傾向は如何」の質問を發したところ、その人即座に「蒋介石の雅號『中正』  
こそ、即ち彼の思想的傾向と、その政策方針を表示するものである。更らにこれを詳説するに、蔣

介石は右にも非ず、左にもあらず、國民黨左右兩派の間を行くのである」に答へ、更らに「『中正』  
の二字中、『正』の字の當否は別として、少くも『中』の字は確かに當つてゐる」を、少々皮肉を交  
へて附言した。

蒋介石は孫文の直統繼承者を以て自ら任じてゐる。彼の雅號は勿論その政策を表示するためにつ  
けたものではなからうが、然し近頃の彼はたしかに「中正」政策をこつてゐる。蒋介石の「中正」政策  
は戴天仇の「中庸」論と、文字の上から見て同一とも考へられ、恐らく蒋介石自身も、理想的には兩  
者の同一ならんことを希望して居るのであらう。しかし事實において、蒋介石の「中正」政策は國民  
黨の左右兩派の中間に介在し、右をもつて左を抑へ、左の力をかりて右を制肘し、以て自家の地位  
を保持しやうとする政策であつて、主義主張上の中庸とは聊かその趣きを異にしてゐるのである。

三

私が一昨年著した「レーニンのロシアと孫文の支那」に於て、蒋介石を批評し、彼は「支那革命に  
おけるケレンスキー」であるとなしたのも、要するに蒋介石はその「中正主義」に於て、全くロシア  
革命におけるケレンスキーと、その軌を同じうすることを指したに外ならぬ。ケレンスキーは社會  
革命黨の中央派出身であるが、しかし臨時革命政府の法相となり、陸海軍相となり、最後に首相の椅  
子を占むるに至つた後の彼は常に左右に動搖し、或は左派の力を借りて、右派を抑へ、右派の背景



によつて、左派を牽制し、以てその間に自家の政權維持策を講じたのであるが、結局左派、即ちレーニンやトロツキー等の率ゐるボリシエウイキーのために、冬宮を追はれ、彼を總理とする臨時政府は崩壊して、突如ソウエト政府の出現を見るに至つた。

蒋介石も亦國民黨中央派のリーダーを以て自ら任じてゐるが、やゝもすれば汪兆銘等と接近して、國民黨の左派を味方に引入れ、以て右派彈壓を試みるころがあるかと思ふに、これと全く反對に胡漢民や戴天仇等と提携して、國民黨の右派を抱き込み、以て左派の排斥を企つるころもある。この點蒋介石は全くケレンスキーそのまゝである。

戴天仇の『孫文主義の中庸論』、蒋介石の『中正政策』……いづれも今日の如き國民黨を操縦して行くには極めて都合のよいボリシーであるには相違ない。即ち孫文主義を右か左かわからぬやうにしておけば、いつでも孫文の名を以て、自家に都合のよい政策を遂行し得るわけである。また右をもつて左を抑へ、左をもつて右を制する政策さへ巧みに適用して行けば、さつちどころがつても、その地位を失はずに濟むかも知れぬ。しかし『中正』主義の強味が、そこにあるならば、その弱點も亦そこになくはならぬ。その地位中央にあつても、左顧右眄するものは、方針定まらず、全力を一處に集中するころが出来ない。

私はこの春、トルコの舊都スタンブールに遊んだ時、恰度スタンブールの鼻先のマルモラ海上に

横はるプリンキボ島でトロツキーを訪ふたが、その際ト氏はしきりにソウエト政府の現巨頭スターリンの中央主義を罵倒し

セントリズムはソシアル・デモクラシー・コミンニズムの中間に立つてゐる。しかしセントリズムは根底が不安定である、たゞひそれが國家機關の資力に據つて起つてゐる時に於ても、なほ然りである。セントリズムはソシアル・デモクラシー・コミンニズムのひき白の間にあつて碎きつぶされてしまふ。

と論斷した。中央主義は極端に走らず、従つて一見穩健主義の如く見ゆるが、事實に於ては、さうしても左右に動搖を免れぬものである。中央主義は不徹底である。明瞭を缺く。トロツキーの所説を眞理とすれば、蒋介石の中正主義も亦、國民黨左右兩派のひき白の間に挟つて、碎きつぶされてしまふであらうとの結論を下さねばならぬわけである。これに反して、右か左か、いづれかの一方に方向を定めたものは、進取の氣が強く、従つてたゞひ二度、三度、失敗を重ねても、結局彼岸に漕ぎつける可能性をもつてゐるが、同時に極端に走りやすい。

中央主義の弱味は其處にあるのである。而してケレンスキーの權花一朝にして倒れた所以はまさにこのセントリズムの弱點にある。たゞロシアのケレンスキーに比して、支那のケレンスキーには少くも二つの強味がある。而して彼が今日なほその勢力を支持しつゝある所以も亦ここに



である。第一は蒋介石が革命軍中に信頼すべき士官を直接指揮し得る部隊を有することである。これに反してケレンスキーは辯護士上りで、軍事上の智識をもたず、又軍隊の中に、直接何等の勢力をもたず、時々戦線に出かけ、熱辯をふるつて士氣を鼓舞し、人氣をこつたに過ぎない。蒋介石は軍人出身である。そして彼には自ら養成した黄埔軍官學校出身の革命士官がある。彼が今日の地位を勝ち得た最大の原因は、革命士官を以て基幹とする革命軍の武力にあるいはねばならぬ。第二は蒋介石の背後にあつて、南京政府を支持する浙江財閥の財力である。蒋介石はたゞにその出身地關係のみでなく、その新夫人宋美齡によつて、浙江財閥の一大勢力たる宋家と姻戚關係を結び、彼はこれによつて上海の富豪をその味方とするに成功した。蒋介石が上海に於て無産黨の動亂に打ち勝ち、また北伐を決行し得たことについては、その義兄にして財政部長たる宋子文の手腕、浙江財閥の援助が、與つて力があつたのである。

蒋介石が、一、革命軍の基本部隊を、二、上海を中心とする浙江財閥、即ち武力と財力の二つを併せて、その味方に引き入れることに成功したことは、抑も彼の權力をして、長命を保たしめた最も有力な原因であらねばならぬ。かくして「支那のケレンスキー」は案外根強く、その權力を堅持し、已に南京政府の首席を占むること一年有餘に及んだ。たゞ最近に至つて、漸やく各地に反蔣運動が擡頭して來たやうである。而して最近の反蔣運動は主として政治的には汪兆銘を、軍事的には馮玉祥を

かついで、蒋介石に代はらしめんとする國民黨左派の運動の如く見える。然りしすれば左傾運動が中央主義に對して攻勢に轉じたものを見なければならぬ。もし這般の反蔣運動にして成功せんか、それは恰かもロシアにおけるボリシェウイズムの成功に比すべく、蒋介石は左右動搖を幾度か反覆した揚句、左からのや、強き波に足をさらはれ、結局ケレンスキーの轍を踏むこと、なるわけである。(以上三項は本年一月二十三日、東京青山會館における講演の一部をそのまま、摘録したものである)

四

馮玉祥が始めて蒋介石と相會する機會を得たのは、民國十六年七月十七日、南京から北上した蒋介石を、陝西から河南に進出した馮玉祥が徐州に訪ふた時のことである。二人はこの徐州會見において、中部支那における革命軍戰捷の喜びをわかつき共に、更らに力をあはせて、北伐の完成を相誓つたのである。この會見までの國民革命軍は、蒋介石の率ゐる第一集團軍も、馮玉祥麾下の第二集團軍も、たゞ共同の敵を目標として戰闘し來つたことは云ふもの、統一された指揮の下に動いたものではなく、兩軍は全然獨立した軍隊で、いはゞ各個獨立した聯合軍として動いたものであつた。そして徐州會見に際し、蒋介石は馮玉祥を遇するに、決して部下の將として、なく、同格の總司令として、極めて丁重にもてなしたのである。然し蒋介石は第一集團軍總司令であると同時に、革命軍全体の統帥格であり、またかゝる場合謙讓なる馮玉祥は徐州會議の時から、一步を蒋介石に譲り、



明らかにその統帥下に立つことを表明したのである。蓋し當時の西北國民軍は全く地盤貧弱を極めたので、大いに蒋介石をかつぐを得策したのであらう。馮玉祥がその至る所の居室に必らず孫文と蒋介石二人の寫眞を掲げたなき、如何に馮が蔣に對して禮讓の態度を裝ふに心を用ひたか、うかゞはれるのである。

同年八月、蒋介石は一方戰線においては、山東軍に徐州を奪回され、同時に他の一方、國民黨内廣西派の尻押しによる右派の擡頭のために、その地位俄かに動搖し、ついにしばらく總司令の職を去り、日本に遊ぶのやむなき破目に陥つた。而して當時、蒋介石のために最も深く憂ひたのは馮玉祥であつた。

その頃、馮玉祥は鄭州にあつたが、蒋介石が突如國民革命軍總司令の榮職を抛ち、風の如く郷里の浙江省溪口鎮に去る……この急報に接するや、直ちに南京における李烈鈞にあて、「介公（蒋介石）の一身は實に黨國の安危に繋るゝところ、如何なる困難、如何なる謗毀のあらうとも、身を殺して、革命大業の完成に力すべきに、今次突如出走の報に接し、實に駭異に堪えず」きて、大要左の蒋介石下野挽留の電信を送り、親しくこれを蔣に手交して、その復職を勸告せんことを懇囑した。

介石に兄  
頃日致知（李烈鈞）、吾民の諸同志より來電あり。聞く處によれば、賢兄には敬服上海に趣かれし

由、實に駭然の至りに堪へない。

賢兄の一身は、まさに黨國の浮沈に繋る所、また實に民衆の救出主たり。北伐以來の百戰苦功は天下萬人の認むる所である。況や現下事變紛糾正に挽救を要し、革命事業の成否は擧げて大兄の双肩に繋る折柄においてをや。然るに纔かに一二の者の中傷の故を以つて、遽かに高蹈を欲せらる。大兄の坦々たる懐中、職務を捨つる敝履の如くなる、之また天下萬人に明らかなる所であるも、故總理革命の大業は、今正に繼續進行中にあり。千萬革命の同胞は兄なくして何を以てか之を維持するを得ん。中國被壓迫の四億の民は、何を以てか其水火の苦中より救ふ事を得ん。且つ又歴年革命の爲死傷殘廢せし者等の苦心も水泡に歸せんせば、大兄の思ひ茲に及ばざるや、不審の議である。目下革命黨員たる者須らく一切の惡魔を誓死決戰を要す可く、此故に弟不肖を顧みず、前來以て大兄と同一革命戰線上に奮闘し、革命達成の日の一日も早からん事を期した。大兄若し一切を顧みず、是非とも退休を欲せば、之れ實に革命垂成の事業をして無有に歸せしめ、黨國の存亡を袖手以て傍觀し、將士の輿望を抛つて、故總理付託の重きに戻るものである。か、れば弟もまた素志にそむかんは實にやむを得ざる次第である。即ち自ら智力をはかるに、賢兄の萬分の一にも及ばず、惟一同と共に隱退あるのみ。天下の事尚ほ云ふに忍びず。黨國存亡の關る所、大兄一人の進退問題にあらず。願はくは即日南京に歸られ、大計を主持せられ度く、大兄若し一切





祥玉馮と石介蔣

の反動異圖を排除し、障碍を剷除せば、黨國の幸これに過ぎず。弟兄ミ既に志を同じうし、境遇また異らず。休戚痛癢、息々相關す。特に飛電志を陳べ、以て採納を祈る次第である。關山阻隔、神魂飛越、耿々たる血誠、盼禱の至りに勝えない。弟玉祥拜。

電文は懇切を極め、情誼を盡してある。當時一説には蒋介石の失脚は馮玉祥の陰謀に原因した如く傳へられたが、しかし事實はその正反對であつたのである。第七章に詳記した如く、十六年春から夏にかけての南京對武漢の内訌に當り、馮玉祥は中立方針をとり、ごちらの味方もせねば、またごちらをも敵に廻はさぬ政策をこつた。しかし當時の政情を表裏にわたつて詳細に研究せんか、私はむしろ、嚴格に觀て、馮玉祥の中立は決して嚴正のものであつたことは云へない。たしかに南京側、即ち蒋介石の方により多くの同情をもち、より厚き好意を寄せてゐたに信ずる。

下野後の蒋介石は日本に遊び、宋美齡との縁談を進めなごしてゐる中に、支那の革命は再び蒋介石のためによりに展開し、何應欽始め自派腹心の諸將に迎へられて、南京に歸來し、重ねて國民革命軍總司令に復職した。

その後引き續き、蔣、馮両者の間には、極めて親密な關係が持續され、二人は度々會見を重ね、北伐作戦を議し、北伐完成後、北京における五巨頭會見に際しても、馮と蔣、蔣と李等の間には種々のわたかまりがあつたやうであるが、馮、蔣両者の關係は概して親密なものであつた。



北京會議の後、八月勿々馮玉祥は蒋介石の招電に應じ、國民黨第五次大會開會の機會に於て、南京を訪ひ、滞在二十餘日間に及んだ。南京に於ける馮玉祥は云ふまでもなく、内外の注目を惹き、その一舉一動は南京の政局に影響を及ぼした。但し彼は元來國民黨員として後輩である。且つかゝる場合、予は武辨にして政治を知らずと無暗に謙讓的態度に出づるは、彼の常套政畧である。即ち彼は第五次大會にも開會式に出ただけで何等の發言をなさず。大會以外の各種會議にも出席を避け、裁兵會議に出ただけである。一時彼は國民政府に對して不平を抱き、また國民黨の現状にもあき足らず、南京當局に對して陰に威壓を加へたと云ふ説もあるが、事實においては大体に於て馮は南京政府を支持したと見るが真相に近い。また馮玉祥は廣西派の手を握つて、蒋介石の左派分子との提携策を妨害したと云ふ報道も傳へられたが、彼と蒋介石との個人關係は南京においても變りなく、所謂兄弟分として蒋介石は馮玉祥に對し、家族の待遇をもつて歡待した。要するに當時の馮としては南京政府をもちたて、國民黨を看板とし、その間に一方國民の衆望を集め、他方國民政府から財政その他の援助を得んじたものである。

馮玉祥が南京滞在中、政治運動においてあくまでおこなしい態度に出でたが、これと同時に南京政府に向つて裁兵費の請求は大分やかましくせびつたと云ふ。一説によれば二千萬元吹つけたが、



結局二百萬元ばかりに減らされたことも云ふ。但し第二集團軍の裁兵費は一千萬元と計上され、裁兵會議にこれを提出したことは確かであるが、その中幾何の現なまをつかんで河南に歸つたか、確報がない。

かくして南京に於ける馮玉祥は表面にあらはれた政治運動に於ては何等豫期された積極行動に出でなかつたが、その代り民衆を對手の宣傳運動には、各方面に向つて精力の續く限り努力し、大いにその得意の雄辯を振つて、講演や演説で東奔西走した。馮玉祥が國民黨内に於ける勢力のなほ微弱なるを自覺し、あまり出しやばらず、黨の内外において、先づ人氣を集めることに腐心し、この點に力を集注したのは、まことに「己を知るの明」であり、また「爪をかくす鷹」と云はなければならぬ。

## 六

かくして、南京における馮玉祥は一つは國民政府の政務に加はり、一つは國民黨の領袖としての修養につとめた。民國十七年春から夏にかけての馮玉祥は革命軍の巨頭中最も忠實に蒋介石を扶け、また最も眞面目な國民黨となりすましたのである。たゞ同年八月二十四日馮玉祥は突然南京を發し、急遽河南省に歸つたので、一時馮と蔣の關係悪化説が傳へられたが、しかしその後間もなく馮の南京退出は全く別の事情に因つたものである、即ち彼が南京に滞在してその本據の留守となつた機會に、河南及陝西兩省において反馮運動が勃發したこの急報に接したからであることが判明した。當

時河南省の南方では樊鍾秀軍、陝西省では回教徒、更らに兩省に跨つて岳維峻軍が、武漢派の後援を受けて、馮玉祥の根據地顛覆を企てたのである。

馮玉祥の河南に歸來するや、開封、鄭州及洛陽等を巡視して駐屯軍の檢閲を行ひ、新たに鹿鍾麟を豫陝(即ち河南及び陝西)剿匪總司令兼河南剿匪總指揮、孫良誠を山東剿匪總指揮、劉郁芬を陝甘剿匪總司令、孫連仲を甘肅剿匪總指揮、宋哲元を陝甘剿匪總指揮に任命し、その所轄各省における反馮動亂の鎮壓策を講ずることとした。固より樊鍾秀と云ひ、岳維峻と云ひ、馮玉祥にかゝつては敵でなく、殆んど鎧袖一觸でバタ／＼と打ち倒され、岳維峻軍は陝西より河南を越えて安徽に逃れ、蒋介石に救済を請ふたが、蔣も亦馮の手前を憚つて手出しが出来ず、十七年夏の河南及び陝西における反馮運動は極めて手輕るに平定されてしまつた。但し樊、岳兩軍の動亂は國民軍の鐵槌の下に潰されたが、この動亂を煽動した武漢派(李宗仁等の率ゆる廣西派の實力團體)と馮玉祥との關係は益々悪化し、こゝに兩者の間に深刻なる溝渠が掘り出されたと同時に、他の一方馮と蔣とは益々接近することとなつた。河南、陝西の動亂鎮定するや、馮玉祥は再び南京にその居を移した。

## 七

十七年十月三日、南京政府は内部の組織を變更し、五院制を新設するや、廣西派の巨頭李宗仁は軍政部長の椅子に自身もしくは何應欽を推したが、蒋介石は馮玉祥を以て軍政部長の第一候補に推



薦し、その結果李宗仁は不平満々にて、馮玉祥の南京到着の直前、南京を引揚げて武漢に去つた。當時消息筋から傳へられたところによると、蒋介石はたゞ軍政部長の席をあてがつても馮玉祥は恐らくこれを辭退するであらうと考へてゐたのである。然るに、その頃、再び南京に來た馮玉祥は國民政府の命令があれば如何なる役も辭せぬと云ふ態度で、行政院副院長並びに軍政部長の二つの任命を快よく受けてしまつた。北方にあつた頃の馮玉祥の政略の要領は、自ら政局の表面に立たず、裏面にかくれて、政府當局を背後から操縦するにあつた。北京クーデター直後の如き、彼は常に或は西山にかくれ、或は張家口に引つ込み、北京にはたゞ鹿鍾麟を置き、自ら政府の要路に立たずして、陰然勢力をなしたものである。然しこの政略は要するに失敗に終つたのみならず、あまりに時代おくれの舊式政略であつて、革命發展後の政局には適せぬ。南京における馮玉祥はも早や北京時代の馮玉祥でない。彼は往時の失敗に終り、且つ舊式に失した政略をすて、今度はその正反對に、如何なる地位でも權力の伴ふものは自ら進んで自家の手に握る方針を採つた。行政院長にしても、軍政部長にしても、主席蒋介石と行政院長譚延闓は云ふまでもなく、資格から云へば戴天仇や、胡漢民なごの下風に立たねばならぬ。しかも彼は地位の上下を問はず、おこなく國民政府の命するがまゝ、に行政院副院長と軍政部長の職に就き、殆んど南京に腰をおちつけて、鋭意熱心政務に當り、例の通りの精勵格闘振りを示した。

しかし、以上の如き馮玉祥の蒋介石及び國民政府に對する服従と忠勤は、果して誠心誠意から出たものであつたか。或は單に蔣をかつぎ、一は國民黨内に自家の勢力を布植し、一は國民政府から軍費を絞り出す政策に過ぎなかつたか。

八

私は民國十七年秋、長江筋の旅行を終へて北平に歸るや、行李を解く暇もなく、翌年の春、社用にて歸朝し、大阪と東京にしばらく滞在したが、その機會に於て、一月廿一日當時の首相兼外相田中大將を訪ねたことがある。田中前首相と私の會話は主として露支兩國の問題を語つたのであるが特に蒋介石と馮玉祥に關し、左の如き問答を交はした。

(私)私は今年から來年にかけての支那は「蒋介石の財力」と「馮玉祥の武力」の二つの力によつて動いて行くものを見てをります。

(田中前總理)ウン、乃公もさう思ふ。そこで乃公は二人に仲よくしてやれといつて勸めてゐるのぢや。

(私)私は昨年秋、南京で馮玉祥を訪ねましたが、目下の彼は蒋介石の下風に立ち乍ら、まことにおこなくしてをります。

(田中)馮、蔣の二人が協力してゐる間は、南京政府は鞏固であらう。



(私)しかし、二人がいつまで仲よくして行くかは大なる疑問であります。最近奉天でやられた楊宇霆はあの前の日まで張學良と每晚麻雀に、よんだりよばれたりして、親しい交遊を續けてゐたのですが、今から考へますと、それは全く對手をして油断させるものでありました。蔣、馮の關係も、何時さう惡化するかわかりません。

(田中)それだから乃公は二人に向つて協力一致してやれと勸めてゐるのぢや。

その翌々日の一月廿三日、私は東京日日新聞社の主催で、青山會館における支那時局講演會において「馮玉祥と蔣介石」を題する演題の下に、一場の講演を試みたが、その時も私は大体前項の如く論じた上で、蔣、馮兩者の衝突は免がるべからずとの結論を下したのである。そして私はその後、日本から再び支那の任地に歸るや、直ちに歐洲旅行の途に上つたが、私がまだロシアにゐた間に、早くも馮、蔣間に軋轢はじまり、韓復榘の寢返りの報道はシベリアの道中、新聞紙上で知つた。

即ち民國十八年春から夏にかけて、蔣介石は武漢派を一蹴した勢を以て、更らに馮玉祥の勢力彈壓にこりかゝり、爾來二人は今もなほ唯み合ひの状態を續けてゐる。而してこの春、私に蔣と馮との提携の希望を語つた田中大將は、夏、台閣を投げ出し、秋、忽焉として長逝したが、支那の時局は故人の希望に反して、蔣、馮兩雄つひに並び立つ能はず。彼を思ひ、此を想へば、また感慨なきを得ぬのである。

蔣、馮の關係に龜裂を生ずるに至つた最初の原因は、南京における編遣會議と第三次全國代表大會に發してゐる。南京政府は編遣會議によりて地方軍閥の兵力を減縮し、以て中央の政權を鞏固にし、全國の統一を期したのである。従つて編遣會議の決議は地方に割據し、あはよくば中央を乗取らんとする馮玉祥等にまつては甚だ不利な結果を招來するのである。馮玉祥はいふまでもなく、閻錫山の如き比較的消極的な軍閥でも編遣會議に對しては不平滿々であつた。馮玉祥と閻錫山、更らに適確に言へば西北國民軍と山西軍との間には、昨年春北京入りのマラソン競争當時から、互ひに相疑ひ、少しも油断を許さなかつたのであるが、南京の編遣會議において、兩者が同じ立場に立つて以來、にはかに零細相通するところが生じ、馮と閻との間に「軍縮の一段落を告げ次第相携へて、下野外遊の途に就かうではないか」との話し合の成立したのも、この時のことである。勿論この話し合の眞の腹はなるべく、軍縮を避けて、北支那の實權を自分達で握つて行かうといふにあつたことは言ふまでもない。

第三次全國代表大會は民國十八年三月十七日南京において開かれた。

大會に對する蔣介石の政略は黨内の右派によつて、大會の大勢を制するにあつた。然るに、黨の多數は左派である。政府の反動右傾に逆行して、黨員の多數は急激に左傾した。こゝにおいて、政府は無理おしにも大會において多數を占めんがため、代表委員の半数官選と云ふ如き政令を發し、極端なる干渉を行ひ、高壓強制を以て、右派の大會を召集したのである。



然るに國民黨における馮玉祥は最初から、左派をもつてその背景を以てゐた。従つて半数官選、右派獨占の第三次大會は全く相容れぬのであつた。彼は當時人に語つて「第三次全國代表大會は徹頭徹尾余の主義主張に反行した」と云ひ、不満不平をもらしたものである。馮玉祥は第三次大會開會に先立つて河南に歸り、再び南京に出やうとせず、三月匆々病を稱して、蔣介石に於て、軍政部長辭任の電報をたゞきつけたのである。

九

編遣會議及び第三次代表大會に不平を抱いたものは、たゞに馮玉祥のみに止まらず、最右派を背景とする廣西派も亦、反蔣介石、反南京政府に傾いた。そして蔣介石はまづ最初に廣西派を打ち倒すに決した。三月廿六日國民政府は廣西派討伐令を發し、蔣介石自ら南京軍を率ゐて長江を遡り、卅一日九江において、武漢總攻撃令を下した。

南京對武漢の開戦に際して、注目的になつたのは馮玉祥の態度であつた。馮玉祥は中央擁護の策に出づるか、又は武漢派援助の方針に出づるか、或は中立を嚴守するか、長江の風雲は馮の態度一つで決するかに見えた程である。

蔣介石も馮玉祥の態度が氣にかゝり、特に鄒力子を馮のみに派遣して、廣西討伐についての諒解を求めた。しかし蔣介石の馮玉祥に向つて要望したところは、たゞその中立嚴守にあつた。しか

るに馮玉祥は廿九日中央軍援助を號して河南における國民軍を動員し、蔣介石に向つて

許昌の魏鳳樓師、南陽の石友三師、開封の張自忠師、汝南の田金凱師、新鄭の張維璽師、信陽の程希賢師及び河北の萬選才師はいづれも韓復榘の指揮に歸せしめ武漢に進攻せしむるに決した。

この電報を寄せたのである。馮軍の南下は實は蔣介石にまつて難有迷惑であつた。河南から南下して、武漢の北に迫る馮軍は果して南京軍に策應して、武漢を衝くか。又は途中で銚を轉じて、南京軍の背後を衝きはせぬか。假に南京軍を援助するとしても、武漢を馮軍の手にさらされては、折角の作戦も水泡に歸する。三月末から四月はじめにかけて、武漢を中心とする廣西軍、南京軍及び馮軍三者の作戦は極めて危険なる形勢を描き出したのである。もしあの時、馮にして、武漢軍を諒解をつけ、蔣介石に當るの態度に出でたならば、戦局は意外の結果を見たかも知れぬ。しかし、馮軍の態度はむしろ南京軍に先んじて、武漢を乗取るか見え、腹背敵を受けた廣西軍は、四月四日、ほんご戦はずして敗退し、蔣介石は四月五日、早くも軍艦楚有に座乗して、漢口に入り、極めて無難作に武漢派を一蹴し、武名を内外に轟かした。

馮玉祥は何故あの時、明らかに武漢派に加擔し、蔣介石を討たなかつたか。私はそれには二つの理由があつたと思ふ。即ち、第一、閻錫山の態度が不明瞭であつたこと、第二、馮玉祥と武漢派の間における過去の軋轢がそれである。第一の理由は、馮自ら人に洩らしたところで説明を要せぬ。第



二の馮と武漢派との從來の關係は、如何といふに、武漢派は從來國民黨の右派によつて來たもの。然るに馮玉祥は左派を味方として來た。私は昨年秋長江旅行の折、武漢に立寄つたが、當時の武漢は右派の根據地であると同時に、反馮分子の策源地をなしてゐた。また國民黨の右派と反馮各派とが廣西派の武力を背景にして、馮玉祥打倒の策を運らしてゐたので、たゞひ蒋介石とふ共同の敵を前に控えたといふ點で利害が一致しても、積年の舊怨は仲々さう手つ取り早くぬぐひ去れるものでなく、両者は容易に、手を握れぬのであつた。

當時消息筋には、馮玉祥が漢寧戰の機會において、蒋介石討伐を決行しなかつた理由として、蒋介石が馮玉祥へ軍費二百萬元を提供し、且つ事件解決の曉、武漢を馮系に與へる密約をなし、巧みに馮を釣つたからであるとの情報があつた。或はこの種の隠れた事情が原因したかも知れぬが、當時の武漢戰局からこれを觀るに、馮の計畫は要するに、一、南京軍に先んじて、武漢に入り、二、蒋介石をして國民黨の武漢占領を既成の事實として認めしめんとするにあつたこと考へられる。然るに國民黨の南下は却て武漢軍の敗退を早め、蒋介石のために何等抵抗を受けることなくして、武漢に入るの機會を造つてやつたこと、なつた。思ふに、當時馮玉祥のこつた政畧は、援漢討蔣、援蔣討漢、中立嚴守のいづれもつかず、表面援蔣討漢を装ふて、その實武漢乗つ取りを目標とし、劃策餘りに複雑過ぎて、果敢敢行を缺き、ついに蒋介石のために、機先を制せられること、なつた譯

である。十八年春、武漢戰爭における馮玉祥の政畧と作戰は、實に彼の一生一代を通じて、最も大なる失策、最も見苦しい拙作であつたこと見なければならぬ。

蒋介石すでに漢口に入り、武漢戰局は一段落を告げた。しかも、馮玉祥軍は湖北侵入を續け、韓復榘軍は武勝關を越へて、その前衛部隊は孝感を通過し、黃州方面に進出したので、蒋介石は馮軍の意圖の那邊に在るかを怪しみ、夏斗寅軍の一部をさいて、これに備へ、一時兩軍の前哨衝突説さへ傳へられた。武漢陷落後における馮軍の南下は、徒らに武漢に對する未練、執着振りを見せたに過ぎず、まことに拙作の上塗りであつた。馮玉祥の武漢割込みは失敗に終つた。馮、蔣關係はこれを動機にいよいよ悪化した。而して武漢に於ける兩者の勢力争ひはやがて山東問題に轉じ、ますます危険状態に入つた。

十

北京クーデター以後の馮玉祥は、主として察哈爾、綏遠、甘肅を地盤とし、常に西北地方に據つた。されば彼の率ゆる軍隊も西北國民黨と稱し來つたのである。國民黨は一時京畿一帶を手に入れたが、間もなく奉天軍のために、天津を奪はれ、やがてまた北京からも追はれることとなつた。馮玉祥の地盤には海がない。彼は港を有たぬ。これ實に馮玉祥及び彼の率ゆる國民黨の最大弱點をなし、この弱點あるがために、彼は終始その飛躍發展に非常の不便を感じた。國民黨はその物資、特



に武器の補充に當り、これを海外の輸入に仰ぐことが出来ぬ。馮玉祥がソウエート・ロシアに接近したのは、勿論思想上の共鳴、政略上の一致によつたものであるには相違ないが、また同時に海口をもたぬ馮玉祥としては、陸路續きのロシアによつて、武器その他の物資を補充するのやむを得なかつた事由もあつたといはなければならぬ。

五原誓師の後、その兵を潼關に進め、河南に出でた時、西北國民軍の目指した目標は海口にあつた。北京から天津、濟南から青島、さもなくば隴海線を眞つ直ぐ東に延ばした線上の東端港たる海州……そのいづれにか海口をつかまねばやまぬ……海へ、港へ！これ實に西北國民軍の第一のモットーである。しかるに、天津は閻錫山のために奪はれ、海州また南京政府直屬省たる江蘇省にあるため手が届かず、最後に残つたのは山東省である。十七年春の北伐最終戦に際し、山東方面は蔣介石自ら國民革命第一集團軍の主力を率ゐて、これに當つたが、しかし山東省だけは、國民軍に與へられたいといふ馮玉祥の要望に、一步を譲つて、孫良誠軍をして此の正面に加はらしめ、山東攻略の功名を馮玉祥と共に分つこころし、また北伐戦捷後、山東省はこれをあけて、馮玉祥にやらうといふ默契も出来てゐたやうである。たゞし、そのやうな約束がなかつたとしても、天津には出られず、海州を封ぜられた馮玉祥としては、何をおいても山東省をこらねばやまぬのであつた。彼が北伐戦争の當時、及びその直後、蔣介石の御機嫌通りに腐心し、自ら南京に来ておこなしく蔣主席の節度

服したのも、實はその代償として、山東省がほしかつたからであつたといふ説がある。しかし、蔣介石からこれを見れば、さなきだに恐るべき馮玉祥に、山東を與へ、海口をその手に入れんか、所謂鬼に金棒を與へるもの、全國統一事業の前に、一大障碍を造ることとなる。況して武漢討伐以來、半ば敵對状態に入つた馮玉祥に對して、山東を渡すわけには行かぬ。折柄日本の撤兵開始を機として、山東回收に當り、青島はじめ、同港以南の海岸線一帯を直轄さなし、已に蔣派の人を任命し、濟南を馮の手に残しても、青島はやらぬといふ態度を示した。しかし山東を手に入れても、青島を蔣にさらされては全く龍を描いて睛を點せぬと同じ。馮玉祥は憤然として、蔣介石の欺瞞政策を憤り、山東駐屯の國民軍に向つて撤退を命じた。四月廿六日、孫良誠は山東駐屯の國民軍全軍を率ゐて泰安より河南省に引揚げを開始した。

十一

馮玉祥が山東駐屯の國民軍に、突如河南に引揚げを命じたことは、いふまでもなく、蔣介石及び南京政府に對して明らかに反抗的態度を示したものである。しかし、武漢討伐の好機會に際してすら、遲疑してついに討蔣の旗幟をあげ得なかつた馮玉祥のことはである。武漢派を一蹴して今や内外にその武名を輝かしつゝある蔣介石に對して、積極的行動に出でやう筈はない。國民軍の山東撤退は馮玉祥の蔣介石に對する所謂「消極的宣戰」であつた。彼は孫良誠軍の河南に引揚げを終るや、諸將を



潼關に集めて、軍事會議を開き、國民全軍をあけて、再び陝西、甘肅、綏遠に退き、しばらく敵の壓迫を避けて徐ろに捲土重來の時機を待つべしとの作戰方針を提議した。この作戰方針に對し、韓復榘等は數年來凶作續きで、省民の餓死するもの幾十萬に達するといふ陝西省に、今更ら大軍を率ゐて退却するは、國民軍をあけて、死地に陥るものであるとて強硬に反對したが、馮玉祥は自説を持して動かす。國民軍は山東撤退に引續いて、更らに河南拋棄に決した。もし馮玉祥の全軍退却の作戰方針にして豫定通り完全に遂行されたならば、その結果はさうなつたであらうか。韓復榘等の切言した如く、全軍をあけて餓鬼地獄に投ずることゝなつたか、或は馮玉祥の方寸通り、一寸屈して一尺伸びる機會を作ることゝなつたか。しかし馮玉祥の如上の作戰計畫はその實行の劈頭において、思ひがけない一大障礙に會した。それは韓復榘が獨立を宣言したこゝである。即ち五月十九日潼關會議で全軍陝西へ退却するの作戰方針に反對した韓復榘は河南放棄を肯ぜず。中央擁護を表明して十八年來生死を共にして來た馮玉祥及び國民軍から離叛した。當時同じく河南にあつた石友三軍も、韓軍と行動を共にし、また河南を通過して退却中の馬鴻逵、席掖池の兩軍も、これに加はるることゝなり、國民軍はこゝにその最も優秀なる韓、石、馬、席の四部隊を失ふことゝなつた。これはいふまでもなく馮玉祥にこつて非常の打撃たらざるを得ない。

十二

蔣介石は韓復榘等の懷柔に成功した勢ひを以て、更らに他の國民軍將領にも、手をつけんことし、五月二十四日、左の「西北國民軍の將士に告ぐるの書」を公示した。

歴來軍閥の自ら覆滅するは皆な國家の軍隊を以て私有みなさんことを思ひ、之を失はんとを患ひ地位を保たんことを求め、終に倒行逆施し、自ら亡命を促すに因るのである。軍閥の本身はもこより惜しむに足らぬが、獨り其の將佐士兵は皆なわが國家の精銳にして軍閥に挾持され、人格を販賣し、生命を抛ち、生くるも同じ惡名を受け、死すれば人の憐惜なきは、誠に痛哭流涕の外ない。今馮玉祥等は叛黨叛國の軍閥である。中正は諸將士と同胞に屬し、誠を以て忠告せざるを得ない傾聽さるれば幸甚である。

諸將士は原來第二集團軍に屬するも、皆な中華民國の將士にして、馮氏及諸將士は固より歴史の關係があるも唯だ此歴史は必ず革命を依託して存在す。今や馮氏の叛逆顯著にして彼は自ら革命に外れ、嘗に自ら歴史を毀つのみならず、諸將士も當然私人の舊交を念ひ、國家の大義を忘れてはならぬ。馮氏は性來その長官に叛くに慣れ、彼の所謂革命は即ちそれである。其昔彼の侍した長官は皆な軍閥であつた。されば諸將士之を信じ、天下も亦盲從し、敢て、諸將士を責めなかつた。今彼の叛くは唯だ革命勢力たる中國國民黨國民政府である。故に諸將士も亦其の誘惑を受け



ず、正に彼が其の長官に對した所を以て、彼に對すべきである。

此次桂系(廣西派)の叛變は馮氏と共に謀る。其の狡詐は性質となり、中央の武漢を克復するや、彼乃ち桂系軍閥痛責の電を屢々發した。中央は偵報に根據し、李宋仁が自ら護黨救國南路總司令と稱し、彼が北路總司令に就任したことを探知し、これを詰問したが、彼は極力之を否認した。その後數日ならずして護黨救國西北路總司令となつた。茲に於て彼の桂系軍閥の叛黨叛國を責めた言葉は凡て其罪狀を公布するものに異らぬ。百舌あるも何を以て自ら解かんや。第三次全國代表大會は中央が法により召集し、馮氏も異言なく、第二集團軍方面參加の代表も決して少くなかつた。然るに今は桂系と同じ言葉を以て、中央に反する。以てその反覆常なく耻なきを見るここが出来らるであらう。

馮氏が激怨せる諸將士を以て、中央に背叛せしむるは、中央のために咥域を分ち、第二集團軍諸將士の困苦窮迫を無視して、少しも體卹を加へないものである。北伐完成以來魯豫陝甘各省の稅款及平漢瀧海鐵路の收入は、中央は悉く馮氏の請ふに委せ、且つ毎月中央より別に五十萬元づゝ支出し、討逆軍の興つて以來は特に厚く補助し、四月分の如きは百五十萬元に達し、本月十六日中央は尙ほ上海に於て五十萬元を支出した。中央今日の財政状態から見て、能力のあるだけを盡したるもの。知らず諸將士は此の事實を知るや否や。

馮氏は桂系と勾結し、益々兵器彈藥及び軍費の吸收に専心し、再び百萬元を得てゐる。馮氏に果して少しでも士兵の痛苦を減じたい意思があるならば何故今日まで給料を支拂はぬか。のみならずその收入を以て外國より武器を購ひ、廣く新を募り、以て地盤轄據に資し、中央に反抗し、而も新募兵にも給料を支給せぬ。誠にその良心のあるを疑はざるを得ない。

孫良誠の山東を去り、鹿鍾麟の南京を離れたのは皆な自らその職責を抛棄したものであるが、中央は管に之を詰詰しないのみならず、却て寛大の處置をこり、重ねて移調し、尙ほその原職に留めんとした。中央の人を用ふるや從來未だ岐視する所なし。且つ孫、鹿兩君の職を離れたのを顧るにまた馮氏の使嗾によるもの、其未だ悟らざるを惜む。馮氏はこれにより諸將士の憤慨を挑發せんとするのであるが、諸將士は能く其の欺蒙を受くるや。即ち劉郁芬等十餘人の十六日通電は或は馮氏のために竊名し、或は脅迫されたもので、諸將士が本心から逆附したのでないことは、中正も敢て斷言する所である。諸將士は人格を馮氏のために賣るをん甘せず、速かに之れを圖れ。月餘以來馮氏が各種の謠言を以て諸將士を欺き居るは推測に難くない。彼は必ず言ふであらう。「中央は常に魯豫(山東及び河南)に在る第二集團軍に不利である。故に速かに須らく西退し、以て實力を保ち、再び反抗を圖るべし」と。其言の甚だしく中央を誣ふるものなるとは、別問題として、單に戦事に就いて論ずるも、西北は毎年の饑饉で糧食既に盡きて居り、大軍若し西に去れば更に



何を以て堪へん。苟くも別に陰謀あるに非ざれば詎んぞ自ら絶地に趣くを肯ぜん。思ふに馮氏はソウエート・ロシアとの勾結をはからんとしてゐるが、而も日暮れて途尙ほ遠く、果して此に出づ。國人の共産禍を恐るゝは洪水猛獸よりも甚し。衆怒犯し難く、不亡何をか待たん。諸將士若し生命を以て馮氏に供するを欲せずば、更に速かに之を圖れ。今中央は既に馮玉祥の黨藉除名を決議し、通緝を命令したが、但し之は馮氏一人に限り、諸將士には何等關係ない。願くは諸將士凜然公私順逆の理を辨明し、正に反りて順を効し、既往の功績を保持し、革命の正義を發揚せよ。中央は必ず、諸將士と共に革命の大業を完成せん。しかし、この聲明書はその効なく、爾餘の國民軍將領は依然馮玉祥の指揮下に立ち、却て益々その結束を固くした。

## 十一 閻錫山と馮玉祥



北洋武將最後の二人。背面の脅威。下野の道連れ。  
二人の外遊劇。われこわが家族を人質に。狸藝の中  
にも「面子」を重んずる支那武士道

馮玉祥の討蔣作戰に當り、常にその後顧の憂ひをなせるは、山西の閻錫山である。國民軍と山西軍との間には、過去において、幾多の確執があつた。五原誓師後、國民軍の中原進出に當り、山西軍は國民軍の山西通過を許さず、ために國民軍は、甘肅より陝西へ、至難なる大迂廻を餘儀なくされた。また十七年春の北京攻畧戰に當り、國民軍と山西軍とは、北京一番入りを争ひ、所謂「京漢線に沿ふてマラソン競争」をなし、しかもその結果北京も天津もともに山西軍のために占られてしまつた。馮玉祥は如何に討蔣計劃を焦つても、閻錫山の態度が氣にかゝつてならぬ。たゞし討蔣戰に勝算があつても、一度山西軍のために、背面を衝かれんか、國民軍は直ちに進退兩難の苦境に陥るであらう。十八年四月馮玉祥が武漢戰爭の好機會においてすら、つひに討蔣軍をおこし得なかつたのも、一つは閻錫山の態度を懸念し、山西軍の「背面威嚇」を恐れたからである。

その後國民軍は愈々南京と斷交状態に入つたが、なほ且つ潼關における五月十九日の軍事會議において、馮玉祥は國民軍の總退却、河南拋棄説を唱へた。而してこれまた蔣介石と一戰を交へるにさき立ち、先づ山西軍を叩き伏せて、後顧の憂を斷たねばならぬを考へたからである。

即ち、當時馮玉祥は、一、國民軍の主力を潼關一帶に集結し、二、南京軍の北上せぬ中に、先づ山西省に押しよせて、閻錫山の本據を乗つ取り、三、防禦に至便にして、且つ物資に豊富なる山西省



に據つて、徐ろに南京軍對策を講じやうこの作戰方針であつたのである。これに對し、山西軍如何に有力であつても、その主力部隊は京津方面に出てるるので、山西省の防備は極めて手薄である。國民軍にして、その全力をあげて攻撃し來らんには、省境防禦は甚だ至難であらう。たゞ國民軍の總退却、河南拋棄、山西乗つ取りの當初の作戰計劃は、韓復榘、石友三、馬鴻逵、席液池等の叛起によつて、大蹉跌に會したが、しかもなほ孫良誠軍を中堅とする國民軍の主力部隊約二十萬の兵は、依然として馮玉祥の指揮下にある。國民軍にして窮鼠猫をかむの勢をもつて奮起せんには、山西省の乗つ取りは、韓、石等の離叛後と雖も、決して成算のないことではなかつた。こゝにおいて國民軍對南京軍の戦端なほ開かれぬ中に、先づ山西省西南境の風雲俄かに急を告げて來た。

然らばこれに對して、閻錫山は如何なる態度に出でたか。もし閻にして凡庸の武將であつたならば、勿論あの場合周章で、北平、天津方面の山西軍を呼びかへし、國民軍を對手に一戦を交へたことであらう。しかし、聰明にして利害の打算に敏なる彼はこの際國民軍と戦ふは、畢竟蔣介石のためにその統一霸權慾の達成を援助するもので、馮玉祥討伐の次ぎには、必らず閻錫山討伐の幕が開かれんことを憂慮し、また山西軍の力を以て、西北軍を討たんとする蔣介石の計略に乗るの愚なるを思ひ、國民軍を敵として戦備をなす代りに、逆に馮玉祥の苦境に對して、滿腔の同情を寄せ、再三電信を送つて、共に下野して外遊の途につかんことを勧告した。

私は支那軍閥鬭争の跡を見て、常に津々たる興味に打たる、は、舞臺に立つ武將連の驚くべき政略的智謀である。彼等は何なる場合でも、利害の打算を忘れぬ。利害一致すれば、昨の敵も今の味方となるべく、利害反すれば今の味方も明の敵となるのである。かくして必然衝突すべき讐敵にして、最後の瀬戸際で、翻然態度を一變して、盟約を結ぶこともあれば、十年苦樂を共にして來た戦友にして、最後の一年に突如戈を逆にして、裏切ることもあり、支那の變局はなかく單調に行かず、いつも意外の番狂はせがあり、紆餘曲折、波瀾重疊を極めるのである。

二

十八年五月末、蔣介石は、馮玉祥が韓復榘、石友三等の離叛に會して、已に兜を脱いだものを見て、馮に臨むに傲然戦勝者の態度を以てし、五月二十五日、大要左の如き威嚇的通告を送つた。兄が護黨救國軍西北總司令の通電を發したことは、明かに中央に謀反することを示したもので、兄のために革命の歴史に人格を失墜するものとして、痛惜に堪へない。中央は黨規に國法のために、やむをえず嚴正なる處置をこらざるをえないが、余は多年兄と親交あるにかへりみ、こゝに最後の忠告として、一言する次第である。兄の行動は實際反國の舊軍閥に異ならず、部下をして窮地に陥らしむるものである。余の見るところ、これには二つの理由がある。一は兄が廣西派および一般反動政客の挑發的離間策を信じたこと、他の一はいはゆる左傾派と黨中の先進と自稱する



連中の一致中央反對の策動にあやまれたことであらう。兄が今西北を固守し、或は中原をうかがふがごときは、北方軍閥の時代はいざ知らず、現在黨によつて全國統一せる今日、中央に抗するものは、いづこにもその地盤がありえない。かつ陝西の地方は年々飢饉にして大兵を入るべからず、よしんば軍の兵糧の蓄積ありするも、民衆は何によつて生くべきか、兵は民なくして存在の意義なし。かくのごとき軍閥の永續せずして自ら崩壊すべきは明らかである。兄はこれを知るや否や。兄はまたロシアと交結するこの噂があるが、これは自ら毒盃をあふるにひきしく、好んで死地に赴くものといはねばならぬ。余は兄と艱難を共にすること多年、よく兄の人格を知る。今や黨國革命成功に最も緊要なる際、兄が廣西派のいはゆる左派の連中にあやまられて、危地に陥るを見るにしのびない。兄も己を知るもの、ために、深く思をこゝに致されたい。これを要するに革命の大義は順逆を明かにするにあり。兄にして今瀾然としてあやまちを知らば、改むるに早きに如くはない。或は海外を涉歴し、新知識をあさり、或は悠々自適休養して、新天地を開くも可である。余は兄のために、中央にあつて兄の安全を保證し、その希望を達成せしむるに努むるであらう。もしまだ兄にして時局の善後處置に關し、他に意見あらば、不肖代つて中央に説き、必ず採擇せしめ、その實行を保障するであらう。

この通告は、要するに馮玉祥に向つて、外國に去れし命じたものである。蔣介石は馮玉祥に對して

右の最後通告を發するに同時に、閻錫山に向つて、西北國民軍の接收處理を命じた。即ち蔣介石は一、馮を外國に逐ひ出し、二、閻をして西北軍の後始末に當らしめんとしたのである。しかし閻錫山は蔣介石の馮玉祥に對する壓迫が強くなればなるほど、馮玉祥に對して益々深く同情し、彼を庇護せんとする態度に出で、少しも蔣介石の意を迎へやうとしない。

三

閻錫山は五月二十二日馮玉祥にあて、下野外遊勸告の第一電を發した。この電信において閻錫山は先づ既往における両者間の親交から説き起し、國民軍と南京政府との間に誤解を生じ、つひに今次の事態を惹起するに至つたことを深く憂ひ、その和解に奔走したことを述べた上で、

- 一、今は建設の初期で、破壊的行爲は避くべし。
- 二、軍閥の所爲は一切これを避け、國家の建設を完成すべし。
- 三、救國の本黨主義に悖るこゝがあつては、總理の靈に申譯がない。
- 四、北方各省の饑饉に苦しむ人民をこれ以上苦めてはならぬ。
- 五、昨夏蔣、馮、閻三名は北平に落合つて一意協力して國事に當ることを誓つた。この誓ひを忘れてはならぬ。

の五ヶ條をあけ「兄の苦しい胸中はよく推察出来るが、然し何事も黨國のため、全人民のためであ



る。此際國土を戰場化するこゝは十分慎まねばならぬと慰撫し、その起兵を停止せんことを望み、最後に「兄は此際須らく外遊し、以て今日の難境を脱すべし。但し外遊は兄のみにはさせぬ。余も亦兄と共に同行するであらう」と結び、更に九月二十六日、大要左の第二電を送つた。

余は黨國の爲め、人民の爲め、また我等自身の爲めを考へ、即日一切を投出して下野の禮儀を以て干戈に代へ度いと思ふ。余は已に外遊に決した。もし兄の驥尾に附するを得ば幸である。余は歸郷父の事を處置し終れば直ちに家族を纏め、運城に赴き、兄を迎へるであらう。兄は一面通電を發して國民に告ぐると共に、令夫人を伴うて來省し、部下軍隊は皆な中央に返し、編遣會議の辦法に依つて改編し、以て、われ等二人は早く共に外遊の途につくべし。

兩電ともに、その措辭懇切を極め、情誼を盡したものである。右二通の勸告電信に接した馮玉祥は閻錫山の好意に深く感激し、折返へし、廿七日付で、大意左の如き返電を閻のもとに寄せて來た。貴電拜誦した。君は黨國の柱石であり、儕輩の欽佩する所であり、また中央の信頼も厚い。されば少しも下野する必要はないのである。しかも共に手を携へて外遊せんことを勸告されるのは誠に冥加の至りである。余の下野宣言は既に起草中で、近く國人に公告せんことをするが、唯各處の電報は多く通ぜず、山西を経る時に之が轉電をお願ひする。運城に於いて面會を申込みられたことに對しては、勿論即日出發し面會すべきであるが、近頃謠言盛なる時、漂然山西に赴けば、君が疑はれ

るこゝを心配する、且つ余の宿病尙ほ癒えず、旅行にも困難である。故に謠言も静まり、體力も多少恢復するを待ち、直ちに掛けけることにしたい。世の毀譽褒貶を遠く去つて、共に外遊するこゝは、如何に愉快であらう。云々

右の返電に對し、閻錫山は翌廿八日付を以て更に改めて左の如き電報を馮にあて、送つた。

廿七日付電報拜誦した。携手同遊を承諾されて非常に欣幸である。黨國建設の初め賢者多し。余は下野の初志を貫徹せんことをす。父親の年齢老ひたるも、精力尙ほ強く、顧慮する所毫もなし。我兄の決然として即日山西に來り、以て速かに共に外遊せんことを請ふ。謠言なき氣にかける必要はない。我兄の高明なる當に能く之れに鑑みるであらう。弟は前日郷里に返り、既に家事整理も緒に就いたから、直ちに眷族を携へ、運城に赴き尊駕を恭候する。海天氣爽かにして病體を攝養するには申分がない。云々

こゝにおいて、馮玉祥は閻錫山の勸告もだがたく、いよく第二集團軍總司令の職を抛棄するに決し、五月二十七日、河南省華陰から、左の下野通電を發した。

玉祥身を軍隊に投じて三十年、第一革命に際し、義兵を灤州に擧げて以來、十八年間或は袁世凱の帝政破壊に、或は張勳の復辟討滅に、また近くは北伐に従事する等、一として同志と共に協同奮闘せざるはなかつた。予の微意はたゞ自由平等を求むるにあつて、成敗利鈍はもごより希ふこ



ころでない。北伐完成して大局定まり、全國治を望む時、はからずも内亂また起り、武漢兩廣の亂となつた。予は華陰に籠り、専ら病を養ひ、ひたすら内亂終熄を希つて居たが、不幸予の誠意は誤解され、謠言蜚語紛々として起り、眞に遺憾に堪えぬ。予は國利民福のため、大局の分裂を避くべく、謹んで身を退き、國人に謝せんことを欲す。五月廿七日よりあらゆる各處の文電は一概に謝絶し、これより入山讀書し、我が初服を遂ぐ。但し太平の民となり得れば願ひ足る。希くば邦人君子、予の衷情を諒されたい。

四

かくして馮玉祥は下野した。しかし、西北國民軍はその不渡り給料二十萬元を中央に要求し、依然として反蔣態度を改めない。こゝにおいて蔣介石は六月十二日、緊急軍事會議を開き、改めて討馮決議をなし、閻錫山に向つて、武力を以て、馮の外遊を強要し、國民軍を改編せよと命じ、平漢、隴海兩線より鄭州に向け總前進命令を下した。六月十五日、蔣介石は

廣西派討伐一段落を告げ、孫總理奉安祭滞りなく終了せる機會に、予は下野の決心をなしたるが、國內政局は一波未だをさまらざるに一波又來る状態に在り、廣西派の反逆漸く治まらんことをすれば、馮玉祥はロシアに結びて國內を擾亂し、時局當に重大なり。中央は馮に對し、極力歸順を勸告したるも、馮は故意に事を構へて中央に反抗せんことをしつゝ、あり。此の國家多難の時に方り、予は下野

するを得ず。國民の諒解を求め、黨國の爲めに、茲に努めて留任することゝした。諸兄之を諒せよ。この通電を發して、あくまで討馮遂行の決意を天下に表示し、次いで、張學良を討馮後路總司令兼東北總司令に改任し、何成濬、劉光等を奉天に派遣して、その積極行動開始を要求せしめ、また閻錫山を西北宣撫使並びに軍事監督に任じ、討馮軍の先鋒たらしむるに決した。

しかし、張學良の對馮行動は依然として申譯け的の關内出兵に止まり、閻錫山に至つては、一兵も動かさず、對馮戰備の代りに外遊準備を急ぐのみである。しかし蔣介石の態度硬化は却つて馮、閻兩者間の諒解を促し、馮玉祥はいよく山西入りに決し、六月二十日家族を連れて、華陰を發し、二十一日運城に到着、介休まで出迎へた閻錫山夫妻も二十三日、太原に入つた。

馮玉祥の太原入りによつて、局面は直ちに緩和し、二十四日蔣、馮、閻の三人は同時に左の通電を發することゝなつた。

蔣介石の通電

閻錫山氏の報告によれば、馮玉祥氏は既に運城に到り、時局は平和解決の見込み充分となつた。中央今次の措置は黨規を明かにし、反逆者處罰の方針を決すること共に、他面國內平和を主眼とし、實行上寛大の措置に出でた。余は二十三日南京發徐州を経て北平へ赴き、閻氏に一切の善後措置を相談する積りである。閻氏は總て中央の命に基き、黨國和平の爲めに盡瘁したが、その行爲は



正に革命軍人の模範、國民革命に對する功勞絶大である。今閻、馮兩氏共に外遊せば、國防を急務とする西北の安寧維持覺束なきを以て、中央は正式決議に依り、閻氏を西北宣撫使に任じ、西北の政治及び軍事一切を委ねた。全國同志は余と共に、功勞絶大なる閻氏に感謝するに同時に、氏をして外遊の意思を思ひ止まらしめよ。

#### 馮玉祥の通電

余が蔣介石の獨斷專行ありたる際、兵を山東より退け、更に河南より引きたるは、一に正義を愛する我が軍隊が、余の命を俟たずして、彼の横暴の處置を罰せんとし、その爲め全國を禍亂の蒼きせんことを懼れたるに在り。今や閻氏の情理を盡したる勸告に依り、余は黨國の和平の爲め、斷然外遊の決意を爲せり。余の最も憂ふる處は、余の數十萬の軍隊の處置なるが、余は閻氏の言を信じ、一切を閻氏の處置に一任せん。而して閻氏の外遊は、余の外遊の條件ならざるを以て、閻氏は永く留まつて善後措置に當られん事を希望す。余の眼中には蔣介石なく、只だ黨國の平和あるのみ。

#### 閻錫山の通電

余の微力を以てして干戈の争ひを文書に依る解決に迄で漕げ付けたるは、余の最も満足する處にして、之れ馮氏の黨國を思ふ念に、蔣氏の寛大なる措置に依るもので、兩氏が徳薄き余を信頼



馮玉祥・蔣介石・閻錫山



せられたる賜に外ならず。余は今や思ひ残す事無き故、一切の公職を辭し、馮氏と共に外遊すべし。河北、熱河、察哈爾、綏遠各省首席委員、平津衛戍司令等は、總て中央の裁量に依り、適宜更改し、西北の軍權、政權一切を中央に歸屬せしめ、名實共に統一の實を擧げられんことを中央に冀ふ。

以上の通電において、蔣、馮、閻にも、平和的解決を主張し、黨國のためをはからんことを標榜してゐるが、しかし三者各々異つた立場から、各自の意志を閃めかし、互ひに相容れない。殊に閻錫山の「馮氏と共に外遊すべし」と云へるは、蔣介石の「閻氏を西北宣撫使に任じ、西北の政治及び軍事を委ねた」と云へるに、全然相反するものである。

蔣介石の對馮策は前記の如く、一、馮玉祥を外國に逐ひ、二、閻錫山をして西北國民軍の改編に當らしめ、以て、三、支那の統一を完成せんことをある。されば馮玉祥を逐ひ出すことに成功しても、閻錫山も同時に外遊することゝなれば、第一、西北方面の善後策に當るものがなく、また第二、閻に對する義理合上、蔣も亦下野しなければならぬことゝなつて來る。これにおいて、蔣介石は、一、馮玉祥を逐ひ出し、二、閻錫山を引き止める目的を以て、六月二十三日、南京を發し、二十五日北平に到着した。

蔣介石の胸中には、乃公自ら出馬したならば北支那の紛糾は立ちどころに平定すべしとの自信が



あつたのであらう。彼は北平到着の當日、即ち六月二十五日付を以て、西北方面の諸將士に對し、左の訓電を發し、已に國民軍を吞むだかの態度を示した。

閻錫山の報告によれば、馮玉祥の外遊には誠意あり、大局は和平解決を望むべく、實に黨國の幸なり。各同志よろしく大義を明かにし、中央に忠を誓ふべし。西北軍は閻錫山の外遊を取消さしめ、編遣會議の決議通り整理し、至急軍閥地方割據の弊風を打破し、悉く中央に直屬せしめ、中央軍と同じ待遇を與ふべし。馮玉祥の身體の安全は、閻錫山により萬全を期すべきにより、兄弟一致團結西北の警戒に當られよ。

しかし北支那の事態はなか／＼蒋介石の註文通りには行かぬ。何しろ對手は海千山千老獪そのもの、馮玉祥である。武漢派のやうには手つ取り早く片附くものでない、加ふるに仲へはいつた閻錫山もまた十數年間北洋軍閥の間に伍して、腕を鍛えた古狸である。成り上りの蒋介石輩の隨使に甘んずる筈もない。彼は晋祠における馮玉祥との會商に際して「兄獨り外遊はさせない。弟も同行する」に約し、直ちに旅行の仕度にこりか、つた。當時南京の胡漢民、戴天仇等からも外遊中止の勸告に接したが、「馮氏と余と共に外遊するを條件として下野の決定をなせるものである。さればもし余にして一人留まらば、友を欺き、國民を欺くこと、なるであらう。兄弟等眞に余を親愛するならば、決して余の外遊を阻止する勿れ」に返電し、いつかなその初志を變さうとしない。蒋介石が閻

の態度を焦慮して、その駐平代表何成濬を太原に急派し、改めて閻錫山に馮玉祥逐ひ出し、西北國民軍引きうけを勸説したが、閻錫山は頑としてこれを聞き入れず、あくまで馮玉祥との同行外遊を固守して動かない。

そこで蒋介石は六月三十日閻錫山の來平を求め、親しく北京飯店の樓上で、百方外遊斷念を勸告したが、閻は依然として蔣の言ふところに耳をかさない。無理に引き止めんとするや、彼は病氣を稱して交民巷の獨逸病院に身をかくしてしまつた。假病は支那政客が行きつまつた時に用ふる常套政略である。閻錫山入院の一事は以て當時蔣、閻、馮の三角關係の如何にデリケート化したかを推すに足るであらう。

蒋介石がさきに廣西派を一蹴した勢を以て、一氣呵成に馮玉祥を彈壓しやうとした計劃はかくして事毎に蹉跌つゞきである。第一、討馮命令一下で、馮玉祥は一縮みに縮み上つてしまふであらうこの期待は勿論外れた。第二、馮玉祥と久しく犬猿の間柄にあつた閻錫山は好機到れりとなし、自ら進んで討馮軍の先鋒を承るであらうこの豫定計畫もまた前記の如く意外の番狂はせを生じた。第三の蒋介石の期待外れは馮軍内部の瓦壞策の齟齬である。最初韓復榘と石友三軍は中央服従の聲明と同時に、馮玉祥軍に向つて戈を逆にし、南京政府のために討馮軍の先鋒を承るものと豫期してゐたが、彼等はたゞ馮玉祥の陝西退却、河南拋棄の命令に反ただけで、國民軍を敵に廻はして戦ふ



意志は毫頭無い。

討馮計劃の叙上の蹉跌は云ふまでもなく、北方支那の形勢に甚大の影響を與へた。一時閻、馮の外、唐生智、方振武、劉鎮華などの舊勢力も加はつて一團となり、反蔣の旗を翻し、いはゆる北洋政府を建設するだらうなごこの説も傳へられた。

蒋介石は最初自ら北平に出馬し、四方に睨みを利かせたならば、北支那の雜勢力は期せずして、中央の威令に畏服すべしと信じて來たのであるが、南京政府主席の睨みは北支那の天下には一向利きさうもない。

馮、閻の妙な握手、逐馮計劃の大頓挫で、蒋介石は何のために北平までやつて來たのか、わからなくなり、いよく苦しい羽目に陥つた。機略と智謀に長けた蒋介石は如何にしてこの難局を打開するであらう。

##### 五

馮玉祥と閻錫山とは、久しい間、北支那における二大勢力で、正面衝突こそせざれ、常に互ひに覇を争つて來たのである。同じ國民革命軍に加はつた後においても、なほ且つ二人は京津地盤の爭奪なごで、陰かに唾み合つたものである。たゞ閻錫山が十數年間山西モンロー主義を固守し、軍閥争鬪の將外にあつたので、二三年前まで、馮玉祥ひとり張作霖や吳佩孚を向ふに廻して、中原逐鹿

の舞台に活躍したが、馮の一度蹉跌して陝西、甘肅の山奥へ引つ込むや、閻の勢力はこれに代つてグン／＼京津に伸び、間もなく彼は北支那中原の覇權を握ることとなつた。但し今日の馮と閻とは得意と不遇の差こそあれ、北洋軍人の中で、最後に残つたたゞ二人の實力者である。北支那の天下は廣しと雖も、「二つの舞台に同格の役者が二人」では、さうしても競争を免れない。加ふるに二人の間には常に南京政府の手が入つて、両者を離間しやうとしてゐる。閻を以て馮を抑へ、馮を以て閻を制するは、南京政府の北支那政策である。また實際、山西軍と國民軍とはほゞ同一の勢力で、かりに両者の中、いづれか一方が、南京と提携して、積極的態度に出でんか、他の一方は必ず敗滅を免れぬ。事實、五月末頃の馮、閻両者の關係は間髪を容れざるの危機に瀕したのである。馮は南京軍の北上前、一氣呵成に山西を乗つ取らんとし、閻また南京軍と合して馮を討たんとするかに見えたのである。蒋介石はたしかに閻を以て馮を抑へ得たものと信じてゐたらしい。

然るに、馮も閻もたゞの鼠ではない。二十餘年、群雄亂闘の間に、身を起し、百戦練磨を経た海千山千の古狸である。互ひに相争ふて蒋介石のために漁夫の利を占められるやうな不覺はこらぬ。一旦満を持した弓をおさめて、閻錫山は馮玉祥を賓客として山西に迎へるご云ひ、馮も亦家族連れで、御厄介になりませうご出たのである。北支那争覇の好敵手をその最も失意の時に苦境を救ふた閻錫山の義侠と度量、山西乗取りの計劃を一擲して、對手の國に、丸腰の身を投じた馮玉祥の度胸



こ膽力……こもに凡物では出来ぬところである。

遠き將來の大計のためには、近き目前の小利を惜し氣もなくすてるところ、舊怨を忘れて、釋然新らしい親交の握手を交はすところ、練達酒脱、馮、閻兩氏の如きにおいて、始めて出来る藝當であらう。もし夫れた、蔣介石をなめんがために、家財をまこめる、荷造りをする、車船の切符を注文する、日本で大阪郊外に借家を探す……云ふ大がりの外遊劇を打つに至つては、「狸藝」の極致、たゞ驚歎の外ない云はねばならぬ。對手の虚を衝かう、漁夫の利を占めやう、一石二鳥を打たう、遠交近攻、聲東擊西、合縱連衡、權謀術數、虚々實々、陷阱、籠絡、韜晦、……隙間も油斷も許さぬかと思ふこ、また他の一方には、「面子」を重んずる云ふ一種の武士道、紳士道があつて、互ひに絶對の信頼を許す場合もある。支那の軍閥争闘、及びそれを取り巻く政争劇の表裏は、極めて複雑なもので、到底單純な一本調子の見方では判断がつかぬ。わが識者の多くが常に支那變局の豫測に失敗をくりかへすは、舞臺に立つ役者の「狸藝」を知らぬからである。

政略のためには基督も來い、レーニンでも構はぬ。バイブルから三民主義に早變り。顔で泣き乍ら吐で笑ふ。ソウエート顧問をだまさんがためには、泣いて見せた。蔣介石を載せんがために、わが居室に、蔣の寫眞を孫文の寫眞と並べてかける。閻錫山との諒解提携をはからんがために、わが身、わが家族をあけて、山西へ人質に入れる……何こもの度い狸藝ではないか。それを普通の人間

常態で見當をつけやうとするのであるから、當る筈はないわけである。

六

さはれ、蔣介石もさるもの。苟も國民政府の主席として、態々自ら北平まで出馬し乍ら、馮や閻になめられたま、手ぶらで南京へ歸るわけに行かぬ。そこで彼は奉天の張學良を招き、巧みに學良をして閻にその外遊斷念を勸告させ、同時に奉天當局を使喚して、東支鐵道におけるソウエート勢力の徹底的壓迫を決行させた。

東支鐵道におけるソウエート勢力の彈壓は勿論國權恢復の美名の下に勸説したところであるから、張學良は一も二もなくこれに賛成し、直ちに北平よりハルビンに命令を下して、東支鐵道ソウエート幹部の逮捕その他の彈壓政策の實行にこりか、らしめた。しかし事件の發展に伴うて、蔣介石の當初の計劃の那邊にあつたか、やがて判然とわかつて來た。即ち蔣介石は、一つは露支の紛争をひきおこし、世人の注目を内争から外交に轉換せしめるこ、同時に今一つ、露支の紛争に乗じて奉天當局の外交權を中央に移し、また滿洲鐵道の行政權を南京政府の手に移さうこの肚もあつたのである。蔣介石はこの大きな芝居を打ち出し、内外をしてアツク云はせ乍ら、態々北平から南京へ引き揚げた。蔣介石の手腕も亦驚くべきものがある。



然し、蔣介石の南京に着いた頃、モスクワ政府は意外にも従來の陰忍ミ不抵抗主義の政策を一擲して、俄かに強硬政策をとり、七月十三日支那政府に向つて三日間の期限を附した最後通牒をたきつけた。最初ロシアは少しも手出しせぬものきめてかゝつた蔣介石にまつては意外のことであつた。そこで彼は最後通牒の期限が切れては大變だ、少々周章てた調子で外交部長王正廷の歸京を待たず、七月十六日、モスクワに向けて、釋明的の回答を送つた。然るに南京國民政府の腰が折れたを見てまつたソウエト政府はいよゝゝ威丈高となり、十六日付の回答文に對して、折返し十七日付を以て對支國交斷絶を聲明するに同時に、滿洲里からボグラニチナヤに至る國境において、大部隊の赤色軍を集中し、飛行機その他を以て大規模の示威運動を開始した。

しかしソウエト・ロシアの軍事行動のたゞ示威運動に止まり、赤色軍が深く支那領土内に侵入して來るやうなことの容易にあり得ないことは、ソウエト立國の國是からこれを推しても、明白なることで、(東亞調査會發行「露支時局講演會速記録」所載の「ソウエト政府の東方政策」參照)一時赤色軍の大袈裟な示威運動に驚いた南京政府も間もなくロシアに對する恐怖から脱して、腹を落ちつけた。そこで、最初の計劃通り、蔣介石は露支紛争を機として、滿洲の外交及び交通權を中央に取り上げんとし、對露交渉のために朱紹勳を滿洲里に、東支鐵道の中央合併のために孫科を奉天に

七

派遣するに同時に、奉天軍に向つて國境に出動を命じ、その後援及び後方の警備の名の下に、十萬の南京軍を滿洲に入れんとした。こゝにおいて蔣介石に一杯喰はされたことにいよゝゝ氣が附いた張學良は、一方南京に向つて體よく武力上の援助を斷はるに同時に、他の一方北平及び太原に人を派して、ひそかに閻錫山及び馮玉祥との接近提携をはかつた。蓋し、馮、閻、張の三者ともに、蔣介石の霸權慾、その統一計劃に對する脅威を感じるに於いて、利害の一致を見たのである。反蔣の雰圍氣はかくして北支那一帯に醗酵して來た。從來互ひに争ひ來つた馮、閻、張、即ち西北、山西及び奉天の三大勢力が接近提携して、蔣介石の統一計劃に反抗するの形勢となつて來た。

八

北支那におけるに同時、且つ同様に、中南支那においても、またそろゝ反蔣運動が頭を擡げ出して來た。

第一着にその徴候として事實に現はれたのが、南京郊外の火藥庫爆破事件である。反蔣派の仕業であつたことは云ふまでもない。第二の反蔣事實は刺客が上海の蔣介石邸を襲ふたことである。しかもこの刺客は蔣の手飼の乾兒とも云ふべき黃埔軍官學生であつたこと云ふことは、反蔣運動の手が已に彼の足許に及んで來た證左である。この襲撃に際して、蔣介石が負傷したと云ふ説もあるが、それは確かでない。しかしこの事件以來蔣介石は俄かに神經過敏となつたものか、軍官學生二十餘



名を銃殺に處した。また安徽の方振武軍、河南の唐生智軍等の間にも、不穩な徴候があらはれ、蒋介石は南京滞在中の方振武を監禁した。

當時九月十七日付、唐生智、朱培德、張發奎、劉郁芬、孫良誠、宋哲元、方振武等の名を以て、左の如き汪兆銘推戴、中央政府改造の通電が發せられたこの説が頻りに傳へられた。果して署名の武將全部の與つたことかごうかは疑問なるも、時局柄大いに人心を騒がせたことは事實である。

一、中央政府はさきに編遣費として五千萬元、今回また七千萬元の國債を發行したが、財政部は右の使途につき明細に發表してゐない。

二、露支問題發生以來、現政府の外交方針は國權を傷け、國威を失墜せしめたること甚大である。

三、中央政府の命令は今や南京城外一步も出でず。中央に屬する軍隊は編遣を實行せざるに、地方軍隊のみにこれを強要するは不當である。

四、現政府は全國民生を託するに足らず。故にわれ等は革命の先達汪兆銘の歸國を歓迎し、彼を推戴して新國民政府を組織せんことを期す。

次いで九月二十四日に至り、國民黨第二次中央執監委員會の名を以て汪精衛、陳公博、王法勤、柏文蔚、白雲梯、王樂平、顧孟餘、陳樹人、陳璧君、郭春濤等の署名した政府反對宣言が上海において發表され、反蔣氣分はために益々濃厚を加へた。

即ちその宣言において「蔣中正は專制にならひ、私利をはかり、内國民黨の紛争を開き、外はまた帝國主義および反動勢力を率ゐて、自己を固め、群將を召集して、政權を把持し、民衆を欺き、己れに反對なるものを排除する。蔣氏に對し、同志は全力をあけて、抗爭すること、二年におよぶが、蔣氏は毫も覺るどころなく、その專制の野心、黨を奪はんことを陰謀、賣國の行爲は、募る一方である。本委員等および本黨革命同志が彼を許し得ざる所以である」と冒頭し、内政外交に關する蒋介石の十大罪惡を列擧し、「この革命の障礙を除き、黨内の叛徒を殲滅するために、次の如き手段をこらんとするものである」として、左の方策を掲げた。

一、中國國民黨第二次中央執行委員會はその職權を行使し、國民政府を改組する。

二、眞正の第三次全國代表大會を召集し、對内對外の革命政策を樹立する。

三、不法の第三次全國代表大會以後の一切の命令決議案を否認する。

四、蒋介石政府が自己の利益のために行つた國家の經濟利權の賣り渡し、一切の秘密條約を否認する。

五、蒋介石政府が内戰の用に充てるために發行した七千萬元の編遣庫券に反對する。

これより先き九月十八日、宜昌において突如第四師長張發奎が獨立を宣言し、湖南を経て廣西に向ふや、廣西における廣西省主席俞作柏、李明瑞等の新廣西派も亦、九月二十七日、李宗仁、白崇



禧等の舊廣西派と提携して、反政府の旗を翻へし、兩廣方面の反蔣運動はいよく本物になりかけた。こゝにおいて蒋介石はその信頼する朱紹良を援軍總指揮に任じ、その旗下の第八師、毛炳文の第三師及び福建にある劉和鼎の第五十六師を出動増援せしめ、また最初俞作柏等もこゝに反蔣運動に加はつた。傳へられた呂煥炎に五十萬元を與へ、また廣西省政府首席に任命の約束を與へて懐柔した。これがため、廣東方面の動搖は間もなく鎮靜し、蒋介石は十月七日の故總理紀念週に際して、各方面の反政府運動全滅に歸した。この報告をなし、頗る得意の色があつた。

しかし、反蔣運動は果して蒋介石の云へる如く全滅したと見てよいか。私の觀るこゝろ、反蔣運動は本稿を草するまで(十月初旬)のこゝろ、なほその序幕に入つたのみで、その本幕に入るは反蔣軍の巨頭馮玉祥の起つ時であると思ふのである。今や已に民國革命は群雄亂闘幾變遷を重ねた揚句、こゝに蒋介石と馮玉祥の二人の横綱が對立の狀勢となつたのである。而して、もし兩雄併び立たずと云ふ古來の史則にしてあやまらずとすれば、馮、蔣の衝突は必然來るべく、結局兩者のいづれか、他の一方を征服して、獨り天下を築き出さねばやまぬものも觀なければならぬ。

## 十二 西北國民軍



革命軍閥の卵・バイブルを操典とする「東西發二の模範軍」・國民軍の礎石・救國愛民主義・我們爲廢除不平等條約而拚命・九方面軍制より十二師制へ・軍縮費で軍備擴張か・國民軍の長所と短所

馮玉祥が革命軍人としてそのスタートを切つたのは、彼が南京で親しく私に語つた如く、清朝の末年、第二十鎮第八十團第三營長として遼西に駐屯してゐた頃のことである。而して馮玉祥の今日の武力も遠く遡つて、その起源を訊ねれば、また第二十鎮第八十團に發してゐる。同團には張之江、李鳴鐘、張樹聲、韓復榘など、錚々たる青年士官があつて、みな馮玉祥と志を同じうし、その指導の下に一切の行動をこもにした。宣統三年、第二十鎮が演習のため、灤州に移駐中、辛亥革命の勃發に會し、馮玉祥が第七十九團の王金銘、施從雲等もこもに灤州の獨立をはかるや、張之江、李鳴鐘、張樹聲、韓復榘等も亦これに加はつたが、やがて計劃の漏洩もこもに、彼等は擧つて逮捕されたのである。しかし、志を同じうし、辛酸を共にした第二十鎮第八十團第三營の士卒は馮玉祥を中心として、益々結束を固め、こもに一つの新しい「革命軍閥の卵」を形成した。

然し、馮玉祥が今日の如き強大なる武力的勢力を築きあげた最初の礎石は何かと云へば、それはまさしく第十六混成旅であつたこと云はねばならぬ。同旅は北洋軍閥の勢力の一部で、最初は保守主義の舊式軍隊であつたことは云ふまでもない。然るに馮玉祥の第十六旅長となるや、その將卒の間に、基督教を傳道し、將校は悉く洗禮を受け、軍隊は毎朝バイブルを讀經し、神の名の下に軍紀を振興し、士卒の操行を矯正し、こもに一つ全く風の變つた軍隊單位を作り出した。



馮玉祥は自身兵卒上りであつたので兵卒の人心收攬には妙を得てゐた。また馮の基督教による士卒の教化力は驚ろくべきもので、彼はいつの間にか、旅中抜くべからざる勢力を布植し、またこれによつて士卒の興望を一身に集めた。民國四年の秋、段祺瑞に睨まれて、一時旅長の職を去るこゝになつた後においても、依然同旅の士卒を操縦し、張勳復辟の事あるや、全旅擧つて、馮玉祥をかつき出し、再びその指揮下に立つた云ふまゝこゝに珍らしき出来事は、第二章に詳述したこゝろである。

馮玉祥は張勳の復辟討伐に際して援群の殊勳をたてた。當時同旅の士官は第二十鎮時代の舊部下たる張之江、李鳴鐘、韓復渠等の外に鹿鍾麟の如き有爲の材を加へ、北方支那の一角に赫々の武名をあけた。その後馮玉祥は第十一師長に昇進したが、同師の中堅部隊は依然として第十六混成旅であつた。馮玉祥は第十一師を率ゐて陝西及び河南に督軍となり、頗る得意の色があつたが、間もなく吳佩孚の爲めに陸軍檢閱使に祭りあげられ、第十一師及び附屬の三團を率ゐて、北京の南苑に移駐するこゝろになつた。

民國十三年夏、第二奉直戰爭に際し、馮玉祥は第三軍總司令として熱河方面に向ひ、同年十月突如として班師回京、北京クーデターを決行した。而して馮玉祥軍はこの時、その配下の部隊を國民軍と改名し、「救國愛民」の標榜の下に擧起し、直隸軍閥の倒潰にあたつた。こゝには、第三章に詳しく記

述したこゝろである。

二

民國十三年の北京クーデターは、馮玉祥、胡景翼及び孫岳の三角同盟によつて決行され、馮玉祥直屬部隊は國民第一軍を編制し、胡景翼の後援第二軍は國民第二軍、孫岳の京畿警備軍は國民第三軍と稱し、馮玉祥をあけて、國民三軍の總司令に戴いた。その後胡景翼死して、第二軍は岳維峻の指揮下に屬したが、岳維峻も亦山西に捕はれ、同軍はために一時殆んぎ潰亂に歸した。その後岳の釋放さるゝに至り、陝西省内に殘兵を集めて再起し、同省の東南及び河南省の西方に據つて國民軍の別働隊をなした。

國民第三軍は國奉戰爭の當初、國民第一軍とこゝも天津方面において轉戦し、李景林を逐ふた後、孫岳は直隸督辦の地位を得たるも、間もなく奉天軍に逐はれて、國民第一軍とこゝもに敗退し、孫岳自身は山西に入り、太原にて病を養つたが、民國十七年春死去し、その舊部下は多く山西軍に編入され、徐永昌の指揮下にある。

馮玉祥軍の主力は要するに第十六混成旅の成長した國民第一軍で、その兵力はクーデターの直前、一師三旅であつたのが、クーデターの直後俄かに膨脹し、馮玉祥が張家口にあつた頃已に二十萬と號したものである。